

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十六年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇四〇号



日川協加盟

No. 1040

同人特集・私の一旬

一月号

「川柳塔」は大正十三年の「川柳雑誌」創刊から数えて、平成二十六年で九十周年を迎えます。これを記念して合同句集「川柳塔」を発刊致します。合同句集は昭和四十九年以来十年ごとに刊行し、今回は平成十六年に続く第五集となります。同人・誌友はもちろん、一般の方々のご参加も歓迎致します。一人でも多くのお申し込みを心からお願ひ申し上げます。

川柳塔社

☆刊行 平成二十六年七月一日発行

☆締切 平成二十六年四月十日(木)

☆体裁 B6判・ハードカバー・上製本

八〇〇頁(予定)

☆参加費 五千円(句集一冊呈・送料込み)

☆掲載句 一人 十五句(自選)

☆申込

所定用紙に掲載句(平成十六年以降の発表句、または未発表句)を記入し、

左記川柳塔事務所へお申込み下さい。

なお、参加費は同封の払込用紙でお願

いします。

☆送付先

〒543-0053

大阪市天王寺区大道一―一四―一七

花野ビル二〇一号

川柳塔社 合同句集係 宛

TEL・FAX (〇六) 六七七九―三四九〇

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

bikenart@ea.mbn.or.jp

天翔る

小島 蘭 幸

明けましておめでとうございます。

橘高薫風先生の

巡る忌や師は不死鳥と号されし

の色紙を玄関に飾り、穏やかな新年を迎えました。今年には川柳塔社にとつても、私にとつても重要な年であると考えています。薫風先生の色紙を毎日見ることよつて、麻生路郎先生をはじめ、故人となられた中島生々庵、西尾葉、橘高薫風、歴代の川柳塔社主幹の情熱、パワーを少しでもいただければと思つています。

はじめに重要な年と書きましたが、私を奮い立たすために、川柳塔社の今年の主な行事を書いておきます。

2月14日 第2回各地句会代表者・役員拡大会議

4月10日 合同句集『川柳塔』の締切日

7月7日 路郎忌句会

10月4日 第20回川柳塔まつり、川柳雑誌・川柳塔
創刊90周年記念川柳大会

2月の拡大会議は、各地の皆さんとの交流を深める場でもあります。特に地方の皆さんの貴重なご意見、ご提案を期待しています。

4月の合同句集『川柳塔』は10年に一度発行しています。全国何方でも参加出来ますので、是非、あなたの作品で飾っていただきたいと願います。

7月は路郎先生の50回忌です。私は路郎忌句会の前に、今年も尾道川柳会の皆さんと一緒に、尾道千光寺の路郎先生の文学碑に参拝したいと、考えています。

10月の90周年大会は、私が川柳塔社の主幹になって初めての大きな節目の記念大会であります。これが最初で最後という決意で、全力で取り組みたいと考えています。是非共、ご協力、ご支援をお願い致します。

さて、今年には午年、私は本号自選集の中の

天翔る手綱を緩めてはならぬ

を年頭吟としました。

本年が皆さまにとつて、穏やかで豊かな年であり、ますように、心から願っています。

座右の句

女房が坐り直すと恐ろしい

(春雨)

私の句

家計簿のどこに付けよか機密費よ 竹口清信

川柳塔 一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「午」

■巻頭言 天翔る……………	小島蘭幸……………(1)
結核と文芸……………	西出楓楽……………(2)
川柳塔(同人吟)……………	小島蘭幸選……………(4)
川柳塔の川柳讃歌 ¹⁰⁹ ……………	木津川 計……………(46)
西尾 葉句抄……………	……………(47)
自選集……………	……………(48)
温故知新……………	……………(51)
水煙抄……………	川上大輪選……………(52)
新川柳鑑賞 ²³ ……………	麻生路郎……………(74)
英語 de Senryu ²⁵ ……………	吉村侑久代……………(75)
誹風柳多留一二篇研究 7……………	……………(76)
江戸を樂しむ ¹³ ……………	小栗清吾……………(78)
民族の詩歌 ¹⁹ ……………	三好專平……………(79)
愛染帖……………	新家完司選……………(80)
檸檬抄「書く」……………	竹治ちかし・大内朝子共選……………(84)

結核と文芸

西出楓楽

結核は戦中戦後をピークとして亡国病と言われ、現代の癌より恐れられた。癌よりも質の悪いことには空気伝染することと、若い世代の罹患率が高かったことである。

この病気が文芸に及ぼした影響は大きく、正岡子規・石川啄木・木下利玄・中原中也・新美南吉・織田作之助など様々な分野の若い命を奪い去った。これらの人々が天折することなく存えて才能を発揮していたら、もっと日本の文芸を豊かにしていたであろうと悔やまれる。

死と対峙しながらの過酷な手術による治療、長い療養生活をきっかけに文芸に親しんだ人も多いようである。そして幸いにして病から生還をして健康を取り戻し、活躍をした人も数え切れない。

わが川柳塔でも、故人では橘高薫風・高杉鬼遊・谷垣史好氏、板尾岳人現相談役は結核からの生還組で、ご存知のように川柳塔の屋台骨を作り支えて下さった。

一路集「仕事」……………安土理恵選……………(87)
「ユニーク」……………米澤俣子選……………(88)
「流」……………横山捷也選……………(89)

初歩教室「暦」……………山口光久……………(90)

川柳塔鑑賞……………乘原道夫……………(92)

水煙抄鑑賞……………西内朋月……………(94)

せんりゅう飛行船³⁷⁾……………新家完司……………(95)

津軽発おもしろ景色¹⁹⁾……………高瀬霜石……………(96)

■エッセー 能と川柳……………藤井則彦……………(97)

同人特集 私の一旬……………三島淞丘……………(106)

追悼 津川紫晃さんを悼む……………青砥たかこ……………(112)

川柳塔合祀祭法要……………水野黒兎……………(128)

十二月本社句会……………朱夏・勝弘……………(168)

句会燦燦……………(108)

各地柳壇(佳句地十選/竹信照彦・籠島恵子)……………(113)

一月各地句会案内……………(126)

■エッセー ティータイム、ことは遊び³⁾……………(129)

柳界展望……………(128)

■編集後記(ひとこと/杉野羅天)……………(168)

座右の句

マドラーの先に沈んでいる本音

(美 籠)

私の句

芳醇な十年ものの恋でした

吉 井 菜々子

川柳塔の今があるのはこれらの方々のお陰と言っても過言ではない。

胃半分肺半分の湯呑かな 薫風
枢出た跡形もなし療養所 薫風
みな肺で死ぬる女工の募集札 彬
息づまる煙の下の結核デー 彬

明治初期まで結核は労咳と呼ばれ古川柳にも多く詠まれている。

労咳はしのびがえしの内でやみ
労咳のもととは行儀をよく育ち
労咳のもととは物のけから起こり

新薬の発明で飛躍的に結核は減ったものの、現在でも過去の病気とは言えず、日本にもおよそ二万五千人の患者がいると聞く。最近、看護師や学校の先生が発病して、周りに感染したというニュースが伝えられた。咳・痰・微熱が二週間以上続いたら、医師の診察が必要ということである。

何を隠そう私も小学校四年生で発病、半年間の休学を余儀なくされた。テレビもゲームも無い時代、父の本棚を漁って無聊を慰めていた思い出がある。



小島蘭幸選

大阪市 伏見 雅明

欲のない言葉は柔らかに響く
百二歳童女になって母達者

平成に昭和の歩幅押し通す

ちやぶ台で覚えた漢字忘れない

パスワード忘れ口ポット動かない

台風が妻のコップで吹き荒れる

倉吉市 牧野 芳光

樹木医が大往生を遂げさせぬ

大樫の箒に白鳥座がかかる

金曜日来るまで死んだフリをする

恋をしていたのかキャベツひび割れる

間歇泉 地球の生臭い呼吸

落ちそうなトンガリ屋根の十字架だ

大阪市 田浦 實

赤ん坊のくしゃみは神のおくりもの

癌検セーフにわかには遣る気湧いてくる

鏡見てよそいき顔に切り替える

職業欄に無職と書いて少しうつ

窓から生駒ほんやり眺め無我の境

窮即変変即通の古希なかば

八幡市 今井 万紗子

秋たわわやっぱり旅に出かけよう

追伸に芋煮会です来ませんか

惚けられへん怪しい話多すぎる

落しどころくるりくるんでオムライス

ラブサイン少し甘めの玉子焼

懐が寂しくなつてタマゴ買う

大阪市 谷口 義

忘れても良いかと思う歳その他

中肉中背だからどうだというのです

取りあえず気合は入れておきました

十一月からお雑煮を食べている

ユーモアがあるではないか誤字脱字

時どきは手拍子ほしいおばあさん

和歌山市 福井菜摘

鉛筆を削ると鬨志湧いてくる

土壇場の勇氣に母の応援歌

やりぬくと後姿に書いてある

肩パッド外しらしさを取り戻す

思いようひとつで丸い絵が描ける

そして今ホットな手紙書いている

橿原市 安土理恵

コスモスと揺れる加齢をいとおしむ

山茶花散華兄の命日近くなる

荒むころしずめに仰ぐ沙羅双樹

希望まで翼はどうぞ折れないで

息をひそめて娘二人のはかりごと

吾亦紅の吐息わたくしの吐息

和歌山市 木本朱夏

平等に老いが来るとは限らない

雑種ですもの逞しい手足

野に咲いて由緒正しき雑種なり

雲湧いてイヤな女になる予感

飯免でよろよろ生きておりますわ

御仏の千の腕も傷まみれ

堺市 柴原道夫

蓋を開けては閉じている日曜日

亀の池亀数えてはうれしが

ミミズのたうち回っているは快楽か

落書きの円鮮やかで傲慢で

夕焼けに溶けそう棒立ちの幼児

スナイパー今宵は猫をふところに

西宮市 吉井菜々子

街の灯も秋に寄り添い琥珀色

静けさも非日常という旅路

薪ストーブそんなくらしもいいですね

威風堂々舞って枯れ葉の終焉だ

膝ぽんと叩いて退治する弱気

好感度上げるつもりはないヒール

高槻市 初代正彦

もやもやがくしゃみ一つで吹っ切れる

スポーツ紙丸めて覗く七年後

面白いお人のようで凄い方

リーマンショックオイルショックに鍛えられ

オレオレがまだ繁盛する世間

阿呆になりきるスイッチ偶に入れてみる

熊本市 永田俊子

三桁の寿齢ただただ拝む御来光

百の橋渡って寒暖百の風

波高し力集めて咲きし老梅

孤高松の木起てよと叫ぶ災害地

追いかけて確かめましたのど仏

結婚離婚ままごとめいて冬に泣く

弘前市 高瀬霜石

貸し借りの借りを忘れてばかりいる

過労死の一步手前にいる財布

坂道ではつきりと出るパワーの差

骨のある男百人敵がいる

魍魎魍魎 狐狸妖怪を生む派閥

わたくしの中の1万本のネジ

堺市 澤井敏治

赤兎馬めざし辛抱の樹に水をやる

年新たな歳を忘れて空に舞う

世界中初夢に見る富士の山

ひとめふため金平糖を食べながら

百八つでは拭えない貪瞋痴

クリスマス昭和改元忘れさず

大阪市 古今堂蕉子

暴れ馬乗りこなし今日半世紀

攻守逆転守ってた子に守られる

酒に弱く口の達者なのがひとり

指揮棒を奪いあつて音がする

スケジュール続く明日を信じてる

一年の足音立てて喪の葉書

大阪市 井丸昌紀

定員がひとり減ります宝船

少数派半濁音にある美学

ガイドブックの通り歩いただけの旅

口当りの良い酒の罍にはまる

ほどほどの男信用できません

野の花を愛しく思う子が愛し

奈良県 中原比呂志

新年は偽装のしない七草で

御破算でお願いします初日の出

贅沢な神で二十年ごと建て替える

暴れん坊神様もいた古事記伝

古希傘寿ハードル越えて医者通い

未消化の日記で一年を跨ぐ

松原市 森松まつお

政治論川柳論も出るのれん

三人で飲むと決まって出る話

のど飴にむせて咳き込むあほらしさ

ミュージカル観てきましたこの服で

妥協癖ついてる妻のダイエット

韓流におそまきながらはまり込む

西宮市 緒方美津子

喜びを分かち合ってる空と富士

結び目に卒寿の母が居る初春

すき通る子等の声あり朝の秋

コマージュに負けぬお節は手作りに

耳元で命乞いする師走の蚊

月に酌むこたえられない新走り

西宮市 牧 潤 富喜子

経営もあるからなあと海老が言う
あたり前の中では何も生まれぬ
辞めて済む責任ばかり見せられる
二度咲いた柀ついに枯れ出した
厳しさを底に持つてる父が好き
サイレンの音心臓に超わるい

鳥取市 岸 本 宏 章

燻し銀の芸に勲章また似合う
俯いたままで万歳叫べない
素人がプロの選手のミス叱る
規格外野菜農家は捨てられず
核のゴミ捨て場に総理口閉ざす
戦争の語り部やがていなくなる

香芝市 大 内 朝 子

迎春のポスト目出度い顔になる
夢食べてもう一花を華かせたい
周平の人情に会う寒い夜
人様に会々と笑顔になる魔法
娘が病んで虫一匹が殺せない
青空を味方に越えてゆく試練

大阪市 川 端 一 歩

見ましたか相田みつおの楷書の字
反戦の声が聞こえるピカソの絵
秋淋しアンパンマンの歌うたう

ゲンまでもいじめに会っている怖さ

文化の日麻生路郎は声高し
元旦はうれしや彬誕生日

鳥取市 両 川 無 限

ふる里の風に襟首つかまれる
句読点打って乱れをくい止める
森からの長い手紙を読んでいる
男の手放しゆかいな風に乗る
にんげんに恋をするのはもう止めた
尊厳死そんな言葉と冬ごもり

高槻市 富 田 美 義

生き残るセリフ就活から学ぶ
残された命見つめる誕生日
介護など真つ平御免尊厳死
脳梗塞オレの手帳は以下余白
襤褸を着て降り立つ里の駅寒し
無理をせずこれから登る山がある

藤井寺市 太 田 扶 美 代

ひまわりのふりを続けてきた老後
ゆつくりと終へ向っているペダル
わたしが貰うこれが最後の賞だろう
蓄えの減り方順調だそう
わたしらしくなるまで推敲をつづける
花が好き門の外まで植えました

鳥取県 齊尾 くにこ

口を切る人をみんなが待つている
ほろ酔いになったら水を得た金魚
駐停車禁止とあつた定年日

スマホ見ていてにんげんを見失う
北風に枯れ葉となつて散ることば
晩秋のほうれい線突つ走る

川西市 山口 不動

仲の良い両親がいてフェミニスト
両の手で温めてます我が余生
ライバルが相合傘だ濡れてゆく

特技だなずけけ言つて慕われる
台風が来る方向に行くフルムーン
ウオーキング信号に来て足踏みす

西宮市 秋元 てる

花活けは備前水引草一本

大正も昭和も知らぬ人とおせち
押入れに老いを仕舞つて街へ出る
家の戸を跨げば影まで息を吐く

目ざわりと言われぬうちに消える術
老いたるか国家もこの頃前のめり

和歌山市 武本 碧

愛というファジーなものが続く幸
先の先読んで穴から出ぬもぐら
ささやきが洩れて噂の渦になる

コンビニは無いが星降る里を恋う

駅ごとに置く人生の句読点

銀河まで続く余生の切符買う

京都市 榑本 宏子

まわらぬ舌祖父のギャグより笑わせる

午前様門の金具が姦しい

牛乳瓶ガチャガチャ五時のご挨拶

ジョークが多くなつたおとこの気の弱り

象形文字言いたい事は言つてある

見栄張つて豪邸買った時が華

鳥取市 森山 盛桜

今日媚びた口を何度もうがいます

ジエネリックなのでワクワク感が無い

抗わず等圧線の上に居る

身につけた愛想笑いに空笑い

勝つたのは勝つたがローブローだった

悔しさも出ぬバツ印赤チエック

河内長野市 村上 直樹

憧れた庭の広さが重い秋

二三億飲んだおかげで貯金ゼロ

気に入りのタイ数本と共に老い

もみ殻の枕は母のいい匂い

血の滴るテキで卒寿の祝い膳

墨痕の滲む余白にある未来

松山市 宮尾みのり

五感みなほやけましたといひ笑顔

大と小へ付く条件のせち辛さ

パソコンが管理患者の顔も見ず

夢の中で手まねきをする人がいる

西暦にすれば思い出みなほやけ

バックボーンにまだ川柳を持っている

三田市 石原歳子

仕方なく遠回りするバスに乗る

あつさりと孫に背丈を追い越され

長電話いつ終るのか椅子よせる

満月に今夜カーテン開けたまま

骨粗症日光浴とお喋りと

万葉人の歩いた道を踏みしめる

大阪市 神夏磯典子

川柳を追いかけてさあ出発だ

年賀状友が沢山居てくれる

あれこれと飲んだが薬より笑顔

磨いても磨いても姑の視野にいる

毛皮服着てマネキンの長い冬

虫でさえ私を癒やす術を知る

熊本県 岩切康子

重宝な愛車へ感謝して車検

高価でも便利さ選ぶ齢となり

親切な友が居るから趣味続く

ご通過の一瞬だけに旗持たす

障子貼り一段二段母偲ぶ

老いてなお重宝しての皮リュック

和歌山市 岩本美智子

瓢箪形のかぼちゃも試食ハローウィン

紅葉狩り緑葉の下に緑茶飲む

夏から冬へやつと粕汁食べられる

仕事した証しにしよう染みと黴

来てほしい来て欲しくない友一人

年毎に足早となるお正月

河内長野市 坂上淳司

膝枕許した遠い日のワイフ

枕上で涙もするし句も捻る

大吟醸瓶を枕に大舩

コンビニのおでんの出しは澄んでいる

コンビニと小児科消えたニュータウン

コンビニが消えて宅地価また下がり

鳥取県 深田俱久

バーゲンに軽い財布持ち歩く

お買物タクシーにした米寿

重ね着で師走乗りきる肚を決め

自動車おりて一年長かった

霜月と書いて気温受け入れる

勲章をもらった友から便り来る

東かがわ市 川崎 ひかり

深読みをするから傷が痛み増す

信用を宝と守る老舗の灯

ながらえば憂き事多きこの世かな

明かせない秘密は胸に刻みこむ

恙なし皆どんぐりの背くべ

松山市 古手川 光

疑えば老舗の味も今一つ

マララちゃんアピール命懸けている

傷付けるヒト科へ地球倍返し

温暖化棲めなくなると雪おんな

相撲からSUMOになっている国技

大洲市 中居 善信

辛抱はおしんに負けぬ母だった

僕の育った足跡がある山の道

片田舎で朽ちる積もりは無いのです

尺取りが計って登る豆の蔓

雑念を海に浮かせているのです

西予市 黒田 茂代

小さいのに買い替えました飯茶碗

登山楽し膝の痛みが消えている

すぐ怒る医師と笑顔のいい医師と

複眼が欲しい前しか見えてない

試行錯誤回転椅子が回り出す

高知市 小川 てるみ

大観の霊峰富士に神宿る

一家言持つていそうな太い眉

正論を吐いて肘掛け椅子がない

オスプレイ家の真上を悠然と

アルバムを捲ると海が満ちてくる

高知県 小澤 幸泉

針穴に母の齢をのぞき見る

歩き疲れ御国の春は遠すぎる

秋味をたしかめている老い二人

聴いてごらんわが故郷の秋の声

ポロポロの手帳と会話老いの部屋

唐津市 坂本 蜂朗

酒飲まぬあなたはもっと好きと言う

老いの欲年年太くなって来る

真面目だと言われ定年まで外野

することがまだあるらしい腹が減る

プライドが素足になれずうろたえる

唐津市 山口 高明

天高く黄金の褥涅槃像

我も人ひとの知らない闇をもつ

議事堂の牛歩何方も腰痛か

病名を訊けば老人性疾患

泣くもんか泣いたら亡父に笑われる

熊本県 高野宵草

臨終の心を学ぶ数珠を持つ
補聴器と眼鏡を着けて今日始め
衰えた脚に老後を責められる
妻病んでのびのび育つ庭の草
化粧瓶増えて三面鏡も古い

札幌市 小沢淳

あの頃の話肴におもてなし
ぶらぶらとぶらぶらが会う元氣かい
人生は風に乗ったら迷ったら
延命無用元氣な時の氣前よさ
負けて勝つこんな戦が続きそう

札幌市 三浦強一

昭和一桁妻は二桁時代の差
八十路まだ大器晩成諦めず
計算に疎く人生損ばかり
怠けてはいない充電しています
局へ走る締切り今日の消印可

黒石市 相馬一花

種馬の歎きを知らぬ飼葉桶
赤ちゃんと逆のコースを歩く老人
自墮落に生きてストレス先送り
突然に生年月日聞く介護
ガムを噛みアルツハイマー遠ざける

平川市 小寺花峯

ナイチンゲールみんな美人になるマスキ
ガン病棟廊下無口で渡り切る
まだお茶に色が着いてる湯を注ぐ
濡れ落ち葉するりと避ける水たまり
一病を抱えて笑うコップ酒

弘前市 稻見則彦

恙なく日めぐりめくる年始め
絵馬笑う他力本願そこかしこ
ほっとする雪の合間に岩木嶺
葬送に合わせたのだと雪が止む
葬送の曲だったのか除夜の鐘

弘前市 岡本花匠

振り向けば九十九折りですふたりみち
八十路行く夫婦のみちに感謝する
心電図正常ですに元氣湧く
健忘症笑いですます長寿仲間
向い風気骨な男育て上げ

弘前市 今愁女

生きる気合い朝のウォーク美味い食
朝寒に早やも真夏が恋しなる
八十路には偽装表示は無理ですか
菊を賞で贈・ぶた汁老人会
好奇心まだまだあつて惚けられぬ

弘前市 高橋 洋子

めつたに出来ないメールなんて温かい

病んでから体で悟るマイペース

冗舌な妻が無口になる厄日

さりげなく恩返しする難かしさ

一本のもみじが凜と松林

弘前市 福士 慕情

刈り終えた田圃で休む冬の使者

一段と大きな音で散る楓

陽の当る山の裏には深い闇

晩秋の川は錦繡敷いている

雪吊りのニュースに焦る雪囲い

青森県 松山 芳生

置き去りにされて色褪せていく遺影

抜き足差し足今夜の酩酊度

歴史の節目に句読点の匂い

ぶどう一房輝きゴッコして笑う

追憶の森で叫んだ愚がひとつ

さいたま市 星野 育子

緊張感はない女性専用車

運河クルーズで観る東京夜景

カギカッコ取れた言葉のひとり言

政治不足補うタイガーマスク

経済大国号どこまで走る

東京都 岸野 あやめ

お元日曾孫三人孫九人

菊活けて神の御声を聴く如し

先生は大先生に最敬礼

孫九人折り目節目の鬘斗袋

知恵の輪がなかなか抜けぬ老いの日々

東京都 まえで とよこ

海あおく小菊こんもり咲きそろう

台風一過かなしみのこる伊豆の島

そろりそろりスコップおろす捜索隊

駅前のてんぶらうどんのえびの名は

ボスポラス海峡に日本人の汗ながれ

横浜市 小野 句多留

街単位祭り準備のプチ平和

うなぎやの天ぷら定で下見する

デュエットの腕はソフトな自然体

すぐ切れる女に貝になるオトコ

ファンではないが楽天には泣ける

横浜市 菊地 政勝

誉め言葉自浄作用として受ける

パソコンも妻も拗ねると手に負えぬ

はじめなく優先席に居るスマホ

私も地球も貧乏揺すりする

ストレスを集められてる喫煙所

富山市 鳥 ひかる

山頂の御神酒五臓に深く染み
もう一人の自分助走路突走る
幸せを信じる長い橋の上
明日起ることを誰も疑わず
塩少し入れた甘さになった祖母

可見市 板山 まみ子

新しい味も良いけどお味噌汁
百歳は楽しいだろか万歩計
良い国の内に入るか我が日本
内幕を知って興奮め美の世界
愚痴言つて少しの晴れと後悔と

犬山市 金子 美千代

自然からしつべ返し秋が無い
機は熟すそつと背中を押してやる
思い出がやさしくなつて辛くなる
引力にとても素直なマイボデー
頭と膝すり減つてゐる撫で仏

犬山市 関本 かつ子

やることはやった夫のいい寝顔
冬支度出窓に一つシクラメン
遮断機が上がるとドットとお年寄
男にも嫉妬あるのに女偏
十二色孫は明るい色が好き

愛知県 早川 遯行

窮屈な鉢で咲かせています花
口喧嘩した夜の味気ないビール
行事には地震の予測入れてない
快方へ向かうベッドの旅プラン
危険だから大都市にない原発

京都市 高島 啓子

脳にまだ伸びしろがあるらしい
電子秤に情状酌量はない
小型でも存在感のある根付
悠然と浮かぶ修行を積んだ雲
軌道修正丸くなりすぎた

京都市 西村 益子

一つづつ諦め生きるこれも古い
気がつけばアバウトばかりこれも古い
ふくよかな御中命の貯金です
片付けを忘れテレビのサザエさん
七年後東北の子は元気かな

京都市 藤井 文代

句の中に本音吐き出しいい気分
まあるい嘘混ぜた会話でとる笑い
素っぴんでは世辞もなければ嘘もない
異常気象自然界から倍返し
好人と言われしばらく口ふさぐ

亀岡市 井上森生

命とは見えぬ力を持つ不思議
難病と仲良くやろうヤジロベエ
得意技貧乏揺すりて凝りを取る
病んで知る生きる命は期限付き
元氣一杯武者振いして喜寿の春

長岡京市 山田葉子

古稀すぎて積木くずしが終わらない
退屈をとろとろ幸せのかたち
行動範囲ひろげてくれるローヒール
後期なのに恋するゆとりあるらしい
幸せを掴みとつてねもみじの手

大阪市 阿野壽美子

急な雨駅の出迎え微笑まし
ダイエツト始めた事をつい忘れ
社交ダンステンポに乗って上機嫌
娘には渋い顔してすぐ承知
お転婆も好きな人にはおとなしい

大阪市 池上清治

メニユー詐欺みんなで言えば恐くない
メニユー詐欺長く黙っていたものだ
雨も止み晴着やれやれ七五三
貸衣裳その場で写真七五三
朝ジューズ生命になると省けない

大阪市 岩崎公誠

褒めすぎの世辞に背中が寒くなる
捨て科白並べ削ってやめにする
邪魔しない程度のガイド具合良い
温室の苺省エネ色淡い
クラス会残り火あつて炎吐く

大阪市 江島谷勝弘

電力は自然のエネに頼りたい
来なくてもいいのに姑来るとい
酒飲みの反面教師そばに居る
一人っ子爺と婆が四人居る
当面は元氣で喜寿をめざしたい

大阪市 榎本日の出

一日が無駄でなかった無駄話
お宝がひとつも無いが元氣な子
お菓は柿とお餅と万歩計
ゴミ分別プラのゴミ入れあふれ出す
まだ笑顔足りませんねと書く日記

大阪市 榎本舞夢

豪雨去り緑の木木に秋気配
霜月は文化美術と華やかさ
秋の夜は淋しさ募るいいもんだ
月明り瞑想更けて寝てしまい
記念日に二人で出で湯プラン立て

大阪市 大川 桃花

ハングルとチャイナ飛び交う渡月橋
被災から不死身のごとく嵐山
筋肉痛わたしはちよつと後で来る
褒められると決つて転ける癖がある
頬に日の丸孫とサツカー視てる幸

大阪市 奥村 五月

あの世では使えぬ金をためてはる
好きですと優しく言つたその昔
五十年水と油が添いとげる
僧侶にも体罰あると知らぬ神
雑魚ですが鯛にも負けぬ志

大阪市 笠嶋 惠美

宿題に生きる力を試される
神神しい朝やけししばし天女なる
点滴の威力は凄いきる顔
うつぶんを聞く度私病んでゆく
喜寿傘寿金婚生きて無事通過

大阪市 熊代 菜月

八十路坂真ん中へんのあばれ馬
天引きが増えて年金また瘦せる
茶柱に今日を占い友と逢う
嫁ぐ娘に母の想いのレモン風呂
カレンダー赤丸の意味また忘れ

大阪市 小谷 集一

雑学で老人会の知恵袋
幸せに慣れて躰があまくなる
ささやかな暮らしを語るごみ袋
隙のない人には隙を見せておく
頑張ろう百歳までは成長期

大阪市 近藤 正

秘密法中央突破する気かい
秘密秘密秘密の好きな安倍総理
汚染水アメリカにまでたどり着き
フクシマは傷癒えぬまま除夜の鐘
都構想見向きされなくなつてきた

大阪市 坂 裕之

毎日を遊ぶだけでも辛そうだ
園児らが真面目に遊ぶ活きいきと
働ける今日に感謝の缶ビール
紅白に分かれた子らに旗を振る
若者にテストされてる免許証

大阪市 佐藤 忠昭

先輩の句集黙読ゴメンナサイ
ボツで良い読み込み不可を心がけ
全ボツも選者の所為にいたしません
ポケットにメモ帖ペンを忘れない
締切日三日前には句を作る

大阪市 津 守 なぎさ

色づいた蜜柑青空ひとりじめ
ブリ大根ずしりと重い里の恩
温泉で初夢期待するツアー
ウロウロとアベノハルカス刻忘れ
青空と海をひと飲み加太の宿

大阪市 津 村 志華子

面白いドラマを描こうまだ傘寿
猿にも衣裳わたしも赤い服を着る
残高と長寿がどうも折り合わぬ
枯葉舞うさよなら言うているのかな
無理せず到我意は申さず生きるべし

大阪市 寺 井 弘 子

何時だつて妻優先の旅プラン
消費税値上げに悄気る招き猫
旅先の記憶に残るハブニング
かつら眉偽装の美形内の妻
連れてゆく口約束のななつ星

大阪市 原 田 すみ子

淡彩から墨絵のようになる夫婦
一途さが白い怒涛となつてでる
飛びきりの今日がもたらす寛大さ
公園で遊んだ孫は陽の匂い
大泣き三日答見付けて腹据わる

大阪市 板 東 倫 子

目を閉じて想う故郷は生きている
酷暑去りホッとする間も無く冷氣
乳飲み児も老いも若きも何故孤独
生真面目な話を聞いてくれぬ友
仏壇で松茸一本臭つてる

大阪市 平 嶋 美智子

なんとなく過ぎた一日寝つかれぬ
良い事があつて笑顔のまま眠る
どん底で切り盛り上手い母がいた
働いて働き小さくなつた母
旅立ちに母は一言争うな

大阪市 升 成 好

豊かさの中に人情置き忘れ
三角に無限を秘めた万華鏡
かみしめてみたら毒舌いい菓
飲兵衛は飲む口実にこと欠かず
お静かに晩学がいま脱皮中

大阪市 松 尾 柳 右子

ジェット機が雲引いている青い空
大相撲見てるテレビ釘づけに
よく食べてまた太ります健康美
爪切りを忘れてました風呂上り
物干しで隣の人と話してる

大阪市 山崎 君子

ペゴニアの赤美しく朝の陽に
朝顔の終るさびしさ種残し
日曜日我が娘と共に一日を
北の友何年ぶるか逢いに来る
お互いに年はとつても幼な顔

大阪市 山本 加お里

目が冴えて枕の位置がさだまらず
わが領地ゆっくり歩く猫がいる
指先の魔術見事な鶴を折る
疲れたら頑張らなくていいのです
好きだから旬には旬の秋刀魚焼く

大阪市 吉内 タカ子

楽天の誠意まんまん応援歌
秋晴れに歩け歩けよネタ探し
孫からの旅の誘いに早支度
前向きの趣味を味方の好奇心
宇宙から聖火が届く世の褒美

堺市 大久保 のん子

あの頃も今もこころは青いまま
弱点は私の個性いとおしい
好奇心未知の扉をこじ開ける
打算ありつくり笑いをしています
土俵から降りる余白の美しさ

堺市 荻野 像山

たくあんも昔を想う泥まみれ
直ぐ来たがたらい回しの救急車
乗せる癖ついて一人じゃ物足りぬ
こむら返り心臓でなく良しとする
大海でブロックさせる汚染水

堺市 奥 時雄

肩肘を張つても所詮絹豆腐
ゴキブリの住居は依然謎のまま
間違いのものは隣で飲んだこと
非情にはなれない脆さが命取り
耳遠くなり曖昧な笑み返す

堺市 加島 由一

達者ですテレビ体操して二度寝
長電話まだ正月の過ごし方
夫婦でも譲り合えない歴史観
アラフォーになる息子達まだ独り
糠に釘だよねで終わる妻の愚痴

堺市 源田 八千代

ステーキ屋のまかないメニュー肉じゃがだ
流行に先駆け接種尉と姥
にこやかに元気に散歩する卒寿
足場組み家のリフォーム大掛り
よく働いた分快適な余生です

堺市 齋藤 さくら

食文化味噌汁鮭の朝御飯

他人には踏み出す勇氣言えるのに
婆ちゃんが迷子になったデイズニールランド
ライバルと言わぬ貴女が立派過ぎ
無視をするつもりなかった見えなんだ

堺市 遠山 唯教

地図を追う駆け出す君に若さみる
短くも熱くて若き日を憶う
どん底の祈り忘れて贅をする
若者にあやかりたいとハイタツチ
目標が老いを輝かせてくれる

堺市 内藤 憲彦

あべのハルカス大阪弁の高いビル
辛いとき遊び心で逃げのびる
日替りの散歩コースは妻が決め
ニュートンも龍馬ピカソも落ちこぼれ
ラッキーが続く宝クジは買わぬ

堺市 村上 玄也

鉾収めたいがきつしよが掴めない
転居機に義理の賀状はとりやめる
長生きの秘訣はこれと和食党
プロ野球オフで淋しくなる茶の間
柳友を苗字で呼んだことがない

堺市 矢倉 五月

一夜明け凜と空気の澄む新春
本年もよろしく庭の柀に
正月の記念写真に亡夫も抱き
勢揃い蟹派と河豚派鍋二台
三ヶ日過ぎて待たれる初句会

堺市 山本 半錢

アルバムの整理独りの賑わいよ
相応の衰え良しとする月日
音の無い夜を写経の筆すすむ
空澄んで物忘れなど小さいこと
若者の歩幅に合わず初詣で

池田市 栗田 久子

午年のスタートいななきも高く
手作りと決めた御節の三ヶ日
年なりの老いを認めた薄化粧
信心の薄さを詫びて初詣で
はこべの芽生え見過ごしそうな小さな芽

和泉市 横山 捷也

補聴器を外そう僕の噂らしい
二病持つ顔は意外と若作り
完璧な人との距離を開けておく
告白をしてから恋は下り坂
だまされた振りをしていた亡母の知恵

泉佐野市 山本 蛙城

あいうえお何忘れたか口遊び
九十過ぎ迷いの道も暇もない
シャンソンのそちらにこちらジャズでゆく
愛してゐる灰になるまで言いません
高下駄とマント知るまい若い衆

茨木市 島田 誠一

車エビもどきに追われ去るホテル
立錫の余地無き富士の御来光
チンピラもへこむおばちゃんの一喝
メニユー偽装濡れ手に粟は許さない
遺言は愚痴と未練で筆をおく

茨木市 藤井 正雄

よそ見して涙拭く間を待つてやる
行かないよ船の別れは辛いから
形見分け覚えの柄にまた涙
朗報を信じて祖母は小豆煮る
名月に似る新印鑑の鮮やかさ

大阪狭山市 矢野 梓

買物を兼ねて散策秋うらら
誤表示も偽装などない妻の味
うっかりと磨いた鍋をよく焦がす
旅に出る妻の気配りメモだらけ
二度と無い今日を生き抜く朝ご飯

交野市 森本 弘風

金木犀夜の目印秋来る
きつちりと仕舞った物が見付からぬ
写経して三途の川の船にのる
超ミニとおさらばをする寒さ来る
ビートルズ知らぬ世代が騒がしい

河内長野市 植村 喜代

としだなあ母に似て来た皺の位置
人間よりペンギンの夫婦えらいよね
今日のこと書いて喋ってうさ晴らす
秋日和外ばかり見て今日も暮れ
優しさにうれしい自治会のバス

河内長野市 梶原 弘光

酒好きの元を辿れば卵酒
身を処する覚悟を決めて口喋む
ジャズ演歌おたまじゃくしはみんな好き
石投げの名人決める同窓会
辛いのは未来志向というコトバ

河内長野市 木見谷 孝代

やり直しきかぬゲームだ人生は
旨そうな柿に描いてとせがまれる
復活のタイトスカートもうはけぬ
悔しさを枕のシミは知っている
手作りのそばがら枕母思う

河内長野市 黒岩靖博

受賞して浮かれず糧に螺子締める

鉛筆を耳にはさんでセリの市

舵取りは妻にまかせておらが春

古事記から日本歴史を読み直す

理想像追っていまだに独り者

河内長野市 谷久美子

内と外使い分けして暮らして

ふる里の棚田に朽ちて立つ案山子

美辞麗句並べずけずけ刺してくる

天か地かあの世へ向かう道しるべ

惚れたのは勝手惚れさせたのは罪

河内長野市 松岡篤

ご近所で子供育てていた昭和

体力は古稀まで妻に勝ってたが

妻信じおせち買わない僕の意地

三面鏡猫背の僕に注意する

あちこちで一句をひねる露天風呂

河内長野市 水谷正子

また一つ何もしないで年を取り

土下座してお詫びする人ありますよ

中国の挑発させて威も守る

美しい人にも一つツバカスが

長電話切るタイミングむずかしい

河内長野市 山岡富美子

小走りにゆくのは暮の影法師

鎌の月擦り剥くこともあるころ

ダウ上昇しても廃炉という地雷

膝頭の愚痴もたまには聞いてやる

海老も蟹も仮面をかぶっていたらしい

河内長野市 山室光弘

独り住まいテレビといつもケンカする

被災地に勇気運んだイーグルス

都落ち悔恨だけがついてくる

柿色に染めてお洒落な秋モード

汚染水止めてしっかりおもてなし

岸和田市 岩佐ダン吉

ヒト科消すたった百個の核兵器

河渡るもう振り返ることはない

正論と思うが挙げた手はひとり

沈黙という切札を持っている

汗全て実るとばかり思ってた

岸和田市 堤 檣代

寒波来る前触れあつて冬仕度

まだ生きるつもりの子防注射

奥様と言われて見たいもう一度

これだけは手離せません電子辞書

空の色見ているだけで寒くなり

岸和田市 雪 本 珠子

シヨウウィンドーお洒落心に炎を付ける

独り者パーチャルベツト世話してる

輪の中で自分の色がまだだせす

日記帳何故か白紙の行がある

哀しみが漸く薄く薄れ風と酔う

吹田市 太 田 昭

婚活を終えた小鳥が巣をつくり

君が代はなつメロなのか孫が聞く

ピカソの絵まだ逆さまに吊ってある

信頼感生まれぬ握手してしまふ

万物の霊長という詐欺師たち

吹田市 大 谷 篤 子

スベアのない人生を生きつくす

モナリザの笑顔見ながら真似ている

レモン一切れ冬の時間を遊ばせる

ますます上を向いていこうと八十路

全没に少し悔しさ湧いてきた

吹田市 木 下 敏 子

電子辞書老いの脳味噌掻き混ぜる

力作の夢がひろがる文化祭

仏さんに庭の小菊をそっと切り

カラオケに歳を忘れて弾んでる

鈍くさい足をしっかり撫でてやり

吹田市 須 磨 活 恵

カラス瓜熟れてゆつくり山眠る

いい友はいいライバルでいてほしい

揚羽蝶過去は知らない方がいい

無駄骨を冷たく笑う冬の月

菊活けてほっと倅せ抱きしめる

吹田市 瀬 戸 まさよ

新聞も本もノロマな読書力

料理屋の偽装職人気質泣く

居酒屋へ家族で旬を味わいに

白桃の品よく美味である高値

外出の化粧スーパリーやめにする

吹田市 野 下 之 男

自衛隊地味な愛の手忘れない

誤表示の高級料理うまいかな

ポッポ屋の一途さ叙勲おめでとう

銀盤に会心の笑みなでしこだ

勝ち馬に乗れと小声で教えられ

吹田市 山 本 希 久 子

てのひらのスマホに広い海がある

喉の奥に言わずもがなを溜めている

終活の合間にグルメ旅をする

車持たぬ身にバス停は遠過ぎる

コンビニの棚におにぎりある安堵

四條畷市 吉岡 修

露天風呂アラブの月もこの月も
私を越えて私が出てしまふ
あのあとでいい人当てた言う噂
時期くれば尚味がつく色がつく
握っても確信のない天女の手

高石市 浅野 房子

住みなれた羽衣なのに迷う路地
夕暮れに話題の多い人がくる
あの歳でああ都落ちされるのか
川柳のハシゴは昔今は医者
くすり飲み目薬さしたさあ寝よう

高槻市 井上 照子

英語力ずば抜け国語字が読めぬ
イコールでつなげる程の娘・婿
いつからか高血圧が住みついた
七癖の中には可愛いくせもある
人恋し無駄話する長電話

高槻市 指宿 千枝子

木守りする柿は鈴なり過疎の村
ドングリころころバスを待っている
良い悪いは試して決める私流
行進のリズムでハタキかけている
お散歩のチワワビーグルにお早よう

高槻市 片山 かずお

みかん一つ剥いても滲み出る気品
本当を言つて毒舌家にされる
勇氣出すために禪締め直す
もと偉い人だ自分は動かない
おばちゃんの理屈と涙には勝てぬ

高槻市 富田 保子

いい趣味を見つけないのち惜しくなり
ひと駅を歩く若さもあつたのに
一日のけじめを閉める日記帳
また一つ願いが叶い年を越す
遺言書書く程の財まだ不明

高槻市 安田 忠子

ガン告知されたショックを友に聞き
塔まつり思わぬ人と巡り会う
嬉しそうに誕生カード選る夫婦
朝食を抜くとスイッチ入らない
スイッチの切替えをする喫茶店

高槻市 島田 千鶴子

天高く旅行案内手に溢れ
夜にふる雨はこころを鎮ませる
霜月や今日もポストに喪の葉書
御堂筋十一月は黄に染まる
陽のあたる場所へ流れていく若木

高槻市 杉 本 義 昭

ささやいてその気にさせたのはあなた

ライバルのおどおどを見た隠し芸

秋の蚊を家族総出で追い回す

ワンコイン酒を持たぬ終電車

ふるさとの森は変らぬ祭り笛

高槻市 左右田 泰 雄

うたた寝の夢をこわしたドアチャイム

虫籠をゆすると羽で返事する

足音が気になるらしい虫の声

負けん気の強い男の向う傷

やわらかい心で支え合う暮し

豊中市 池 田 純 子

お布団のトンネルぬけて孫の汽車

宴あとコップに泡のないビール

鳶職の芸術的に足場組み

ちっちゃな手おつむてんてんしてくる

豊中市 江 見 見 清

もくせい香りが門でお出迎え

納得をしてる身に合わせた余生

結局は息子は連れず墓参り

不遜なり案山子に止まる雀二羽

秋の陽とにらめっこする坂の上

豊中市 藤 井 則 彦

ベテランほど既成事実にとらわれる

生は死の前奏曲と思う日日

目障りな半歩前へとあるトイレ

生真面目な人ほど酔うとよく喋る

歩きスマホにぶつかりかけた前屈み

豊中市 松 尾 美智代

手術台ポリープひとつ取りました

心配が杞憂に終り秋日和

一本の藁につかまり生きている

前に立つとシヤンと背筋が伸びている

生り年の柿でコトコトジャムを煮る

豊中市 松 村 里 江

ヒロインが来たので私カスミ草

反応はにぶいが脈は有りそうだ

好奇心旺盛なのはゆとりかも

円満に許す限度を守ってる

豊中市 水 野 黒 兎

卒寿が立ち優先席のベアルック

風向きをナビゲーターは読めぬまま

いろいろな個性を束ね和のチーム

知らぬ間に冬の気配の医者通い

台本は未完のままにやがて冬

富田林市 片岡 智恵子

母の胸いつでもノック待つている
梨狩りは出来栗拾いできぬ膝
正義か悪か色分けむなしシリアの死
ふらふらと生きて未来図もう画けぬ
途中下車生家のあたりビルばかり

富田林市 中井 アキ

愛されていると覚った風邪三日
ときめきが次の駅まで歩かせる
窓際の席でうねりがよく見える
辛口の意見の欲しいひとり住み
平熱になっても甘え直らない

富田林市 山野 寿之

筆まめがありがとうだけ温い五字
生き甲斐が溢れて光る時間割
曇のち晴にはならぬ恋一途
胡麻を擂る種なら輪の中で拾う
黄昏れてドラマの中はほの暗い

寝屋川市 籠 島 恵子

わたくしの時間を食べにくるすずめ
うらやましい二泊三日のプチ家出
霜月の夾竹桃とすれ違う
机上論と同じ絵本の中にいる
答は二ついる時もある右ひだり

寝屋川市 富山 ルイ子

大声でここぞとばかり非難され
言いたつたら効かぬと言われおどろいた
さつまいも柳友に少うしおすそわけ
芋のつる佃煮にして食べてみる
秋茄子が次次と出来まだ切れぬ

寝屋川市 平松 かすみ

サシセソ今日も味方に台所
面会の度にストレス持ち帰り
頑張るよ見送る人がひとり居る
気を付けて他人がいつも言うてくれ
目標はオリンピックとお年寄り

寝屋川市 森 茜

種を蒔く人のテンポへ秋深む
かくれんぼした日を忘れない案山子
なるようになるさとスヌーピー曰く
科学者は想定外というなかれ
木枯らし一号ターミナルから出た途端

寝屋川市 山本 三郎

学校のランク気になるこのテスト
台風がランクを上げてくる怖さ
チャンネルはおらが古里のど自慢
手を上げて歩道を渡る三歳児
高台も危険と知らず土砂崩れ

羽曳野市 安芸田 泰子
待ちかねた秋が木枯し連れてくる

減量が崩されそうな秋の天

歳時記の秋のページが薄くなる

歳月や平成生まれがパパになる

追伸に書いて催促さりげなく

羽曳野市 宇都宮 ちづる
庭花火十本残し秋が来る

十年日記二冊終ってまた挑戦

来年の予定を鬼にご報告

何始めよか百まで三十年

デバ地下で呼び出し聞けば私です

羽曳野市 徳山 みつこ

正直をいっぱい買った道の駅

立冬へボクの寝床も冬時間

トンボの眼玉を議員さんに送る

けさも食べてる和食の文化遺産

ひとり身へ深く染み入る夕の鐘

羽曳野市 永田 章 司

戦争を知らない総理ラッパ吹く

居酒屋の黒板メニュー信おける

伝統は入選枠で守られる

人生は限りあるよと夫言う

巨人せめての意地田中に黒星

羽曳野市 三好 専平

蹲踞のメダカも暑気に打たれたかわたくしは坂の向こうに夢を持ち

お金持ニセモノばかり食うており

吉里吉里人も原発ノーと言うている

ボロ靴がますます足にあつてくる

羽曳野市 吉村 久仁雄

思い出のトゲ抜きあつて同窓会

コップからあふれた酒がなお美味い

天命と思うが愚痴が止まらない

紆余曲折あつて地に着く足になる

ひとり言葉と僕との会話術

東大阪市 北村 賢子

初春へ祈る穏やかなる地球

初日の出今も仮設で拝む人

ストレスを溜め込まぬよう生やす羽根

悩むのは止そうと決めた眉間皺

牛肉も整形偽装してたんや

東大阪市 佐々木 満作

治療願ひ旅行プランを立てる妻

重なった行事を天秤にかける

日本が原発輸出する矛盾

母編んだセーター着込み冬の陣

背広着たアルバム見つめてる吐息

枚方市 安達忠央
クラス会きめてた席がごちゃごちゃに
敵のない君に味方が作れない

たまたまの出会いからもう五十年
親離れた子無心に来てくれた
別居中ふと道で会い子の話

枚方市 海老池 洋

食材偽装ミスと謝罪をする偽装
汚染水はつきり言えばたれ流し
どっさりとカードを持って金がない
よく見れば仲間の中にまた仲間
残り火へ元気を出せと曼珠沙華

枚方市 小林わかこ

ラジオ体操からだを起こす火種かも
火元はあなただったと知っていた
ふりかかる火の粉消し方わからない
ようやくと胸の炎が落ちついた
一本のろうそくだけで温かい

枚方市 伊達郁夫

冬仕度終えて炬燵でミカン剥く
男ばかりエレベーターが動かない
役立つと信じて立っている案山子
鼻めがね隅隅探す温い記事
缶ビール開けると空気裏返る

枚方市 丹後屋 肇

計報欄いつも享年先に見る
スポーツ紙夢を見ながら買っている
三歳の内緒聞えぬ遠い耳
般若心経全身麻酔から醒める
扇風機はてなと思う雪景色

枚方市 寺川弘一

大切に使う言葉だありがとう
どん尻でいろんな背中見て育つ
薔薇百本贈りたい人今も居る
痛いですよと言うから痛い注射針
一回は乗らねばならぬ霊柩車

枚方市 二宮紫鳳

おしゃべりな友もしっとり京御膳
落葉舞う陽だまり求め老夫婦
秋灯し夫婦で見入るサスペンス
コスモスが揺れてスキップ孫も揺れ
絵手紙に添えたひとことの射る

枚方市 二宮山久

リフォームの予約とつてる税アツプ
秋晴れや遊び上手な旅の宿
老い二人それぞれ過ごす趣味多忙
故郷帰りみかん色づく瀬戸の海
読みかけの本そのままに秋の暮れ

藤井寺市 伊藤アヤ子

努力もしないで何で痩せられる
金木犀咲いて我が家の冬仕度
有難いお言葉を頂きました
やる事はたんとあるけど目をつぶる
真面目にやればやるほど面白い

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

柿をむく指に芸術性が見え
どなたにも花の話題は傷つけぬ
忘れたころまたジンクスに蹴躓く
後のまつり結果をいつも悔いている
ポストは近いあなたは遠い風の中

藤井寺市 鈴木 いさお

不発弾抱えたままで古稀の坂
備蓄した若さを小出しする余生
寄つといで昔嘶をしてあげる
午前二時過ぎても魔女は眠らない
過ぎていった輩の数をかぞえてる

藤井寺市 高田 美代子

もう何も思わぬ事にして余生
冬の風少しぴりっと利いてくる
八十五船場育ちの血は消えず
昔大鉄いまハルカスが聳え建ち
昭和平成たった二代を生きただけ

藤井寺市 津田 シルク

紅葉に時を忘れて立ちつくす
秋刀魚焼くタマがしつこくまといつく
栗のイガより孫の針千本が痛い
バット振るひたすら夢を追って振る
なまけ癖週に一度の大掃除

藤井寺市 増井 ヨシ枝

犬連れただけのご縁で会釈する
お向いのために並べている菊花
菊香る若田船長宇宙へと
元気かと聞かれてるのはいつもボチ
介護3生き甲斐もらう五七五

藤井寺市 俣野 登志子

したたかに呑んでしたたかに寝てはる
ひと口で食べて無くなる小芋剥く
負けるが勝ち握り拳が震えてる
キッチン磨く自己満足も一瞬の
朝食済んでさて昼食は夕食は

藤井寺市 吉田 喜代子

夏肥り残したままに秋となる
頃は良し以心伝心電話鳴る
本日本休業食べる事さえ休みたし
待たしてる亡夫にお経のラブレター
オリンピック目標にして生き抜こう

藤井寺市 若松雅枝

米寿過ぎまだまだ迷う深い闇
天声人語三日も溜めて抽出しに
小豆炊く明日は曾孫の七五三
愚痴ってた亡夫の短所が懐かしい
和服着て言葉遣いも改まる

箕面市 酒井紀華

縁日で買ったヒヨコが子をうまぬ
お見舞は玉子十個の戦後なり
凜として虚勢はつてる冬のバラ
雪が降る鍋焼うどん欲しくなる
土付きの野菜が友の顔で来る

箕面市 出口セツ子

子と旅行夫の言動不安です
飛行機が嫌いで私止めにする
帰るまで血圧上りそう予感
余命表夫に好きなことさせる
良い年であるよう祈る神の鈴

箕面市 広島巴子

山谷縫いドライブ楽し人生路
樹氷手に霧の乗鞍無に浸る
朝市へ今日ばかりはと早く起き
ライバルに恵まれ続く趣味の会
愛込めた母の手料理ほんまもん

守口市 井上桂作

社会性世界一とはうれしいね
自らが歩いてさがせ幸せも
大阪都なぜに悪いかわからない
老人は忘れてならぬありがとう
秋晴はうれしいけれどこの暑さ

八尾市 高杉千歩

生れ変わるやがて思うて初春の酒
飽食に馴れて偽装に甘い舌
ダイケアが愉しくなつて老い加速
合鍵を預ける人が増えていく
在宅死希望毎日が覚悟

八尾市 内海幸生

年男七回目です先祖さま
冗談の好きな杖だよまた蹠蹠^{たぶら}
肉や海老より安かったボスの首
名門の御節は買えぬから安心
魚屋のオッチャンの気風なら買える

八尾市 宮崎シマ子

神の鈴メデタメデタと鳴らしとく
花活けるひとり暮しも春気配
絵手紙の水仙友の暮しぶり
座敷童子雪降る夜は囲炉裏に来
斜に構え男の出方待っている

八尾市 村上ミツ子

ホテルの食事など縁のない暮し

昨日まできちんと出来ていたことが

難産の一句どっこいしよと生まれ

どんぐりひとつわんぱくのポツケから

くいしばる歯はもう疾うにないけれど

八尾市 山根妙子

何となく電話が長くなる秋日

朝顔とゴーヤの支柱外し秋

コスモスを活けてハミング娘に戻る

ウエディング裾曳く孫の目映くて

秋句会太閤様を下に見て

大阪府 桑田ゆきの

子を叱る躰の拳握り締め

若水は蛇口で汲んでる世の移り

廃校の記念大樹にざわめきが

世に疎いけれども愚痴はこぼしおり

ことさらに横文字増えて電子辞書

大阪府 野田栄呼

頑に冗談かぬ人と居る

繰り返すシューゲーム落葉はき

神仏にあげる花木は庭に咲く

雑巾掛け週一になり老いてくる

着る度に違和感消える赤い服

大阪府 初山隆盛

酒二合そぞろ歩きの夢に酔い

炊きつけた火の手上がって知らんぶり

残照の絵皿に映える老いの夢

九条を盾に尖閣守り抜く

せつかなお方ころつと逝きはった

大阪府 米澤俣子

年長けた今でも学ぶことはかり

今日一日を一生として生きる術

ワンテンポ落とし丁度の脳回路

形見にも出来ぬガラクタ溜めこんで

腐葉土になって生きるも悪くない

神戸市 伊勢田 穀

一汁と二菜ですます老いひとり

真相を掴むとペンがよく走る

宅急便包みかたにも母の癖

妻逝きて新春を華やぐ彩もなし

政治家のささやききつと金のこと

神戸市 井上 じろう

窓燦燦今日はいいことありそうな

嫁にだし親は静観するばかり

百均も捨てたものではありません

昼はもうとつくに過ぎて友見えず

理想主義思い描いた頃もあり

神戸市 木村 貴代子

知らぬ間にやせてしまった春と秋

人間の弱さが核にしがみつ

親友と永遠の別れを告ぐ葉書

きのご飯上手に炊けて月も澄む

階段を上る手伝いいた

神戸市 白川 淑子

美味しいな作ってもらう晩ごはん

下を見ず乗るシースルーエレベータ

ポワンポワンいまだ浮世の船溜まり

風渡る芒野遠い恋ひとつ

自分らしく生きる老いても譲れない

神戸市 山 口 光 久

湯煙に頑固が溶ける音がする

大根の土を落とせば母の貌

くねくねの道路がさとす一本気

ブーメランのように戻ってきたサイフ

くどくどと言わぬ親父の叱り方

神戸市 山 口 美 穂

秋空の彼方へソユーズ旅に出た

いちまつ

の風芒野を撫でてゆく

栗ごはんその手間そつと言ひ添える

亡母の味へ何か足りぬと落し蓋
てっぺんで夕日集める木守柿

神戸市 山崎 武彦

秋だから好きなひとから風邪もらう

ズームアップ少しかして母を撮る

妻庇うかたちで転けた震度七

地の人に村の自慢を聞く野天

ファイテングポーズだけならまだ負けぬ

神戸市 山 田 婦美子

叶わぬが絵にしてみたい柿一つ

晩秋に柿の赤さが目に眩し

枯葉にも生きた証の色がある

明け方の夢で手を振る亡母がいた

隠しごと出来ぬ夫の嘘見ぬく

相生市 中塚 礎 石

夕立が縁で子猫の頭まで

クラス会故人肴に汲み交わす

日の丸の旗戦争を知らぬ顔

九条を守ればボタンなどいらぬ

草食の男握手がやわらかい

明石市 梶谷 和 郎

選択はワーストでないけど悪路

わだかまり残さず吐いてからの友

月光が潤んでみえる友が近く

タラレバの肥やし利きすぎ実らない

結局はスマホに遊ばれる私

芦屋市 黒田能子

心づもりがないのに寿命突然に
走り出すチャンス気長に雨宿り
今のうち今のうちだと弾んでる
平和だな笑顔溢れる子供たち
笑顔がもどる日にち葉が効いてきた

芦屋市 竹山千賀子

新年の上座家長という威厳
風邪の神年増好みか長居する
叱った子に今は優しく諭される
いたわりの言葉は美へのエッセンス
熟れた愛くずれぬように皿に盛る

尼崎市 市坪武臣

機が熟すのを我慢して待つと根性
テンポよく進む話にある油断
禁酒だけはやはり無理だと今日も飲む
記念日が過ぎて届いた赤いバラ
容疑者の仮面をはがすプロの技

尼崎市 軸丸勝己

楽天に見る東北の底力
マー君の一球入魂プロのプロ
木犀に行きも帰りも立ち止まる
OB会いい人の順名簿消え
思い出のハルピンの街空がない

尼崎市 長浜美籠

もの淋し枯葉色した秋が好き
痛恨の極みと書いた亡兄のメモ
ワンクッション置いて付き合うのも気楽
大阪弁語録はマンガよりおかし
一日をしめるほんわかキノコ鍋

尼崎市 林昭三

転んでも小難感謝合掌す
ばあちゃんのひそひそ話お付合
はぐれ猫居付いて今はマスコット
名も知らぬ小鳥が朝を告げに来る
ばあちゃんが炊事場に立ち今日冬至

尼崎市 藤井宏造

まわりまわってきたここだけの話
法廷とはあんなものかと見るドラマ
裸婦像をさりげなく見る美術館
友からの電話ないかと待つ一人
妻の死後ひろくて困る家の中

尼崎市 藤岡りこ

ひとり住まい表札はまだ五人住む
独り居だからしゃべればみんなひとり言
一人っ子三役こなしおまご
ボクが先ワタシが先と逝く話
相合傘さしかける人濡れそぼつ

尼崎市 春城年代

旅の途中でぬくい祭りに会うてくる
湖昏れて向こう岸にも灯がともる
公園の入り口で待つ時計草
肥後の守和鉄定めた抽斗に
声に出して読めと言われて古典積む

尼崎市 山田耕治

きついこと人間が言う腹話術
在庫処理言葉を変えて奉仕品
しんどいがこの世におればこそのこと
ベルト穴の中間あたりちようどよい
おじいさんの声で勧誘電話切る

加西市 金川宣子

トレードで隠れた力見出され
両天秤かけた年玉ほくそ笑む
医者嫌い自然治癒力頼みです
正念場鼻っ柱を折ってやる
一発屋今年はやつと生き延びる

川西市 西内朋月

熟し柿ポトリと落ちて知る命
棺桶の隙間を埋める白い菊
手ごたえは充分あったのに落ちる
人間の勝手に出来た汚染水
改札に近い電車のドアが混み

川西市 米原雪子

境界線越えて隣家のバラが咲き
憧れの校門くぐる大学祭
成長した孫達と顔見せぬ
宇宙への旅の順番待つ夢を
飲んだ末だよ葉と問答してる我

篠山市 酒井真由

コスモスの原っぱいつもの子がひとり
散歩みち氏神さまにご挨拶
行きつ戻りつ愛の迷路がまだ続く
机の上にぼつんとヒト科滅亡論
パステルで描いた夢が消えている

三田市 上垣キヨミ

百の母送る男にもらい泣く
補聴器と歩いて風と話す
東北に地鳴りを生んだ日本一
柿捕れば百舌の家族に騒がれる
菊花展叙勲ニュースに花添える

三田市 尾崎一子

文化祭シルバーパーワーてんこもり
富士を背に四季の流れを抱く命
日が昇る子の就活も正念場
ニュータウン都会の色を連れた風
里帰りカラス相手に柿を食う

三田市 北野 哲男

メビウスの帯を走つてます傘寿

極楽の割符時どき確める

淑女用魔女用も持つ帽子好き

半眼で耳を澄ませている仏

もう少しジョークもあつていい句会

三田市 久保田 千代

箱庭がささやかながら四季をくれ

黙々と歩き文化の賞に映え

亡母よりも生きてみたいと欲を出す

合鍵のひとつに命預けてる

苗選ぶ花の盛りを胸に描き

三田市 福田 好文

お一人様一個の列に妻の後

葱刻む音で目覚める朝が好き

寝たきりに成つて読む本積んである

青春の手垢滲んだ和英辞書

娘の晴れ着帯結う妻が活気づく

三田市 堀 正和

歳のこと言えばファイトが萎えてくる

外出の予定ない日の不精ヒゲ

久し振り夢に出て来た母若し

テレビから仕入れたらしい新メニュー

演歌にはならぬ自分史書いている

宝塚市 田中 章子

六甲の紅葉遠くに行かずとも

夫婦つて空気がわかりかけてきた

虹を見てときめくわたし好きである

孫ならばハードル上げてほめてやり

あねいもうと三歳でもう嫉妬知り

西宮市 足立 茂

無愛想な店にも払うサービスマン

カレンダーに妻が○する午前様

スポーツ紙がほめ殺しするタイガース

つり革に働き過ぎがぶら下がる

駆けつけたら彼女がいない朝寝坊

西宮市 片山 忠

ポリープのひとつやふたつどうしたの

ハグをするとても自然な形にて

酔うほどに反骨心がとろけ出す

プライドがあるとできない罰ゲーム

趣味読書少しねじれているようだ

西宮市 亀岡 哲子

平均寿命まだまだ10をプラスする

子と嫁が四方支えてくれている

カラオケを歌う写真が生きている

茜空遠く二人でまだ歩く

イラストを書くとき余白が生きてくる

西宮市 西口 いわゑ

クラス会一番好きな服を着て
毒を持つきのこ女も美しい
磨いたら敵しくなってきた鏡
少し気取って孫が彼女を連れてくる
幾年も包まれて来た大きな手

西宮市 山本 義子

この指止まれ あれはほっかり蟹気楼
お洗濯は朝 太陽も賞味あり
民話の里鬼も天狗もいとおしい
ローカル線ころろ尽しの花が咲く
恥ずかしながら操られてるときもあり

西脇市 七反田 順子

カタコトが言えて電話をかけてくる
落下傘家族を守る夫である
美しい過去記憶に留めとく
コンサート百万本のバラが咲き
ハイキング室生寺あたり足鍛え

姫路市 古川 奮水

庭掃除汗を拭きふき波布のお茶
園児等が遊ぶコスモス迷い道
歛洗汗を補う缶ビール
錦秋の楓迎えた延暦寺
頂の茶屋でゆっくり足慣らす

奈良市 阿部 紀子

午年は夢を目指してひた走る
シンザンの蹄鉄さぞや重たかる
健保制度世界一番長寿国
重いけど凝ってるメンズネットレス
死んでもいいと言いながら打つワクチンを

奈良市 岩本 浩二

細君の睨みで白状させられる
嬉しい日酒はチビチビ舐めて呑む
見ただけで育ちの分かる箸使い
素うどんに海老天のせる年金日
薔薇よりもコスモス似合う八十路入り

奈良市 大久保 眞澄

怒鳴らんでもエエやん街なかのスマホ
カレーうどん大人もほしいよだれ掛け
午前様のびたうどんが待っていた
散歩させてるのは犬の方だった
断捨離はおろか仕分けでめげている

奈良市 加門 萌子

東北に心を寄せて初春が来る
お雑煮を食べぬ孫らとお正月
エトランゼの顔でぶらりと奈良歩く
永遠の命は無くてアンパンマン
ささやきはもう伝わらぬ老いの耳

奈良市 辻内 げんえい

駅ビルで何でも揃う地方都市

ばればれの嘘にも文句言えぬ親

うどん打ち安くて美味い趣味見つけ

知らぬ間に家事留守番が増えていく

トレーナーの笑顔が誘うジム通い

奈良市 天正 千梢

口の中渴けば話など出来ず

小さい事も大きい事も聞いている鬼瓦

一日中いい天気でしたありがとうございます

水曜日バドミントンで嫁は留守

楽しみは食事だと本気で言っている

奈良市 山本 柳昌

二人ならできる ひとりはつまらない

今日は晴れこころの澱を捨て去ろう

楚楚として私通りのスケジュール

独り身の身軽さ風に乗るころ

そのときはガハハと笑い身を躲す

奈良市 米田 恭昌

二人してパソコン孫の門下生

就活も婚活もせぬうちの姫

祝楽天安チ巨人の虎ファン

船酔いが毎日続く絶不調

身心不調も六甲おろしに気を貰う(川柳塔なら大会にて)

生駒市 飛永 ふりこ

ポタージュがまあるく笑みを連鎖する

せいっぱい生きて閻魔の意のままに

噂って雲海のようにそれもいい

コンポートじわつと友の情が染む

午歳の父がしつかり背を押す

橿原市 居谷 真理子

人間ばい猿で幸せそうじゃない

臍の位置しがらみもある恩もある

胸にポコン何を忘れた穴だろう

消えるから虹消えるから愛し合う

まっしぐらに飛びこんでいく誘蛾灯

大和郡山市 坊農 柳弘

行雲流水我が道を行く事始め

清貧に生きてもきつちりお正月

串柿の誉れ鏡餅仕切る

せかせかと師走の街は皆無口

手の届く処で遊ぶ福笑い

奈良県 渡辺 富子

太い芯持った男も枯れてくる

灯を分けて村上春樹読む夜長

永遠の愛約した海が荒れてくる

喝采の海へ船出をする息子

生まれて死ぬ神のドラマに身を任す

和歌山市 上田紀子

ぜんまいの切れた話になる昭和
とりあえずマニュアル通り日々こなす
五輪に続く明るいニュース待つてます
いつの日か発光待つているサイン
人間をもう信じない檻の象

和歌山市 柏原夕胡

愛にはぐれた人よこの指止まれ
舐め合った傷がだんだん深くなる
嗤うしかない哀しみが凍りつく
トクトクトクそれでも生きているんだな
孤独を抱きしめると少しあたたかい

和歌山市 喜田准一

ざりざりの線で話に味がある
核心は一般論で逃げ回る
どこで何食えば信用できますか
屋台酒男の愚痴が姦しい
キャスターの毒舌今日も冴えている

和歌山市 楠見章子

天気雨作り話に飽きてきた
お客様のかたちに置いてある眼鏡
すきま風頭冷やすに丁度いい
両手を合わすだけで安心してしまう
児の声が路地まで響く明日も晴れ

和歌山市 坂部紀久子

ほんやりと点線引いて秋になる
コスモスが揺れる女の子が走る
本番の秋へ号令掛け直す
生きる自信など無いままに来た八十路
たまに来る娘とたわいない話

和歌山市 玉置当代

秋風に野菊がゆれて亡母を恋う
晩秋にケイトウ燃えて冬支度
こころの歌残し昭和が遠ざかる
正直に生きてストンと騙される
祭囃子も詰めて里から荷が届く

和歌山市 土屋起世子

風に揺れコスモス敵をつくらない
一日を笑って暮らす策たてる
バリアフリーあれもこれもと捨てさせる
大声で叫び介護の疲れとる
心配をかけぬ老母に偽装する

和歌山市 福本英子

老い一人家計簿はもう止めにする
ごまかしの効かぬそば打つ味加減
遠い夢まだ追いかけてる若さ
居心地がいいのか夫逝ったきり
公園の日暮れベンチで指を折る

和歌山市 古久保 和子

银杏を拾う晩秋の絵の中

しみじみと父の寝顔を見た極

目薬を点すのが下手な父だった

水たまりから満月を釣り上げる

水の輪が拡がるどこまでも未完

和歌山市 堀 富美子

私のスタンスで行く満足度

カラオケも句も太刀打ち出来ぬお方

一瞬の事故が身内に来る恐さ

沈黙が恐くてジョークついて出る

翔ぶ日日が老いの時計を巻き戻す

和歌山市 松 尾 和 香

二十五回忌徳ぶ夫のエピソード

裏返し仕立て直しの母昭和

落鮎の土産も嬉し里の味

笑い声泣き声になる曾孫抱く

先ず四紙読んで一日動き出す

和歌山市 松 原 寿 子

安らげる花玄関で香を放つ

処々にある人生の水溜り

歌えないけどカラオケの輪に和む

棘いっばんずけずけ胸に迷い込む

回り切るまでタッチ許さぬ独楽の芯

岩出市 藤 原 ほか

じつくりと構えその場を遣り過す

リミットを知って歩みをゆるくする

羽ばたいていこうといつも思ってる

太陽を味方につけて這い上がる

曼珠沙華忘れないでと咲き誇る

海南市 小 谷 小 雪

ちゃんと巻き戻せば見える置き忘れ

待ちわびた友から電話一時間

みぞおちに小さな希望を溜めておく

大きめのシャツ気に入ってくれますか

野菜高に暮しの温度冷めてくる

海南市 堂 上 泰 女

座標軸びつたりはまる同世代

激震が走る表示の間違いに

愛の種撒いて実りは期待せず

我欲捨て孫のサンタになる準備

休眠通帳夫の汗に感謝する

紀の川市 宇 野 幹 子

秒針と短針妥協して生きる

深海魚昭和の海を出られない

つましく咲いて散り際いさぎよい

美人には映してくれぬ初鏡

加速する老いくい止めるギアチェンジ

紀の川市 北山絹子

匂々に花を咲かせる大自然
風向きを読んでいるよな朝の靴
駅の灯が消えて淋しい風が吹く
ロボットに家事を任せて翔んでいる
昭和史を辿れば風が生臭い

紀の川市 辻内次根

一日の戯曲寒さに耐えている
東西南北の中心で迷う
少年の顔だ熟柿を咬る時
白が好き襟のほつれる肌触り
スキが光ったいろいろあつたけど

田辺市 岡本昇

折り込みのチラシも原価乗せてます
平静になると開けてくる視界
一本気小細工の道通らない
生きるとや喜怒哀楽の繰り返し
静かさは写経の庭の落ち葉焚き

橋本市 石田隆彦

戦国のお城訪ねて知る平和
菜園が今一番の癒しの場
卒寿越えたと尋ねなくても齢告げる
山小屋に納得できるビールの値
野良犬は夜中のうちに散歩する

鳥取市 有沢せつ子

快適な時が流れる無駄話
とびきりの笑顔で行こう初対面
小春日に俎板乾したまま忘れ
孫二十もうなくなつた口答え
百円の傘もきちんと乾しておく

鳥取市 池澤大鯨

三面鏡どの鏡面も気に入らぬ
初風呂の鏡に裸記憶させ
ひと部屋に鏡一枚あればいい
鈍ふるう切れ味などは気にしない
年のせいにくすんだままでいいと言う

鳥取市 奥谷彩子

人の輪で肩に貰つた手が温い
無位無冠路傍の石も角がとれ
分ければ足りる地球資源もうばい合
終焉の心機一転まだ出来ず
明日もきつとみみずと睦むダンゴ虫

鳥取市 加藤茶人

道端でヒント見つけたウォーキング
何もかもおもちやにしちゃう子らの知恵
極楽も見方変えれば地獄かも
人間を大きくさせた回り道
我が家にもあつた三十八度線

鳥取市 岸 本 孝 子

努力したことも奇跡と他人は言う
出る杭になつても主張だけはする
はち切れるほどの財布に縁がない
断捨離の爽快感がくせになり
若返る葉やっぱり恋だろ

鳥取市 倉 益 一 瑤

朝の陽に脳をリセットしてもらう
わたくしの蘇生法です大笑い
まやかしの幸に溺れている日本
負けん気のジャンプギックリ腰になり
物知りの秘策新聞斜め読み

鳥取市 鈴 木 一 弘

温泉の熱で爛がうれしい冬の宿
かなめから離れた位置でなま返事
丹精が富をみのらす梨はだけ
渋い喉演出すれば甘くなる
老木に慈雨の潤いわかえり

鳥取市 竹 口 清 信

生きるだけそれが苦勞の種なんだ
生かされて一人で生きた顔するな
生きられる星に生れてありがたい
きりぎりす私は蟻を見て生きる
地獄へと繋がる道は歩かない

鳥取市 永 原 昌 鼓

びつたりと添つてた人はもういない
慰めはいらぬ涙が落ちるから
夫入れるお墓の掃除縫をかけ
納骨へ仏間の灯りむせび泣く
寂しさが募る独りの老いぐらし

鳥取市 中 村 金 祥

偽装したグルメに舌がしびれ出す
キラキラと光るおしっこ見て安堵
人間も弱れば隙が多くなる
汚れ役受けて皆んなを磨いてる
放射能汚染予防注射がないものか

鳥取市 夏 目 一 粹

過労死か働き蜂が死んでいる
時間など好きな人なら気にしない
幸せだなあ夜道でそつと言ってみる
比較する目を恥じながら生きている
振り返る余裕まだあるでも無職

鳥取市 西 川 和 子

一心同体同じ所を病んでいる
やつと晴畑仕事にいい疲れ
畑に恋をすれば野菜が良く笑う
年金へ渋い暮しを強いられる
帳尻の合わないままに次ページへ

鳥取市 春 木 圭 一 郎

天かける馬へ今年の夢乗せる
堂々と白馬の騎士を演じ切る
酒好きの人とはやはり馬が合う
不器用で馬の足でもむずかしい
馬車馬のように働き悔いはない

鳥取市 平 尾 菜 美

しょうないね洪い顔して生きのこり
御先祖のおっしやる通り田を残し

顔しらぬ父の戦死は北の果て
紙一重板子一枚父の舟

鳥取市 福 西 茶 子

美しい笑顔でパンチ打つなかれ
洪抜きが過ぎて怒りも泣きもせぬ
スヤスヤと腕の天使は宙の旅
ウインクをすれば見逃すほどの罪
夜明けまで食べて歌える女旅

鳥取市 前 田 楓 花

辛抱するとご褒美付いてくる
直球を投げて下さい胸元に
「あまちゃん」を見なくて損をした気分
やりかけのままの人生終れない
憎しみも夜の終りに溶けてゆく

鳥取市 横 田 春 名

介護師の笑顔マヒした口動く
一つだけ喜び上手残し逝く
次々と喪中葉書に隙間風
自分史のまとめは幸と大書する
純愛のもどかしさ消え世は褪せる

鳥取市 吉 田 孔 美 子

奨励の懸るコスモス田続く
正に逸材その肩に大輪が咲む
二股三股見事なる女子力よ
今はダメバイオリズムに逆らえぬ
週一で母の女神に成るホーム

鳥取市 吉 田 弘 子

日記帖短い秋と書いておく
山門を出ると魔法解けていく
忍耐と諦め学ぶ五十五年
治癒力は落ちたクスリに頼り過ぎ
意地悪へ負けて勝つ極意を学ぶ

倉吉市 猪 川 由 美 子

謝罪の可否が今後の道を左右する
消費増税生きてゆくのも草臥れる
ケータイや食事に恐い落し穴
夫婦ゲンカに注意胎児は聞こえてる
高級メニユー変な偽装で品が落ち

倉吉市 山中康子

鈍感と敏感がいて座が和む
他人事とよそ見は出来ぬストーカー
掌中の玉あと一つ握りしめ
湯呑茶碗ひびわれしても持ちこたえ
毎日が勘と勝負の気ばたらき

倉吉市 山本玲子

渋いお茶長居の癖が出たようだ
アルバムの剥がした跡にある疑問
空回りしている脳を持って余す
息抜きができぬ聞き下手話下手
辻地蔵に五円たむけて願回事

米子市 後藤宏之

長生きを決めているのは雲の上
よく笑う父をしつかり撮っておく
ダメ亭妻ががっちり支えてる
てなずけた孫に嫌われたら終り
このごろは尻に敷かれて楽になる

米子市 後藤美恵子

老化との見立てに文句つけている
子とのパイプ老いて逆流しはじめ
もみじの手末は介護の頼りです
老人会紅葉に負けぬおしゃれる
我が播いた種はなかなか間引けない

米子市 竹村紀の治

ふところの潤い酒が嗅ぎ付ける
絶対に忘れはしない食前酒
つい忘れ困る食後の飲み薬
珈琲が冷めて独りを思い知る
神経痛フェイントかけてやって来た

米子市 中原章子

死にたいは自分が奮い立つ言葉
遠方の息子何度も見舞い来る
語り掛け耳最後まで生きている
精一杯今日を生きてるあすは明日
愛された心根胸の奥深く

米子市 成田雨奇

落ち込まぬように自分を追いたてる
拍手する役目を終る会終る
もう遅い何も追わない方がいい
セールズに財務大臣見破られ
張り切って演壇に立ち失語症

米子市 吉田陽子

もう軍手はめたことん今日はやる
誕生日道が険しさ増して来た
復興はまだかと秋刀魚焼きながら
日び心磨く鉛筆あればよい
飽きられた造花はついに枯れました

鳥取県 石谷 美恵子

募金箱素通りできぬ律義者

鳥取県 西谷 悦子

予備品を積んで淋しく逝ったひと

ボタン替え時代おくれと言わせない

少しづつマヒが私を脅やかす

夫婦仲イメージだけではかれない

継ぎ足して継ぎ足して越す歳の坂
いろいろな彩補ってゆく元気
泥んこもいばらもあって生きる道
ひたすらに教訓の真似ごとをする
お互いの鼓動聞こえる距離がいい

鳥取県 岩崎 和子

何故なのか容器に葉残ってる

飲んだのか飲まぬか忘れ夜になる

お医者さま笑顔が出るとほっとする

会場へ三階までの足軽い
エレベーター乗らず階段ほの明り

新米を子等へ届けて収穫祭
ハイウエー田舎の味を積んで行く
視界にはいつも頼れる肩がある
吹き溜まりアドレスの無い落葉たち
成績がはつきり入れてある口座

鳥取県 竹信 照彦

時雨にも大雨注意報が出る

吹き降りを真面に受けてひた走る

昨日釣れ今日釣れぬのが魚釣り

雨続き山陰だなど思い知る

強風に寒風木枯らしを探す

鳥取県 松川 行男

大阪で聞いた話が東京へ

ぼけまいと講座流して皆忘れ

おもてなし我が家はどうかお茶漬だけ

蟹の足平等に吸う大家族

青空へ縋り付きたい紅葉狩り

鳥取県 鳥越 鬼一

楽天が勝ってみちのく元気づき

道徳を学校で習ったことはない

「道徳」に力を入れて「学力」落ち

新米の旨さにつられもう一杯

私の入れた候補がまた落ちた

鳥取県 山下 節子

大切な脳を保護する帽子編む

ようやく活路のみえた子の進路

ブランドに嵌まりマヒした金勘定

禁酒禁煙今がピークのこらえどき

しあわせの中に漲る子の笑顔

鳥取県 山本正光

老いたとて健やかな年願うのみ
娘を信じ温もり溜る余生です
背を向けぬ田舎暮らしに老いて住む
呆けまいと松の内中飲むつもり
正月の笑い袋は買ってある

松江市 石橋芳山

お互いの裏を穿り合っている
宇宙人増えて獣が減っている
カボチャからじよじよにピーマンらしくなる
ライオンとウサギが部屋に残される
騙されているし騙しているのだし

松江市 小川注湖

安心の地産の顔が並ぶ店
宅急便開けると里の秋匂う
ホテル食食べた自慢をからかわれ
出した言葉ひとり歩きを止められぬ
レンタルがしつくり似合う主賓席

松江市 錦織禮子

ルーキーは痒い所に手が届く
華奢な人驚くほどの趣味を持ち
人・ひと・ヒト賄いきれぬ大遷宮
合い言葉作っておこう撃退術
友からの第一号のカレンダー

松江市 松本知恵子

じゃあねって歩き出します秋の天
ドタバタと亡夫の分身孫が来る
立ち上がる力出るのを待つてみる
干柿をする気もなくて秋過ぎる
雲流れ流れてあの日帰らない

松江市 松本文子

豪邸の隣で花に水をやる
故郷へ流れるものをじっと見る
要が育つて亡夫も安心しただろう
標札を背負い私も生きて来た
守るもの守り心が重くなり

松江市 三島淞丘

決断は今だと夕陽落ちてゆく
ライバルの尻尾つかめば風になる
舵まかす妻に確かな羅針盤
国境が何だと大空が唾う
煩惱の深い森から抜け出せぬ

出雲市 石倉美佐子

生かされてよつこらしよつと腰を伸ばす
息子にそつと買物を頼む
新しい洋服筆筒は良いお顔
「お父さん」三度目には聞こえ
お正月きゅつと塩瀬の帯を締め

出雲市 伊藤 玲子

酒が入るとやわらかくなる鯛の芯

柿を剥く笑窪女らしくなった

天国からこの頃母の糸電話

愛された記憶絵の中で燃やす

生きるとは和尚の法話落語めく

出雲市 岸 桂子

萩の花やつと納める夏茶碗

あいまいな事に同意はしない自負

さわやかな目覚め昨日を捨てたから

海に降る雨はそのまま海になる

最後の恋は五七五という魔物

出雲市 小白金 房子

デコボコ道夫婦で耐えた詩がある

手鍋から老母の味覚が煮こぼれる

舞いおえた大蛇もてなす一升瓶

深み行く秋へ地蔵の背が丸い

六地藏へ一輪づつの秋をさす

出雲市 多久和 敬子

午前二時不意の帰宅にチン料理

消しごむのカスだけ溜まりまだ白紙

晩学のペン消しごむと手を繋ぐ

情熱が空まわりして風に散る

ふる里の古道に落ちていたロマン

出雲市 竹 治 ちかし

言い残すことをしつかり言っておく

生きているのが楽しくなって困る古い

スタンスは正義で悪の方も向く

差し上げる命も今は出し惜しむ

天国か地獄か僕の持つ切符

出雲市 富田 蘭水

神在りの月に稲作の浜は冴え

放尿がまだまだ続く秋深く

山程の葉を飲んでまだ生きる

日本酒がうまくなったと肩たたき

大遷宮神より観光先はしゃぐ

島根県 伊藤 寿美

古い独りやさしい世辞に乗ってみる

去年出来た事が出来ない翁草

通り過ぎた時雨が降っている鏡

わたくしが乗ると沈んでしまう舟

終バスは風とわたしと運転手

広島市 岸 本 清

ゴシップは尾ひれが常に付きまとう

行く末は人様よりも介護ロボ

掃除ロボ僕の靴下知らないか

苦情用電話は何時も話し中

露天風呂孫等唄うはいい湯だな

竹原市 石原 淑子

午歳の希望輝く初日の出
大笑い今日のノルマを電話口
和氣藹藹秘仏訪ねる小さな旅
平和公園觀光客の顔になる
父を恋う深い祈りの平和の碑

竹原市 岩本 笑子

紅葉はらはら星の形にある誇り
足るを知る結婚指輪だけでいい
足早に秋寂しくはないか
お仕事よ毎日たんと葉飲む
リング剥く秋がゆつくりすぎてゆく

府中市 藤岡 ヒデコ

三対四被災地が湧く日本一
感動は野球にうといわたしでも
一喜一憂しながらラジオ離せない
ふんばりが効くか今年も後わずか
夕飯がおいしいだけで良しとする

宇部市 平田 実男

郷に入り郷に従う意気地なし
楽天がアンチ巨人を喜ばせ
高齢者外国人へ甘い鐘
骨拾う箸へ未練がからみつく
制服の怖さ性格まで変える

(前月分) 岸和田市 岩佐 ダン吉

生きている汗しつかりと流したい
九条の歴史を知らぬ人が言う
時どきは私を裁くことにする
夜明け前そんな寒さだと思ふ
ヒトが人裁く恐くはないですか

(前月分) 相生市 中塚 礎石

格好よい聖戦という旗を振る
年賀状ただそれだけで縁切れず
杖ついて父母の苦勞に感謝する
百均で買うて今でも役に立ち
生真面目が落語へ文句つけている

(前月分) 河内長野市 水谷 正子

生協が歳暮おせちと攻めてくる
米寿ですシミソバカスを勲章に
底割って話の出来る友が近く
大シヨック友を失い呆け始め
優勝の初夢みよう虎ファン

(前月分) 東大阪市 米田 水昇

乳母車車椅子へと孫が押す
月明かり童謡うたった母の里
満月に地球の安泰祈るのみ
すすきゆれ極楽浄土の夢結ぶ
院の庭柿の実たわわ気にかかる

川柳塔の

川柳讃歌

109

木津川 計

上向いていこうよ七十歳のちぶさ

安土 理恵

川柳塔まつりで歌う「星影のワルツ」の輪に僕も入った。偶然隣が理恵さんだった。「この頃の句に元気がないよ」と言うと、その事情をひとこと口にされた。ようやく空の晴れた気分なだろう。右の句本来の彼女である。番傘は瀬川幸子さんの「リングなぜ落ちる乳房はなぜ垂れる」が抗し難い加齢を引力に託して唸らせたが、理恵さんは引力に逆らう。「カサブランカ」を思い出す。「君の瞳に」ではない、「七十歳のちぶさに乾杯」。

おととつとつとおばあさんにも明日がある

谷口 義

「上を向いて歩こう」は永六輔の作詞だった。この方は僕達にいつも希望を与えてくれた。パーキンソン病で車椅子に頼りつつもラジオで喋り続けた。言語不明瞭に「やめろーっ」の大合唱だったが、回らない舌で

われわれを励ましているとリスナーは気づいて感動した。毎年三月、神戸でのマルセ太郎忌は僕と永さんでステージを務めるが、来年は来られず、僕一人で立つ。永さん、頑張れ。谷口さん、おじいさんの明日も忘れないで。

生きること女一人の眉を描き

中塚 礎石

永六輔さんは女人ひとりの再起に思いを寄せた。この方の作詞「女ひとり」は、思うに身持ちの悪い男との恋を清算すべく、京都の名利や名勝を着物で訪ね歩く。大原、三千年へは結城に塩瀬の素描の帯で。梅尾、高山寺へは大島袖につづれの帯だ。嵐山、大覚寺は塩瀬がすりに名古屋帯。どこのどいつだ、こんないい女人をさすらわせるとは。

恋に疲れた彼女だが、一人で生きていく決意をきつぱりの眉に示したと礎石さんは言う。

しみじみと読む旧姓で来た手紙

小谷 集一

金持ちと縁を組みたいのか、ダイヤモンドに目をくらませたお宮を足蹴にした寛一は、熱海の海岸で宮と別れた。それなら俺も大金持ちになってやる、と一高をやめ、高利貸の手代に転身。やがて独立して財をなした寛一の許へ「富山宮」から封書が届いた。封も切らず暖炉に投げ込む。一通、二通…十二通も。

そこには悲運の宮が自死の決意を。もし「鴨沢宮」だったら「しみじみと読み」、あるいは違う局面が。尾崎紅葉未完の大作だった。

子にかざす母の日傘の右左

竹治 ちかし

当代の名人・桂春団治の絶品「いかけ屋」に出てくるこましゃくられて横着な悪童を大阪では、「ごんたくれ」と呼んだが、甘やかされたええし(良家)のいとはん(お嬢さん)は「おんば(お乳母)日傘で」育つたと揶揄した。が、母の日傘は甘やかしてではない。右へ回れば左へかざし、左へ曲がると右へ差す、無償の愛の子育てである。ちかしさん、句柄の高い、いい句。記憶の貯蔵庫に納めました。

戦車にはなるなと念じ払う税

片岡 千恵子

あの三好達治が真珠湾攻撃に酔った。「いさぎよき捷報いたるふゆの日のこの日のあさのそらのいろはも」。この歌の虚妄にひきかえ、「斬込みの夜に穿かむ靴負いしままはだしの兵ら飢えて斃れし」(山県定芳)の痛切である。「それぞれに戦いし意味つきつめず来し戦後なりいまに問われる」(長崎田鶴子)の秘密保護法、平成の治安維持法が可決された。暗鬱な時代への回帰。念じる千恵子さんに同感する。「(上方芸能)誌発行人」

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

首筋から風邪ひきそうに舞妓居る

段梯子女将眉間で何か言ひ

舞妓でつけた渾名で旦那さん嬉しがり

四季

元旦や素直に鼻をふかすなり

(辰年年頭所感)

竜頭蛇尾となる一年の計を樹て

日曜のちよつと大きいおらが春

ポチ袋ませた御礼を言われたり

義理がたい人に元旦起こされる

唯々諾々と爛の追加も三ケ日

お祝儀という数の子のケチなかさ

三ケ日明治生れは寝るとする

またしてもタイミングのあわぬ妻の酌
茶屋酒がだんだん旨い地位になり

健康法さけば盃もつ仕草

遺伝でんなアと盃の手がふるえ

ひとり酌めばいみじくもまた秋の雨

紅灯の夕べ

半玉に男ざかりの手をひかれ

ワテが通りまっせという歩きぶり

芸者の耳うち高いものになり

スカンタコと声が大きい仲居部屋

白選集

小島蘭幸

天翔る手綱を緩めてはならぬ
ペガサスも火の鳥も我が胸に棲む
師の耳に届け千光寺の鐘だ
10・04 呪文になって来たようだ
振り返ることも大切句集編む

川上大輪

励ましてくれるが誰も手伝わぬ
大器晩成現実は見えていない
どこにでもあるお土産を買うてくる
私より役に立ってる救助犬
列少し逸れて他人になっている

小西雄々

元旦へ四股踏み希望ふくらまず
素うどんで誰はばからず良しとする
ご注意を聞くうち耳が垂れてきた
暗記するほど恋文を読みなおす
長生きはしたいが夢でないように

斉藤 荔

元朝も一日一個りんご剥く
雪のんのんひたすら白にこだわって
百点のテストスキップして帰る
まっすぐに走るがたがた道走る
人参を持って仔馬に逢いにゆく

新家 完司

ちっほけな家です僕も弟も
徳利と猪口が私の旗印
酒飲める会を選んで予定組む
走るのは止そう彼岸が見えてきた
ガラクタが詰まった貨車を切り離す

恒松 町紅

親切が伝わってくる杖の先
老いの指ひと口注いで憂さ忘れ
小道具を使って老いの閉つぶし
越えて来た道振り返る卒寿坂
何ごととも老化の所為にしてしまい

津守 柳伸

伊勢志摩が招く遷宮から初春に
初詣で無事息災を祈るのみ
スケジュールこなす確かな坂がある
身動きのできぬ呪縛も生きる糧
反核の狼火世界に咲かす花

遠山可住

お湯割りの焼酎一合八十路行く

敬老会まだ酒だけはいける口

秋刀魚焼く煙も見えず秋の風

グランドゴルフ老人会の腰が伸び

表彰状の一枚くらい残さんか

都倉求芽

赤くなるもみじへすがる茶屋の屋根

今年また消えた板ありまねき揚げ

病む妻に従うほかはない鳥

冬の陽にただ横たわる歩道橋

夫婦独楽今年もなんとかきた師走

土橋 螢

寝たきりにならないようにドッコイシヨ

勝つための大和魂持ちちぐされ

謹賀新年今年も白い道をゆく

蟹籠から籠の落とし子現われる

荒城の月尺八を吹き鳴らす

西出楓 楽

散る花はみじんも愚痴を洩らさない

杉玉の緑いのちを喜ばす

物差しはそう簡単に変えられぬ

もうそろそろ遺影を撮っておくべきか

ボジョレーが出回り街は冬兆す

仁部 四郎

お元日方便でした大晦日

方便のつもりなどないお賽銭

方便の数は知らないお釈迦さま

方便と客も承知のコマーシャル

方便で憲法を読み毘に陥ち

波多野 五楽庵

風花のこぼれる夜の寂しさよ

死を見つめ生を見つめた寒椿

初雪を涙で染める無明かな

つまづいた自叙伝ばかり書いている

命下さい昔の風に逢えるまで

林 瑞枝

青春の火種は今も胸の底

金婚の金盃を皆さん廻し飲む

にんげんの自然治癒力素晴らしい

桜を見る暇なし博士神にされ

雪の降るちちの夜景にあるロマン

前 たもつ

アンパンマン天国あたり飛んでいる

アンパンマン孫のお守りをありがとう

フクシマへいの一歩にアンパンマン

弱いから弱さに添えるアンパンマン

アンパンマンの心聖書に通じ

政岡 未延子

最早や駆け出すかまえになつて午の春
心富むはなしが届く春の耳

朝の陽を掻き分け犬を連れ歩く
人より早く年齢を頂く早生まれ

春が来る彩に繋がる伯耆富士

三宅 保州

風向きが急に変わったあみだくじ

献体はできぬ身体でボランテИА

ありがとうだけでは言い足りぬ感謝

一対の手袋でよし夫婦かな

生きていることが好運だと思ふ

宮西 弥生

少しだけ鬼を演じて夜歩く

限定の血液もらい再起する

空気一変刃物ピストル昼の町

紅葉が燃える人間狂想曲

何故生きる疑問もなくて生きている

食器棚

パズルみたいに皿のかけらを置いたりして

それぞれの用途に積んである水屋

ノリタケと昭和に通うティータイム

小鉢には明日の卵を三個ほど

百均の皿つつましく悪びれず

八木 千代

八十田 洞庵

ふと耳のせいとも思ふ白昼夢
老いの詩カカナ辞典買ひに出る

屑籠に昨日の仮面捨ててある
丸まった石に流転の私語を聞く

供養なき無縁仏に蟬時雨

両川 洋々

けもの道の女で風と火を宿す

短命の手相笑うな大空よ

原発のいじめか除染まだ続く

逆ギレの連鎖がつづく自爆テロ

仁王像一度笑つてから死ぬよ

板尾 岳人

おめでとうございます御先祖さま

じゃがいもとアンパン食べて三ヶ日

神棚に伊勢海老供え初詣で

長生きの秘訣を祈り風を食べ

動かない時計を入れた玉手箱

奥田 みつ子

八十年生きてこの世も悪くない

ありがとうゴメンナサイの持つ威力

風がささやく人の絆の不可思議を

夕陽まっ赤今日のかなしみ焼きつくす

陽が昇る新たな命漲らせ

正解が一つでなくて迷わされ
なまじつか口を挟んだのを悔やむ
ガラス越しほかほか温い祖母の部屋
最早無理利かぬ体をつい忘れ
視点換えやつと挿んだキーワード

河井庸佑



青谷小学校 川柳クラブ

「初雪」「クリスマス」



初雪は白き花びら舞うよつだ

(六年 相見 秀仁)

初雪に心奪われ立ちつくす

(六年 黄金 咲希)

プレゼント楽しみすぎてねむれない

(五年 田中 そら)

クリスマス子どもの期待裏切らない

(五年 長谷川奈緒)

初雪は冬が来たこと知らせます

(五年 村上 舞)

サンタさん来るの待ってるクリスマス

(五年 廣澤 真凜)

クリスマス楽しい時間いっぱいだ

(五年 谷尻つかさ)

クリスマスその日はサンタも忙しそう

(四年 吉村 茉佑)

温故知新

『谷垣史好句集』より

看板の誤字気にしない気にならない
うどんともいえぬ値段になりけり
空瓶のフタのないのは寒そうなる
男はんに言えん病気があるのなり
雨だれを黙って聞いている破局
予報官職場に傘を置いてあり
青春が欲しくて麦藁帽を買う
秋の空きようも小さな嘘をつき
子供会のこと今夜も出てはりま
玄関を出しなに用を言う女
阪妻の人を斬る眼と恋うる目と
待ち呆け酒饅頭を買うて去に
正月も昔の父は恐かった
時間給にしたらお布施はこんなもの
庭の八つ手のアナクロニズム
靴音の高い女を許せない
啓蟄や寝起きの悪い虫もいる
ギャンブルがない水曜の空の色



川上 大輪 選

松江市 藤井 寿代

熟柿の甘さは男の頼りなさ
深い井戸覗き少女は女へと
咲くときを秘かに待っている少女
蹴飛ばした丸い石にも笑われる
両手でも掬い切れない灰汁が出る
増税にT P Pの落シブタ

横浜市 川島 良子

夢にでぬ貴方わたしを忘れたの
転んでも独りで起きる他はない
冷静になろうならねば水を飲む
その件を除けば君はパーフェクト
浄土への道貴方へと続く道
何もかも許して年が暮れてゆく

山口市 中前 幸子

坂のある街ゆっくり抜ける亡父の風
虚構の家に置き忘れてる古帽子
真夜中の窓から闇を削る音

雲のメルヘン天空に描く白い街

郷愁の草笛古民家を抜けて
貴婦人号のんびり過疎の絵の中に

岡山市 藤成 操江

泣き笑いあつて平らな現在地
日溜りが好きでゆっくり息をする
白黒の真ん中辺が心地好い
余生だと言えば景色を暗くする
錠剤を忘れて今日もいい日和
コンビニの弁当でよしもみじ狩り

瀬戸内市 東 槇 ますみ

平凡に生きた両手を誉めてやる
今日生きるための尻尾は振っておく
嬉しいと財布の口がよう開く
空想の中で女を咲かせてる
車間距離たっぷりとって共白髪
ぬくい手だいろんな風を知っている

和歌山市 北原 昭枝

露草の玉の命が光ってる

遠い日へ並んで座る菊日和

母しのび秋の日ざしの障子張り

手鏡へ映る回想薄化粧

もろもろを思い眠れぬ長き夜

窓の灯にさまざまな色あるくらし

大阪市 高杉 力

そのうちに飲もう飲もうともう五年

ふらり来てふらりと去って行つた恋

仲直りしてはと丸いお月様

変換キー押せど変わらぬうそは嘘

なで肩に譲れないもの乗せて生き

飛ばないでいると飛べなくなる翼

貝塚市 吉道 あかね

これからは自由気儘に行く六十路

瘡蓋が出来て悲しみガードする

扶養家族できずに椅子が余ってる

黄昏れて感謝すること多くなる

ワイン色足して夫婦の秋を編む

尖った頃はキラキラ光ってた

松山市 神野 きつこ

ごちそうさん家族は誰も言いません

ペンネーム違う私が語り出す

便利だが金も時間も足りません

新米がうまいだけでも丸儲け

砥部焼の里でろくろを回す秋

消費税上がると生きるのが辛い

三田市 上田 ひとみ

カッコイイ話をちゃんと聞ける人

だからいまおいしい酒も飲んでおく

とりあえず結論なんかなくつても

尻尾だけ残しておいてほしかった

きれいで汗も涙もまつすぐで

まだ少し時間下さいお返事は

河内長野市 辻村 ヒロ

ゴミ出して世間話に花が咲く

ザワザワとまだ落ち着かぬ古稀の坂

新米が体重計にそっぽ向く

未知数をカバンに詰めた孫の靴

次の世へ繋げたことが生きた意味

毎日を楽しく生きるオブラート

神戸市 山根 弘子

忘れたい過去を小舟にそつとのせ

時忘れ夢中に話す武勇伝

ワンテンポおくれた老のもどかしさ

美しく咲いて散りたいこの命

苦勞など忘れちゃったと母笑う

ひきだしの中は私の秘密基地

大洲市 花岡 順子

横浜市 巖 田 かず枝

私を支えてくれる膝の猫

やせがまんせず甘えて暮らそうか

育ち過ぎましたと高い背を丸め

心配をかけないように空元気

支え合う事で元気が湧いてくる

難病をおんぶにだっこして四年

これもまた個性だろうかバラの刺

遅しくないのに神に試される

小母ちゃんのパワーで今日を生きている

ふくしまの米も魚も辛かろう

香南市 桑名 孝雄

横浜市 長 島 亜希子

この一年も天の命ずるまま生きる

年齢差歩く速さで知る夫婦

悟ったよな悟れないよな顔で生き

脳トレも散歩もしてもこの程度

八合目ここで一服火をつける

初期手当上手と医者にはめられる

もうよかろうもうちよい行こか八合目

謝罪会見部下ならもっと上手くやる

新年の抱負はいつも辞世の句

弾痕が悲しい過去を記憶させ

弘前市 高森 一 吞

静岡市 渡 辺 芳子

うっとり三面鏡の風呂上がり

夢の中名句が朝は消えている

淋しくてコンビニで愛探してる

盛り上る昔の歌だけ戦中派

掘ると出る疑惑だらけの食文化

青空に石の風車の似合う町

まだあるよ虚偽メニューは我が家でも

八十路すぎ昔好きだったと言われても

生命線とどこどころが切れかかる

くたびれるよけいな事を考えて

弘前市 吉川 ひとし

豊橋市 藤 田 千休

伸び切ったゴムに未来を託せない

晩学にブレーキかける物忘れ

約束を守らぬ月が遠いから

リストラで自治会長に天下る

近道を熊の親子が日向ほこ

免許返上規模縮少のテリトリ

二階かららくらく降りてくるサプリー

貸切のように見えます過疎の道

刑法に触れる事ない酒の量

グラビアに僕の残り火試される

長岡京市 日置 みどり

亡母の愛日にち薬で効いてくる

時々は陰を孕んだ我が鏡

無知ゆえに無罪などとは言えません

先督めて全て手直す華道の師

川柳に人生の機微教えられ

大阪市 宇都 満知子

夫婦にもほどほどの距離平和です

当り前その日常の難しさ

久し振りヒール履いたら足が吊る

ひと言を掛けてもらって軽くなる

寒風にキュッと感性研ぎ澄ます

大阪市 内田 志津子

すっぴんで過ごす休日本音出る

娘とは雨のち晴れでいい感じ

川柳で脳を鍛えて再稼働

わたくしの姿形は偽装です

公園の鳩が権利を主張する

大阪市 大治 重信

父が抱き母が手に持つ千歳飴

出世せぬ者だけ残る同窓会

へぼ将棋喧嘩相手の逝った秋

満月を誰も入れない部屋に入れ

会心の句を披露して顔つるり

大阪市 太田 としお

何もかも知ってしまえば気が抜ける

ポックリを皆んな心で願ってる

愛国心育てて平和遠くする

暇してる日本シリーズトラファン

優しさと同居している無責任

堺市 梅木 澄空

かくし芸レパートリーも色褪せる

スカートにどこか行くのと子に聞かれ

妻と娘の判断つかぬ電話口

会いたいね決まり文句の賀状かな

お日様の匂う布団に寝るリッチ

堺市 羽田野 洋介

なるほどと感心してる時じゃない

洗った手あちこちで拭く悪いくせ

予想気温着て行くものに迷う日々

机の上見れば性格よく分かる

あしたならやれると思うことにする

泉佐野市 稲葉 洋

二の膳も終えて品書き読み返す

浮き草にだつて忘れぬ土がある

忘れたい封印したい現世の苦

冷静に告知聞いている俺が居る

苦も忘れ重荷も置いて来いと弥陀

貝塚市 石田 ひろ子

渋柿がたわわの道を暮参り
妹も幸せそうに老いている
晩学の辞書から湧いてくる若さ
松茸の香り記憶から消えた
みかん剥きながら夕餉考える

河内長野市 藤塚 克三

思いきり無駄遣いした夢
尻に敷かれ平穩無事と空威張り
診察後単なる疲労酒呑むぞ
走り書きの自分のメモが読めません
寂しさについて聞き惚れた虫の声

河内長野市 穂口 正子

病身に引きずる夢が疎ましい
悔しさを反芻している眠れない
こっそりと貰った悪意投げ返す
急ぐ事なにも無いのに前のめり
母さんが笑うことだけ話します

豊中市 源田 啓生

漢字皆忘れパソコンさん頼む
百歳がゴロゴロ私しゃ未だ若い
皿回すそのバランスに乗るいのち
達筆の文字が冷たい気もする日
古写真想い出ポロポロ落ちて来る

富田林市 中村 恵

こだわりを捨てれば明日が見えてくる
胸底の思い一気に迸る
逢いたいと言われたじろぐ訳がある
息継ぎのコツを覚えて楽になる
かごめの輪秋はひっそり真後ろに

羽曳野市 藤原 大子

イメージはあるが言葉が出てこない
家恋し気楽な旅も三日迄
おもてなしの心泣かせる食偽装
ストレスが溜まりそうだと友に会い
枝に柿残して鳥へお裾分け

箕面市 寺井 柳童

UFOを宇宙の使者と信じてる
豹柄を着て堂堂と北・南
張り替えの障子を破る音が好き
景気よくなったと言うがピンと来ず
聖火トーチ宇宙遊泳して帰還

寝屋川市 岡本 勲

喫茶店ぼんやりコーヒー飲む至福
新聞と女房変えずに五十年
おばちゃんが群を解く頃日が暮れる
完熟の私これから落ちるだけ
老いてなお妻にも言えぬ秘密もつ

大阪府 神野 千恵子

スマホ族ひとりぼっちに馴らされる
もひとりの自分が過去にしがみつく
裏表あつて恙無く生きる
不平不満一杯持つて雲動く
国民を質札にして好景気

大阪府 西川 冷子

五輪と米寿照準合わせ七年後
紙飛行機風をつかんで放さない
コンバイン千枚田では休憩す
巨大ビル谷間に隠す中之島
歴史ある暖簾崩れる食偽装

大阪府 畑中 節子

冬瓜がふて寝している勝手口
歯切れよい音を楽しむ歯の自慢
淋しげに片はずれた秋簀垂れ
あざやかに紫式部庭の華
献立てのきまらぬままに大根煮る

神戸市 木村 忠義

生き方はいろいろあるが僕らしく
愛情が過ぎてあの梅枯れました
B面の心が同意してくれぬ
高齢者マークをつけて気負わずに
晩酌を楽しみにして生きている

神戸市 玄番 美恵子

秋の空ちよつとセンチな昼の月
枯葉散りふつとシャンソソ口ずさむ
木犀の残り香揺れて秋の章
新米をさらさら研いている至福
ごめんねと言えぬ心が揺れます

尼崎市 中井 楓花

待つてや出世払いという息子
里帰り様変わりして道迷う
ダイヤより優しい言葉欲しいです
花ことば信じて今日も生きていく
オレオレと言つても我家娘だけ

川西市 大坪 一徳

思い出を確かめに行く一人旅
思い出の続き楽しむ夢の中
靴の中小石が一つ罪一つ
木犀が妖しく香る角の家
桜より紅葉が似合う歳となり

宝塚市 丸山 孔一

忘れたと思ひ出せばまだいける
あの人も前は良い酒飲んでいた
今でしょと言われ手も出ぬ足も出ぬ
一円が足りぬばかりに硬貨増え
ポツリ来た出そか止めよか折り畳み

齢を重ねても心は青年

西宮市 株元玲子

いい加減にせよとカレンダーが言う

おやつ箱いつの間にやら葉箱

喜寿迎え少しブレイキ踏みます

週末は心空にし惚けます

奈良市 尾畑なを江

生かされて暑い寒いのくり返し

ままならぬ事も多くてはかどらぬ

気配りでアイディアひとつゲットした

ほろ酔いで別の自分にめぐり会い

お昼寝は猫と同じの姿です

和歌山市 さかたきく

長い列並んでみよう秋日和

日記帳嬉しい事も一つ書く

じゃまですか季節はずれの桜咲く

ウォーキングコースは犬が決めている

茜雲の下で拾った明日の夢

和歌山市 福呂秀子

鏡見て亡母思わせはつとする

自分流守り続ける七十路

じつくりの電話はらはらバス時間

ポストまでこれも散歩と足軽く

携帯が鞆の中で隠れん坊

岩出市 村中悦男

話したい話したくない夢を見る

過疎の里道を尋ねる人もなく

妻という二字の支えである余生

何時の間か嘘に酔ってる時もある

しばられたひもがとけない思い込み

紀の川市 楠原富香

目も耳もあけて好機を掴み取る

人生の節目に祈る母がいる

ふる里の母と共有する夜空

平成に生きて昭和の血がさわく

大海で試してみたい可能性

田辺市 小川イセ

お出かけへ祖母のファッション念が入り

手鏡を拭いて見直すこれからの

幸せを積む汗今日もたつぷりと

良く動く手と足神のおくりもの

身も心もゆつたり癒すバスタイム

和歌山県 森下よりこ

柿もみかんでも熱中症の痕がある

私を安心させる済んだ月

子の部屋に時々灯つけに行く

秋を楽しむ余裕もなく急に冬

温度差があっても家族居た昭和

鳥取市 谷口 回春子

無駄口へレッドカードをさっと出し

訳ありの言葉で誘う好奇心

駄目もとを承知の上で願をかけ

無口でもどんだんことは先へ行き

わがままがあつちこつちで墓穴掘り

鳥取市 津村 律子

楽天の優勝被災地に勇氣

ベースボール終りゆつくり相撲見る

叱るならやさしい言葉効きめある

投函日震災の月命日だ

倉吉市 岡崎 美知江

立つ位置を一寸はずして言ってみる

玄関を出たか出ぬかで灯を消され

罪一つかくしています手の内に

すっかりと忘れたという処世術

不器用で喧嘩も出来ず風になる

倉吉市 中村 毅

うどん屋が介護施設になつていた

若者はいいなりンゴ丸かじり

土壁が鏝一本で美術品

そのお世辞透けて見えます腹の底

松茸が今年も僕を素通りし

米子市 生田 和之

目にメスを入れて広がる秋の空

推敲が足りぬと朝に駄句が泣く

近頃の秋刀魚やたらに化けたがる

アベノミクス税と物価をちよいと上げ

九連覇憎いナインをまだ言える

米子市 小野 鶴子

たつぷりと浸っていたいこのムード

乱立のビルの谷間に隠れ棲む

みんなして耐えた昭和の芋の粥

薔薇の棘枯れても人の指を刺す

懐かしや昭和のソング身に染みる

米子市 加藤 正二

秋日和きしむ体に油さす

掛値なく喜怒哀楽のひとり旅

天地人騒がし過ぎて寝つかれず

歳重ね必要なことがよく抜ける

年の功目耳手足がよく騒ぐ

米子市 田村 周子

真面目一筋これも世渡り一手です

憂さもあり人生たのし旅路いく

紅葉は霧にかすんだ大山寺

熱のある病人食に悩まされ

元氣だそ楽天魂教えられ

米子市 野川宣子

昼の酒五臓六腑を攻めて来る
微笑んでそれからやおらお願いを
親になり親の心が身に染みる
散らかった部屋が一番リラックス
おとなりの猫も我が家でリラックス

鳥取県 田口清帆

頑張れよ無理をするなよ休むなよ
金持ちと思われているお年寄り
ここだけの話に首が長くなる
原発がなくなる日はいつだろう
心配をかける家族のいる安堵

松江市 武島千代枝

後期高齢亀の歩みで暮らします
風に乗り枯葉は宛のない旅へ
流れ雲明日の約束してくれぬ
強がりもやはり優しさには脆い
速回しに言えは通じぬもどかしさ

岡山県 田中 恵

道草で拾う楽しくなる内緒
動物のママから学ぶ子のしつけ
距離を置くことを学んだ影法師
留守番にもならぬとポチが叱られる
番組の終わった頃に目が醒める

岡山市 丹下凱夫

一切を知らぬふりして聞き上手
栗落ちてしずかな山の音拾う
目力に負けて一緒に暮している
今か今かと月下美人の花囲む
日々にお酒を飲んで凡夫です

岡山市 永見心咲

一期一会この世で拾う華の数
一滴の出合い集めている途中
二番手が気長に待つというポーズ
二番煎じ母のコピーでいい私
二輪車のカゴに溢れている夕餼

竹原市 國實力

八十五いま八回の裏あたり
じいちゃんにワタシ似てないよねと念
負けて勝つ今なら笑って負けてやる
チャイム鳴るさてさて何を着て出るか
師の影は踏まずご無沙汰ばかりなり

竹原市 若年幸子

美味しくて食欲の秋とまらない
秋燃える夕日紅葉わたくしも
手作り服断捨離なんてとても無理
進化したトイレとまどついている老い
胃カメラが内部事情を開示する

もう子には頼らぬ愚痴を今日も聴く
竹原市 土井輝恵

銭仰山取って修正せぬ写真

外猫が通い夫のように来る

一万歩ノルマこなしに午前五時

玄關を出るとひしゃくの星に逢う

香川県 田口彦六

早寝して欲得のない夢ばかり

広告の仁丹おじさん若返る

たこ焼きを登校拒否の子と食べる

甲羅干す亀は時間を消すように

今治市 渡邊伊津志

身に迫る話へ路地の風抜ける

言い迫る語尾に野心を研いでいる

一時のゆとり生き甲斐振り向いて

去る者は追わず小高い山が見え

四国中央市 篠原久

新年は階段一つずつ登る

苦勞した汗は大事に溜めておく

人生の記憶に残す立泳ぎ

彼岸花咲く頃母の一周忌

高知市 三谷待太郎

天高くカラスや百舌やPM2.5

冬が来た合いの服装着ず終り

齢老いて長い縁に似合う旅

古女房恋女房だると糾された

弱点をさらし笑いの種をまく
北九州市 小松紀子

ボランティア呆け防止にもなってます

今日行く処があるから元気です

よっしゃ眠れぬ夜は句を作ろう

福岡県 本田さくら

OB会古希は若いと卒寿言う

OB会薬看病盛り上る

隣よりもらった柿で秋食べる

雨しとど通る人なし昼下り

唐津市 岩崎實

欲しがるがそしらぬふりの術後です

貝汁の看板残し店つぶれ

投函は自分でしたいそぞろ秋

欲しいものところせましと買った品

唐津市 北村松風

観光地熟女かけ込む紳士用

マンションが格安でした墓地の裏

逆立ちの岩魚が囲む囲炉裏の火

減り具合妻が目盛をつける酒

唐津市 吉富節子

気は若く皺が気になる八十六

山積みアルバム整理時忘れ

お祭りがすんで女の笑顔でる

へそくりを小出ししている曾孫にも

問題は無いけど何かつまんない
うかつにも心痛める距離にいる
パスワードもう私ではなくなった
冷えた指以下同文の中の冬

佐賀県 真島 久美子

不便さが脳にとつても良いらしい
台風のごさ地面を持って行き
天災が人災になる世の不思議
無尺蔵に掘っては湯が足りませぬ

熊本市 杉野 羅天

卒寿なり貧も富も幸せも
一足遅れ秋茄子嫁に先越され
白山茶花桜花の如く秋の風
稲刈られかかしも帰り群雀

山鹿市 前田 幸子

先ず大人道徳学ベ子はあとで
そこらじゅう嘘偽りの大和魂
疑って食うものなくて引きこもり
喫煙所空気が悪い外で吸う

山鹿市 三谷 たん吉

何もかも隠すつもりが顔に出る
無言でも居心地が良い席が好き
絡まって先が見えない赤い糸
肝心なことは忘れる地獄耳

山鹿市 米加田 恭代

梯子して青春をした映画館
東北の復興祈り買い支え
ゴスペルの響きに血潮騒ぎ立つ
手を握り互いに生を確かめる

札幌市 斉藤 宏子

仏様教えてほしい残余命
役回り損と知りつつ口を出す
灰汁も抜け夫唱婦隨の八合目
足るを知る座右の銘にする私

札幌市 佐藤 登美子

旅をする思い出預金胸の内
葉掘る葉草園の昼下がりに
なれるなら櫂のようにどっしりと
青首が立派になつてのけぞって

札幌市 富永 恵子

暴走もあるぞと脅すうまの年
馬齢だったとは書いてない自分史
アルバムの余白を埋める日日あらた
重箱で我が家のエビも縮こまる

塩竈市 木田 比呂朗

ステッキへお先にどうぞ松葉杖
松葉杖上達前に快復し
遠山の紅葉踏みたい膝が言う
窓々の干し物ずらり台風後

つくば市 嶋本 喬

東京都 大竹 一良

純白に少しほかしを入れてみる
長老に丸めこまれた酒の宴
気まぐれに乗った話で恥をかき
灰色も潔白という厚顔さ

東京都 高岡 弥生

ドリンクも選んでくれる販売機
献血し気持ちだけでも健康に
ミッキーに現実逃避助けられ
高額な物ほど怖い化粧品

熱海市 三谷 圭角

加齢故仕方がないと医者と言う
旧友が来て五十年若返り
傘寿過ぎ断ってまた書く年賀状
山登り遭難してもまた登る

佐渡市 高野 不二

忘れては居りませんよと来る賀状
年金があるから俺の方が勝ち
置き薬俺の持病を知っている
診察日毎に薬が一つふえ

富山市 有澤 嘉晃

よいこともあったじゃないの下り道
楽天家猿を一頭飼育する
よその子を叱れば親に叱られる
一人飲む酒の肴は電子辞書

岐阜市 平野 あずま

亡き父の喝に真夜中目を覚ます
マイナスどうし掛けてプラスを作り出す
誠意ある言葉心のドア開く
金のなる木我が家の土に馴染まない

江南市 脇田 雅美

金印高級品と思い込む
土産物商標だけで売れていく
座れない畳の上に椅子並ぶ
シャープペン顔を何回出したろう

愛知県 樺 嶺志

気がつけば溜まり積った雑誌類
小春日に室内勤務嘆く友
衣替えある筈だった服がない
暮れ準備定まらぬ中年賀書く

京都市 清水 英旺

門外漢のいう事だから一理ある
幼児語しか喋れないのに英語塾
文庫本の字小さくなってきた灯下
秋の夜長付き合ってくれる周五郎

大阪市 浅井 公平

ボンクラと言われた意味に今気付き
お金ない代り生き様残しとく
推敲をするたび意味が大変り
句会あとの飲み会だけは皆動だ

大阪市 梅里南天

ドラマよりネタがつきないやせ薬
仙ちゃんがジャイアン倒し雪見酒
いつもより悲しそうだねアンパンマン
夏行けど小さい秋も見つからず

大阪市 岡田元

初詣老若男女着飾って
錆びついた頭たたいて句をひねる
肩の荷を降ろして楽になれと天
待ち合せ情報不足すれ違い

大阪市 柴本ばつは

関心があります横に座らせて
気が付けば敵も味方もいたわが家
もうちよつと肩幅ほしい男前
知らん振りするたび胸をうつ動悸

大阪市 寺本実

コーヒーに皿がつかない仲となる
うかうかと笑顔につられ本音吐く
まばたきをウインクと取る楽天家
今でしょの投資の話聞き流す

大阪市 栃尾奏子

野苺のままかとおとめになるか
おあいにくさま惚れっぽいおんなです
よそ行きの顔で夫にバツタリと
渋滞を抜けた二人のハイウェイ

大阪市 橋本典子

何げなく投げた小石で目高散る
これでもかと生駒の紅葉攻めたてる
今でこそ笑って喋る過去の恥
初恋の君と繋がる細い糸

大阪市 藤田武人

ただいまと声高らかに言える日々
寄り道がつまりらなくなる妻の味
父に似た性格母も領いた
三角も父の主張は四角です

大阪市 前川善之

アレルギー減税すれば治る筈
妻の顔見ながら作る晩ご飯
値の高さ旨い味とは限らない
人生も百点のない遠い道

大阪市 松田聰

強さだけ求めていても勝ち目ない
九条をアンパンマンも愛してた
知らぬ間に法案決まる恐ろしさ
通らない道理を無理にする偽装

大阪市 吉田知之

整体師の耳学問に癒やされる
やめた医者今も看板上げたまま
立つたびによいしょよいしょで苦笑い
托鉢にご苦労さまと報謝する

せかせかと生きるのなんかご免です
白黒がつかずグレーに甘んじる

堺市 近藤 治子

優先順位趣味は最後まで決めている
あふれる湯首を浮かべてのんびりと

堺市 増田 わこう

堺市は維新のおかげで名を上げた

下駄雪駄昭和は遠くなりけり

高齢者戦争敗戦生き抜いて

少子化は歪んだ社会の反映か

堺市 山崎 早苗

ガスコンロ磨いた日の夜出前寿司

見定めてレジ列並びまた負けた

お若いねその一言でご購入

ペランダの布団の上で一休み

堺市 大和 峯二

あの世にも地震津波はありますか

金儲けしてもあの世で使えない

人間という肩書きで日々生きる

余生では力を抜いて生きてます

池田市 上山 堅坊

負けたつて乱れてならぬ勝負事

退屈な話にメガネ拭いている

好きな秋無くなりそうな温暖化

妻と僕無駄の基準にあるギャップ

泉大津市 助川 和美
かちやかちやと牛乳ビンの音昭和
盆と正月顔見せにくる嫁は客

分かつてる別にはかりの孫といふ

「お疲れさん」自分に褒美露天風呂

河内長野市 大島 友子

ぼんやりとうっかり今日も鉢合わせ

目をつけたがらくたこそが値打ち物

悪い癖つい口にする残り物

吊り橋の揺れに心も揺れ続け

河内長野市 渡邊 修

恐妻の割ったお皿が百を越え

年金が出る日必ず孫が来る

年毎に良いも悪いも親に似る

愛嬌がなんともいえぬ内の孫

岸和田市 中岡 香代

北風とラストダンスを舞う落ち葉

神様も許せない事あるだろう

手の上で消えてしまった雪うさぎ

鎮座する松竹梅に改まる

高槻市 三谷 白黒

飼主に犬も似ている歩き方

注意して親爺と同じ病です

食通のおすすめ料理ニセだった

何もせず腹も減らずに困ってる

高槻市 原 洋志

嵐電の中に師走が座つてる
年の暮れ曲がりくねつたところで飲み
新聞を斜め読みする十二月
もう師走作法通りにルミナリエ

豊中市 荒木 郁子

叶うなら奮発するでお賽銭
取り合えず返事はハイと言つておく
ひとことを足さずにおれぬ妻の口
消費税じわじわ首を絞めてくる

豊中市 荒巻 夢

血液型信じてないが口合わす
クラス会相手の老いがよく見える
憧れた独りこんなに淋しいか
先ずは今日することのあるありがたさ

豊中市 石橋 優明

ふと人が消えてしまふような夕べ
山の端を転がりだしたお月さま
まっ白に漂白をしたことばたち
夜半すぎそつと神の手に触れる

豊中市 貝塚 正子

絵馬光る天満宮に春の風
ああ愉快腹は布袋のようになる
今年こそ七福神と祝酒
お年賀に我が家の味をもつてゆく

富田林市 関 よしみ

胸底の本音が爽やかに笑う
羽ふわふわに畳んで私らしく
五線譜に踊る私の四分音符
宙吊りの真ん中辺にある芝居

富田林市 肥山 一文

夢で逢うあの日別れたあの人に
預金帳あることさえも忘れてる
趣味に生き余生まだまだ足りません
絵本読み孫とのすき間埋めている

寝屋川市 荒川 鈍甲

老醜を見ぬふりしてねおほる月
冷える世に温もりさがす街すずめ
しあわせを探しあぐねて見る夕陽
温暖化ヒト科の咎を空が問う

羽曳野市 安本 美喜

しめ飾り福の神をも迎え入れ
復興へ日本一もありがとう
着回しをして月一回の診察日
ごちそうさん観ると涙のこぼれそう

羽曳野市 磯本 洋一

しんしんと雪降り秋が脅える日
雨風が知己の契りを消し去って
父母のいて田舎芋粥啜る朝
アイパッド家庭教師は孫頼み

枚方市 河田 洋子

兄が逝きだんだん実家遠くなる
老いてから駆け足で時過ぎて行く
根気なく投げ出す事が多くなる
惚けまいと趣味に精出す日々暮し

枚方市 坂本 ミヨノ

占いで孫の命名日々悩む
悪童が壁に落書き食事抜き
家探す派手な広告脳疲れ

夢の中冷気に布団落ちていた

枚方市 松原 保

食べたかった食わずに済んだ偽装肉
セレブたち味より自慢の食べる場所
世間様だまして肥える商いか
今でしよう本物食べるチャンスです

松原市 市川 雄太

閉幕の球界次の年を待つ
来年に向けて目線を切り替える
狂ってる時計の針が僕をさす
思い出は残して後に振り返る

箕面市 村田 恵子

ぱつと来てさつと帰ってゆく息子
痛さと不安ただじつと猫を抱く
言い訳はややこしくなるからしません
コロコロがクスクスになり娘の成長

八尾市 赤木 妙子

次々に訃報伝える秋の乱
スタチが届くサンマを買いに行かなくちゃ
ごめんネと言ったら取れた鬼の角
なめらかな舌味方とは限らない

八尾市 田邊 浩三

女房の決め手はいつも何時禁酒
原発の決め手値上げか停電か
バレたならココは土下座で決めとこう
里に湧く清水がなぜに汚染水

八尾市 前田 紀雄

晩酌はラベル気にせず飲んでます
台風が大平洋を闊歩する
コントロールの事ならマー君に聞け
日本中螺子が緩んで籬外れ

大阪府 小栢 こずえ

巻き戻し出来ぬ老後を泳いでる
リハビリに届かぬ夢を持ちつづけ
ガイドする人を横目にすぐ忘れ
見られたら困る日記を書き続け

大阪府 高木 道子

苦勞とは後につくづく思うもの
偽という字再稼働する西東
同窓会喋りたがりと聞きたがり
東の間の夕陽が染める五輪塔

神戸市 井上忠貞

願わくば樹木の下に眠りたい
広い庭無くても楽シミニ花壇
お互いに耳が遠くてかみ合わず
凸凹もテンポ合せて五十年

神戸市 輿水弘

倍返し怖い言葉で元気づく
さらさらと流れるように生きられぬ
迷っても朝焼け雲の消えるまで
生返事気づけば高い付け啜う

神戸市 能勢利子

迷ったらどれにしようか童歌
天邪鬼やめて大人になりました
簡単な漢字も書けず辞書を引く
まあいいかと思えば鬱も逃げていく

神戸市 松井文香

念ずれば花開く事知りました
合言葉スマイルですよ我が家族
六回目躍進します千支は馬
心経を唱え心の揺れ鎮め

尼崎市 小池幸子

秋深む田のひこばえにかほそい穂
老いの坂思ったよりもきつかった
秋深みミカンの甘さ日に増す
腹八分心にかけて老い達者

加東市 安達厚

一本のすすきを生けて秋告げる
オリンピック老いに七年長過ぎる
菊花展愛でて今年の秋終る
蟹シーズン先ずはセコガニ買ってくる

加東市 岩本美緒子

阿弥陀仏自転車に乗り唱えてる
ムンクの叫び一緒に叫ぶ夢の覚め
スケジュール病院の日はふとん干す
機嫌よく遊べアトリエ小宇宙

加東市 黒崎美紗子

絶食の検査入院瘦せちゃった
どうしよう自転車めれず歩けない
美味しくて体重元にもどったか
入院中思いがけない人と会う

川西市 日野岡和之

金色の夕陽喰ったかあかね空
不器用を旗印にする人間味
茶柱が立ち泳ぎする楽茶碗
真心が少し足りない十三夜

篠山市 石田久子

おしゃべりが弾む足湯の初対面
とりあえず入れて忘れる冷蔵庫
ブランコに遊ぶ子もなく黄昏れる
そうですねママアアですとぼかしく

無事済んだ今日の一日手を合わす
篠山市 北澤 稠民

毎日を不平言いつつ共白髪
老いてなお見栄が身なりを若くする
七十路われを呼ぶのか寺の鐘

篠山市 酒井 健二

偽装して和食文化に味噌付ける
枯れかかる涙求めてワサビ盛る
待つ人を忘れ切つてるシヨッピンダ
公害に未来が霞む都市北京

篠山市 佐々木 勇

怖いです時どき意識散歩する
息抜きと思えば付いてくる尻尾
メールより手っ取り早い電話口
五輪まで生きて行かねば竹を踏む

篠山市 永井 かほる

騙される甘い言葉にとげがある
まびき菜のあつさり漬けた旬の味
七月に蒔いたキャベツの出来のよさ
友去つて今だに思うなつかしさ

篠山市 藤井 美智子

日本食偽装世界に恥ずかしい
外面が良くて家では貝となる
ぐずぐずもたまにはいいか息を抜く
年金の許す範囲で羽根のばす

せつかちで独り善がりの困り者
何曜日確かめあつて老い二人
若輩も実は熟したか五十年
ゆつたりと至福の時間夫は留守

三田市 足立 つな子

三面鏡シニア資格はフリーパス
病院も同窓会と同じ顔
妻家出飼つてる猫も居なくなる
車椅子孫にとつては乗用車

三田市 今西 廣子

ホスピスで見舞う言葉が出てこない
八十路過ぎチャンで呼ばれる姉が好き
我が家にもホテルに習い五つ星
ラブホテル孫に気遣う回り道

三田市 雑賀 一泉

この子等に残したくない負の遺産
投資したはずの我が子はカラ手形
家庭では妻が与党でオレは何
保護法が通れば隠す権利増え

三田市 多田 雅尚

日記帳たまにめくつて覗く過去
みえみえとわかる言葉につい甘え
ボケ防止床につく前覚え書き
温暖化自然壊して付けが来る

三田市 辻 開子

三田市 野口晶子

福袋許容範囲の夢ばかり

いかがかねお話し特価のこの私
行き過ぎたコスプレ似合う老人会
誉め言葉本当と信じて咲け私

南あわじ市 萩原 狸月

この先に何が待ってる喜寿の坂
帰省子に元気な顔を見てもらい
平穩を乱されうれし三ケ日
年玉をもらえば用のない田舎

西宮市 福島 弘子

上品そう言われる白髪悪くない
川柳を意外な人もいいと言う
おーいお茶爺の口まね三歳児
携帯を持たされた上り事増え

西宮市 藤本 直

ジキルからハイドに変わる四杯目
ナマケモノと同じ早さで動いてる
病名が付くまで検査また検査
ひよつと来て元気かだけの友が居る

三木市 山口 久子

年老いて見ざる言わざる生きて行く
故郷なまり話し通じる友が
歌うたう声高らかにボケ防止
秋風に庭の水仙顔を出し

奈良県 谷川 憲

熟柿狙うカラス食べ頃知っている
迷う隙間おぼちゃんお尻入れ座る
また来世も頼むと言うて断られ
異常気象地球のうめきが聞こえる

奈良市 前田 弘恵

カタログが届き目だけ旅回り
湯の中でど忘れ事が浮かびきて
お笑いは万能薬と寄席通い
舞妓さん苦勞のあげく京言葉

和歌山市 平田 元三

悲しくもないのに涙寒い道
ウイנקにさらば出来たと達磨の目
快感へ季節選ばず汗をかき
恒例ののびのび妻の里帰り

田辺市 大崎 可動

故郷は大国主命の指の先
忘却をいっぱい抱いて自由律
自画像の裏側で哭く寒の風
介護法弱者の主語は捨てられて

鳥取市 大前 安子

後ろ手に閉めたドアには寂しい目
もういいかあすから恥をかいてもさ
許すこと聞くこと仕事家族の和
その言葉愛があるかと問われれば

鳥取市 坂本 とも湖

被災地の復興支援花よ咲け
恋一つきれいさつぱり捨てて嫁く
北の核打ち止めならばハトが飛ぶ
極楽の旅で人生打ち止めだ

鳥取市 高原 かおる

時々呑んでみたいと虫が告げ
老いてゆく時間が急に早くなり
へそくりがツバサ広げて飛んでゆく
リモコンの便利さ寝床から甘え

鳥取市 棚田 大

大空も急に変わって喝入れる
一筋を気にかけて過ぎてやつれはて
梨も出て言うこと無しのおもてなし
ガリ勉も勤勉家見て気合い入れ

鳥取市 西根 弘康

マヒしたぞ酒を飲み過ぎ二日酔い
苦勞知らず今頃になり苦勞知る
日本人訳あり品が大好きだ
場違いかそこで一発大笑い

鳥取市 山下 凱柳

気取っては見ても本性見え隠れ
汗をかけ言われ大恥かいている
訳ありと聞くとあれこれ聞きたがる
40年飼いい慣らされて老い迎え

倉吉市 田中 紀美恵

大笑い脳がいつきに若返る
さわやかな檸檬の香り涎出る
母さんは家族の要笑みたえぬ
金の要るひそひそ話耳に栓

倉吉市 堀 かずこ

ひとり身に秋の夜長は淋しいよ
体調が悪いと笑顔消えていく
一人酒淋しすぎます私には
若いねと言われうれしいお世辞でも

境港市 中井 虎尾

点と線結んで出来た偽装地図
ウインドにうつる老人顔は俺
運動会私は目だけ運動会
パトカーの後に長い車列

米子市 池岡 たけし

老いた身のファイトの掛け声先細り
長らえて世渡り上手な八十路坂
明暗の苦難を越えて楽隠居
老いたなど思いたくない秋の空

米子市 湯浅 俊久

ままごとはノンフィクションを売りにする
出来不出来洗い流して風呂上がり
いわし雲空いっぱい秋の柄
理屈なし夜は飲むもの眠るもの

物価高虫食い野菜人気物

米子市 見山 温子

たのみ事嫁の都合を先に聞く
夢夢に出て来ないでと墓掃除
重いから背の荷少しは子にゆずる

鳥取県 飯野 菖子

青い空虚はどこにもないと言う

孫達は知恵も背丈も親を越す

失礼だ見て見ぬ振りをして置こう

親バカでいらぬお世話をやき過ぎる

鳥取県 大塚 美代子

ウォーキング甘いマスクの後を追う

無我夢中生きた証の指のたこ

胃カメラに腹の奥まで探られる

コスモスの笑いにじゃれる秋あかね

鳥取県 下田 茂登子

喜怒哀楽だんだん薄くなつて老い

老老介護今更捨てること出来ぬ

卒寿来て生きる望みは捨ててない

両隣り老人ばかり残つてる

鳥取県 橋谷 静江

余生こそ隣近所を大切に

七坂を越えたがまだまだ坂がある

受話器から曾孫の声に癒される

暑さからやっとなのがれてすぐ寒波

情けとは我が優ると謂う做り

鳥取県 吉野 いさお

難解な手前味噌盛る陶酔句

差別とは人の心を切り刻む

見識が無ければ奔る付和雷同

松江市 相見 柳歩

ポリシーは残さず食べるありがとう

コンビニの店員さんと指が触れ

ためていた言葉が洩れるデート中

方針は来世も君と森にいる

松江市 山根 邦代

方言の温もり嬉し気がゆるむ

電話から笑いをもらい元気でる

廃屋にしてはならぬと思うけど

五感には助けられてる腹の虫

出雲市 黒目 英男

妙案が頭の中ではねている

広い視野求め新朋友とする

ささやきが餅となつてはね返る

夢ひとつ時代を超えて叶えたい

雲南市 菅田 かつ子

ちゃんづけで呼べばにつこり八十歳

シューウインドーに背なを伸ばせと励まされ

立話ぐちもあれこれ聞いてあげ

ハイチーズ前の頭が邪魔をする

安来市 原 煩惱児

長期入院思うは女房孫の夢

入院の身で秋雨の寺詣り

苛々を割れた皿から解かれる

退院に半年振りという我が家

岡山市 前田 恵美子

なるように成るとお日様笑つてる

十人分作る私はコック長

理想像昔ながらのおばあさん

コツコツとやるのは私の守備範囲

倉敷市 安東 モモ

目が合ったあなたと私飼えないの

あぶないよ轢かれないうね祈りつつ

帰り道ひき逃げされた子猫見る

悔んでも戻って来ない冬の夜

玉野市 片岡 富子

手の内を明かさないうちに歳を取り

逆算し動き始める毎日だ

その辺で妥協して飲む冷酒あり

咳ひとつ夫の存在主張する

備前市 森 ふみか

過去からの使者に懺悔を迫られる

この窓を開いて何が見えますか

森静か木の実ポトリと落ちたのに

手つかずのお茶と「さよなら」だけ残し

岡山県 池田 たか子

干し柿の過去は問わない今の幸

きやりーばみゆばみゆ言うたびに考える

CMの半分ほどは判らない

秋風に風鈴しばし遊ばせる

府中市 馬場 利子

初鏡わたしを変えぬ紅の彩

老いの坂世話になります置ぐすり

どしゃぶりへもやもやひとつ消えてゆく

クラス会宿のユカタに足もつれ

宇部市 高山 清子

ライブと買叩き合う位置に立つ

いんぎんな言葉にひそむ悪の智慧

聞き役にまわれればエゴが良く見える

穏やかに忘れるという処方せん

第140回 大阪川柳の会

日時 2月3日(月)
午後1時開場・2時締切

会場 大阪市北区梅田
駅前第二ビル5階
大阪市立総合生涯学習センター
第一研修室

宿題 (各題2句・席題なし)
「深い」黒田 忠昭 選
「せっかち」久保田半蔵門 選
「防寒」松原 寿子 選
「薬」磯野いさむ 選

会費 1000円

欠席投句(切手80円5枚同封)

2月1日まで 会員に限る

〒532-0025

大阪市淀川区新北野1-3-4-706

本田 智彦 宛

新川柳鑑賞 (23)

麻生 路郎

口ひげの生えて来そうな女史であり

(阿茶)

たのまれもせぬ売春禁止法案をひつさげて
起つた意気軒昂の女史の姿がホーフツとして
眼に迫るではないか。

「口ひげの生えて来そうな」は実に皮肉で
あり、ユーモラスである。女史と云われるほ
どの女性にあまり美人が居ないのも、口ひげ
が生えて来そうな用語が適切である。

磨かせてガム噛んでいる紅い唇

(草 右)

アプレの女性を詠んだ都会風景のスケッチ
である。

「今御出勤？」

と若い男が肩をたたいて行く。

「アラ、今夜来てね」

と、流し眼を送っている。この種の女、靴を
磨かせながらも商売気は忘れない。

眺えたのんよと喋ってみたくなり

(十 悟)

ホンの一寸したよろこびでも、悲しみでも
ジツと自分の胸の中に抱いていられぬのが女

性の習性だと云えよう。特に若い女性が衣類
の新調でもしたとなれば黙ってはいられな
いのである。「眺えたのんよ」という言葉の
うちには誇らしさとするこびが、にじみ出て
いるではないか。しかも「既成品ではないの
よ」と云う意味もふくまれていて、何んとな
くユーモラスな匂いもしている。

人を皆馬鹿にしたよにガムを噛み

(左文字)

ガムというものの、本来の目的は歯を洗滌す
るものらしいが口のさびしさをふせぐため
のものでもあるらしい。若い奥さんや娘さんが、
電車の中で、ムニヤムニヤとしきりに口を動
かしているのを見ると、あんまりいい気がし
ないものである。駐留軍の若い兵隊さんがム
ニヤムニヤやっているのを見ても、知的な人
間にはうけとれない。ガムの愛用者からあん
た余つほどアタマが陳いのねと云われるかも
知れないが、この作者の親方も一つの親方に
違いない。

お握りで行こかと女同志なり

(千代美)

ハイキングか、それとも観劇か。それはハッ
キリしないが、そのどちらであつてもいい。
いい時候になつたので家ばかり閉じこもつて
もいられないが、女性の立場からそうゼイタク
はゆるされぬ。そこで「お握りで行こか」と
女同志が話し合つたというのである。女の
つづましい生活ぶりを詠んだ句として面白

い。

整然と足袋をたたむも女なり

(夜 潮)

男なら足袋を脱ぎつ放なしで捨てとくが、
女はつつましくそれをたたむので、この句は
そうした女性の習性を巧みにとらえている。
どっから帰つて来たのであろう。羽織を脱
ぎ、着物を脱ぎ、帯を解き、そして足袋まで
もキツチリとたたんで積み重ねているさまが
眼に見えるようである。

本心が二伸に女心かも

(薰風子)

女と云うものはなかなか本心を打ちあけな
いものである。時には反対のことすら云う。
この句、手紙に長々と何ごとかを述べてはい
るが、それには相手の気を引いて見たり、虚
飾の言葉がめんめんと連ねてあるにすぎない
が、その二伸には本心がのぞいている。それ
こそ女心の実態なのであろうと詠んだもの。
女性心理を巧みにつかんでいる。

スピッツにはよくしゃべる口持っていて

(若 菜)

あの奥さん、いつ会つても、ムチツとして
いて、チツとも口をきかない。いかにもそん
だいに構えている。スピッツには何んとか、
かんとか、よくしゃべる口を持つていてくせ
に、人を莫迦にしてるんだわというのである。
スピッツ以下に扱われているという劣等感を
巧みに描いている。

英語 de Senryu ㊦

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

落ちついて呑むは雨傘持つていず

*a person who drinks
calmly for long stretches
bring no umbrella*

割箸を 割つてもらつて やにさがり

*she splits wooden chopsticks
in half
complacently*

～リバーウィローのため息～ (短詩形文学の国際化)

日本では、短歌、俳句、川柳の三分野を一人で創作することは稀ですが、海外ではハイク、タンカ、センリュウさらに詩をも含めて一人で創作する人をよく見かけます。アメリカで開催された「グローバルハイクフェスティバル」(ミリケン大学2000)では、ハイク部門の発表後、「アメリカ・タンカ」の創設第一回会議が開かれました。参加していたハイク詩人全員が、「アメリカ・タンカ」に参加し、会員になりました。もしその時、センリュウの会も創設されていたら全員参加したでしょう。いまや日本の伝統詩歌を源とするハイク、タンカ、センリュウに魅せられた海外の詩人は、日本的な規則や固定観念に縛られず、それらの境界を自由に往来します。また海外のハイク誌には、必ずタンカとセンリュウの頁が組み込まれています。このような状況を背景として、国際化した俳句、短歌、川柳に就いての入門書『*HAIKU TANKA SENRYU* 国際化した日本の短詩」(中外日報社2002)を出版しました。この出版は1997年から1998年にかけて、「中外日報」の「人生ジャーナル特集」に執筆した速川和男「海外に出たジャパニーズユーモア」、川村ハツエ「短歌をルーツにした詩形の国際化」、吉村侑久代「海外で開花したハイク」の連載がきっかけでした。三人とも(日本英学会)の会員で、それぞれが日本語と外国語の短詩形作品の研究・創作に従事していました。執筆者が独自の観点から考察する、今までに類を見ない企画への挑戦でした。巻末には英語ハイク、タンカ、センリュウの作り方も説明しました。英語による日本文化の海外発信は、やっと1980年代から教育界にも波及してきて、中学・高校の英語の教科書に日本の短詩形作品の英訳が掲載され、若い世代に刺激を与えさらに橋わたることができる時代になりました。

*カタカナ表記のハイク、タンカ、センリュウは、外国語で書かれた作品を表わす。

誹風柳多留一二篇研究 7

山田昭夫・石川道子

小栗清吾・細井龍夫

伊吹和男

清博美

46 花を見すてゝはたご屋へさわぎこみ

山田 解そのままの句がある。

御殿から下り旅籠屋で遊ぶ也 葛四8

御殿山に花見に行った連中が、「花を見捨てて」山を下り、品川の「旅籠屋で遊ぶ也」。

品川の岡場所は一応旅籠屋が建て前。

御てん山さくらん坊か海へ落ち 安六智4

小栗 賛。「古川柳と謡曲」では、「花を見捨てて」を「熊野」の「花を見捨つる雁の……」の文句取としておられるが、如何。

伊吹 賛。文句取微妙ですな。

清 賛。小生は「文句取辞典」を編纂したおり、これを「援用」と表現した。「文句取辞典」では、文句取・振り・援用と三つに

区分して表記したが……。

山田 (再説) 特に文句取などとは無関係な一般的表現と思いますが……。

47 こし元のゑりをつつこむつめたい手

山田 腰元が、殿様か若様あたりに冷たい手で触られ、思わず首を引っ込めたという場面であろう。はて、何処を触られたのでしょうかねえ。

こし元トハ刃もの、やうな声てにけ

小栗 「襟を突つ込む」が落ち着かぬが、そのようなことか。

細井 襟を合わせたのでは？ 殿様の手の行方は自明。

清 腰元が着物を着ている場面とも考えられる。よくわからない。

48 角兵衛といふ人しゝをまひはしめ

山田 角兵衛獅子は、角兵衛という人が創始者だというのである。しかし、本当にそうなのかねえ。

まく蔵といふ人小言とい、はじめ

天三信2

ずぶ六といふ人酒をのミはじめ 天三礼3

石川 賛。角兵衛は獅子頭の名工の名前とか、獅子舞の親方の名とか説があるようです(『広辞苑』)。

細井 『江戸語の辞典』にも、三説が載っているが、定説は無いらしい。本句はその一である。

清 賛。

49 とつさんのなまゑいやいと母へにけ

山田 父親が酔っぱらって、子供に抱きついたり、頬ずりなどをするものだから、それを嫌がって母親の方へ逃げる。愚妻の証言によると、その昔、わが家でもよくあった風景らしい。

道の子を生酔あいし／＼行き 一一三六
清 賛。

50 松の木は今もくまでのばゝあ出る

山田 松の木は「喜の字屋」の台の物。吉原の三会目では、その台の物を取り寄せて盃を交わすが、その時は遣り手にも祝儀をはずむことになっていた。

三会目まつもるともには、あいる

安九鶴2

そして、

松のかげば、あきふんかき寄る 一四三九
主題句は、謡曲「高砂」でお馴染みの、尉と姥を踏まえたもので、吉原の三会目には「今も熊手の婆出る」というもの。もつとも能舞では熊手は尉で、姥は箒であるが、川柳作者は頓着がない。

高砂もば、あの方ハくま手なり 八三
清 賛。

51 尊氏はとほつともなくにげて行

山田 足利尊氏は、後醍醐天皇側で新田義貞らと共に北条方を征伐した。尊氏は源氏の正統だから、鎌倉幕府滅亡後の新政権は自分

と思つたが、天皇の受け人とならず、建武二年に叛旗を翻した。翌延元元年、尊氏は義貞の軍を破つて京に攻め入つたが、義貞・正成・名和らの連合軍に敗れ、遠く九州まで逃げ落ちる。その後彼は、再び勢力を盛り返し、

湊川で正成らに大勝するのだが、主題句は、九州逃げ落ちの場面を詠んだもの。

足のきく大将筑紫迄逃ける

五四三〇

たか氏ハ黒田のりやう地迄にげる

天八一〇五

小栗 賛。ではあるが何が面白いのかよくわからぬ。

伊吹 賛。「途方図」という語が使いたかつたのか？

清 伊吹説のようなことか。

52 はつかしさ毛うけで顔をかくす也

山田 毛受は「毛髪や眉毛をそる際に、そつた毛を受けるための扇形をした板」(「日国」)。

女性が本元服するとき眉毛を剃るが、恥ずかしさのあまり、毛受で顔を隠す。自分でも妙な顔になつたと思つたことであろう。

目の上へ両手をあて、嫁逃る

一一三六

毛うけをハうつちやらかしてにげるなり

清 賛。

53 けつなばん御めんなんしがやたら来る

山田 「御免なんし」だから、これは吉原、それも貰い引きの句であろう。希有は「③とんでもないこと」(「日国」)で、折角登楼して、さてこれからというときに、若い者が度々来て貰い引きの交渉とは、とんでもないことだ。

けちな晩御免なんしかだらに來ル

二八一七

たび／＼の御めんなんしに仕こじれる

四六二二

清 賛。

54 でんがくでのむうちとんだちゑが出る

山田 真崎稲荷名物の「田楽で飲む内とんだ知恵が出る」。言わずと知れた吉原行き。吉原は目と鼻の先にある。

田楽を喰イともかくも／＼
でんがくをとちうから止ムおもしろさ

傍五三三

清 賛。

五一〇

お正月は楽しい

小栗清吾

正月を迎えると、大人たちは年始回りや寺社詣でに忙しいのですが、子供たちは風揚げや羽根突きに興じます。

男の子の遊びは風揚げです。

のどかさは奴やつこと鶯うらつかみあい 舊四三

お正月ののどかな空に、奴風と鶯風がかみあうように揚がっている光景です。

鶴つるという字も舞まっているのどかさ 二六二〇

当時は江戸でも鶴が飛んでいるのが見えたそうですが、これは「鶴」という字の「字風」が揚がっているのです。

揚げ掛かる風かぜにわが子が邪魔になり 宝八鶴

風を揚げるには、糸さばきなどにちよつとしたコツがあります。わが子がうまく揚げられないのを見かねた親が手伝ってやるのですが、少し揚がりかかると親の方が夢中になってしまい、子供は邪魔だと押しつけてしまう始末です。でも、いい句ですね。

高い所まで揚がる立派な風を買ってもらえる子供ばかりではありません。

一文風いちもんぷうは駆かけているうちばかり 一三二八

一文の風は竿やじろだけ揚がつてる 傍一四

一文で買える安い風もあったようで、竿の先に短い糸でつないだだけの代物ですから、手に持って走っている間だけ、なんとか竿の高さまで揚がるというのです。

一文風でも買って貰える子は幸せです。

継つぎつ子は風に貰もらった風を揚げ 四四一五

継子は風を買って貰えず、糸が切れて飛んできた風を拾って遊ぶしかありません。

女の子は正月遊びは羽根突きです。

うららかに突つく羽根はねとまる門かどの松 八〇二七

うららかに晴れ上がったお正月。受け損なつた羽根が門松にとまります。

あそこで舞まつと羽子板うしこを目めへかさし 傍四二二

前述のように、鶴が空を飛んでいるのが見えるので、「あそこで舞っている」と、羽子板で日差しを除けながら空を見上げ、羽根突きはしばらくお休みです。

なりふりにかまけ追い羽根娘うしこ負まけ 七三二

正月は、子供も晴着を着せてもらいます。晴着が着崩れしないよう気にする女の子、おしとやかにしていると、羽根突きに負け

てしまいます。

姉あねの智恵ちえ庇ひの羽子うしこに鞆たもとつぶて 七三六

姉妹で羽根突きをしていたら、羽子が庇にとまってしまったのですが、そこはお姉ちゃんが知恵を出して、手鞆をぶつつけて落とそうとしているのです。

その手鞆もお正月の遊びです。

縁側えんがわを娘むすめのいざる松まつの内 傍三二六

縁側で、膝を突いて少しずつ動きながら鞆突きをしている様子です。

子こにやる鞆たもとをついてみる若い母 二二四〇

幼いわが子に鞆を与える前に、ちよつと自分で突いてみる若いお母さん。ほほえましい光景です。

室内の遊びでは、双六も人気があつたようです。

娘むすめ同士箱根はこねを通る松まつの内 五〇八

これは「道中双六」で遊んでいる様子です。日本橋を出発して京都まで行くのですが、娘同士で箱根の難所を通れるのも、双六なればこそです。

屠蘇とそ機嫌げん子の愛想あいせうに旅たびへ立ち 一七二

お屠蘇機嫌の父親が、子供に付き合つて道中双六に加わります。みんなにこにこして、楽しいお正月です。

民族の詩歌 (19)

— オノマトペ —

三好專平

赤ん坊をあやすのに、「ハイハイ」「クチュクチュ」「アアア」とか、オノマトペを使うことが多いのは、赤ん坊に言葉の意味が分からないからである。

動物の調教にも使われる。「ヘーイ」「ドー」「ハッシュ」など。マンガもオノマトペの宝庫である。ダダダッ。CMにもポニョポニョ。

日本語ほどオノマトペの豊かな言語は世界にまれで、ほとんど無限に作られる。最近そのビミョウなニュアンスをもつことばで、ロボットに命令して動かそうという取り組みが始まっている。今までならば「泣け」というところを、「シクシク」「メソメソ」

「オイオイ」「ワンワン」と命令する。そんなニュアンスの違いをわからせることができるのだろうかと思うのだが。若者の言葉にもこのオノマトペが増えつつある。

オノマトペの特徴は、身体的・感覚的・直観的・非論理的という点にある。「日本語」は論理性に乏しいといわれる。しかし、これは必ずしも一概に悪いとは言えない。瞬間的に物事を把握する能力に優れているともいえるからである。論理の基礎は直観である。飛躍やひらめきである。ダサイとか原始的というののもう古いかもしれない。一閃人を斬る鋭さを秘めている妖しい魔力に満ちたコトバである。

川柳も愛用してきた。

時実新子さんの句より

雪こんこん妻という手にこんこ

解放の今ごくごくと水を飲む

ごうごうと心の火事を抱き寝る

セーターの腕ぶらぶら恋に倦む

裁ち鉄シヤリシヤリ人を忘れたく

黙想の猫にキリキリ爪がある
乳房つんつん私に背き恋をする
秋の夜はとろりとろりと褒めごろし
椿ほたばた落ちる中

柳多留より(作者略)

ふり袖が立つとろうそくひいらひら
元服に異見まざまざ母は誉め

鳥追いは笠をちよちよつと撥で上げ
すずみ台ぎしりぎしりと人がふえ

しつとりと似顔のしめる蛸狩り
鹿をどうどうとひくばからしさ

馬喰丁ばきりばきりと手をたたき

川柳塔より(作者略)

たんたんとしておく煮えくりかえつても
ずるずるとつるつると今日終わる

キビキビを褒めて世話役いてもらう

東北方言より

あだすもアイドルになりでジェエジェエ
なんつうたつてガヤガヤして

安倍さんノウノウとしてるときでねえさ

愛染帖

新家 完司選

勝りたいと強く思った方が勝つ
大阪市 太田としお

(評) 心技体の技と体は、一流も二流も似たようなもの。問題は心。「勝りたい」という強い願望と気迫に勝利の女神は微笑む。

この顔のどこの部品が悪いのか
鳥取市 前田 楓花

(評) 親から受け継いだ目や鼻や口。どれも機能を果たしてくれているだけで有り難い。形や配列で文句を言つては罰が当たる。

職業欄無職と書かず斜線引く
堺市 村上 玄也

(評) 「無職」には、仕事がなく困っているとか、風来坊というようなニュアンスがある。次からは「悠々自適」と書いてやろう。

長寿国陰で支えている入れ歯
西宮市 緒方美津子

(評) なるほど、高齢者が元気で暮らせるのは、医療技術や薬、そして健康食だけではなく、咀嚼を助けてくれる入れ歯のおかげ。

居酒屋を往復すると二万歩
広島市 岸本 清

(評) ちょうど良いところにある居酒屋。五千歩も歩いた後の酒はさぞかしうまいことだろう。だが、帰りはちよつとしんどい。

泣けるだけ泣いたしごはん炊きましよう
榎原市 安土 理恵

(評) 涙は悲しみを薄め、こころを浄化してくれる。このようにして、少しずつ生きる力が付き、日常に戻ってゆけるのだろう。

無欲になるほどには老化していない
豊中市 藤井 則彦

(評) 腰痛・老眼・難聴・物忘れ・精力減退・等々、老化現象はいっぱいあるが、「欲」だけは衰えていない。困ったものである。

改竄の字にもネズミがいて怖い
富田林市 関 よしみ

(評) たしかに、穴の中に鼠がいるようで印象の悪い文字である。他には「癌」「呪」「死」「惨」「魔」「黴」などが気味悪い。

DNAべったりつけて貼る切手
弘前市 福士 慕情

(評) DNAは切手を貼った唾液からも採取できるといふ。凄世の中になつたものである。悪事を働いていないので平気だが…。

吊るす絵馬貼っておきたい保護シール
神戸市 松井 文香

(評) 名前を書かないと神さまに伝わらない。

が、書く個人情報がバレバレ。近いうち
に絵馬専用の保護シールが出るかも…。

人生双六八十歳はひと休み
鳥取市 土橋 螢

たつぷりと聞いた小言が消えてゆく
大阪府 榎本日の出

説法がくしゃみ一つではあになる
大阪府 田浦 實

信楽焼の狸悟つた顔してる
奈良市 大久保真澄

守銭奴になりそう小銭数えてる
お経まで大阪弁のナマングラ
藤井寺市 鈴木いさお

長生きと言えなくなつた喜寿傘寿
新地よりミナミの方が性に合う
枚方市 小林 わこ

頭の中アザアザアと雨模様
田辺市 岡本 昇

オール電化納屋に五右衛門風呂がある
ほどほどに雑巾絞る祖母の技
大阪府 藤原千恵子

銭湯は私を癒すお母さん
投稿欄ええ話やと涙する
大阪府 藤田 武人

散髪したら木枯らし吹きだした

納豆が朝から僕に絡み付く
青森県 松山 芳生

悲しみはきつと雨雲一つ分
佐賀県 真島久美子

そつとしてあげたいまさこさまあいこさま
岡山市 丹下 凱夫

一円を拾い良いことしたような
鳥取県 西谷 悦子

デフォルメなあいさつ強くハグをする
松江市 石橋 芳山

焼きもちをもう何年も妬いてない
藤井寺市 太田扶美代

人格はいつもだれかが見つめてる
枚方市 松原 保

加茂川に棲みついているヌートリア
京都市 高島 啓子

手術台ゴム手袋で触られる
榎原市 居谷真理子

人様の財布とこころ覗くまい
倉吉市 牧野 芳光

貧乏を呼んでるような招き猫
じつくりと見ると寂しい顔ばかり
尼崎市 長浜 美籠

プチャ家出ふとしたくなる月の冴え
ダイエツトよりはるかに楽なりパウンド
堺市 矢倉 五月

男でも女でもない会話増え
この頃は人みな好きになつてきた

一番乗りの喪中ハガキが手に重い
藤井寺市 鴨谷瑠美子

来客に今朝のコスモス探つてくる
川西市 山口 不動

ゴキブリを追う潤いのないわたし
鳥取市 倉益 一瑤

字余りのスピーチをして嫌われる
札幌市 三浦 強一

地ビールをウンと美味しくする詛り
大阪府 杉尾 奏子

一献を五臓六腑にありがとう
大阪府 杉山 隆盛

苦手にはとてもよく会うゴミ出し場
岡山市 永見 心咲

遷宮のようにはいかぬマイホーム
鳥取市 岸本 宏章

半分こしたくないときあるのです
三田市 上田ひとみ

私などだあれも別に見てないよ
今治市 渡邊伊津志

生きるため嚙下作業を繰り返す
前略で伝わる友の息づかい
青森市 守田 啓子

掘り忘れの牛蒡です更年期です
ガンダムとささやき合つた星月夜
大阪府 谷口 義

ちよつと離れたところに立っている夫
余所行きの顔が出来なくなりました

霊柩車空車で走る帰り道
吹田市 太田 昭

増税を前に履歴書書いている
松山市 神野きつこ

もういくつ寝ると年金貰える日
宇都部市 平田 実男

どちらかが相続人になる夫婦
貝塚市 吉道あかね

ながらえばやがてひとりの飯茶碗
東かがわ市 川崎ひかり

同期会ホラもしつかり吹いてきた
唐津市 仁部 四郎

家が恋しい黄昏のホテル街
藤井寺市 酒井 真由

男とヤドン・キホーテの血が流れ
三田市 北野 哲男

試着室じつと見ている顔の皺
河内長野市 穂口 正子

ど演歌を歌つた後のロゼワイン
豊中市 水野 黒兎

摘み食い体重計が噛みついた
河内長野市 山岡富美子

シルバーエイジと洒落て言つてもお年寄り
高槻市 片山かずお

百引く七はいくつですかと医者が訊く
香芝市 大内 朝子

医者への指示守りストレスためている
神戸市 山口 光久

シドニー 坂上の子

分からない句はどうしても分からない

大阪市 坂 裕之

腹が無い人と分かつているつもり

海南市 小谷 小雪

つき抜けた頑固は尊敬もされる

大阪市 江島谷勝弘

皺皺になってもリンゴいい匂い

西宮市 牧淵富喜子

裸木になつて始まる無言劇

堺市 加島 由一

気兼ねなく暮らしていますひとり鍋

紀の川市 楠原 富香

青空を手に入れ回る洗濯機

枚方市 寺川 弘一

尻尾があればだらしな程振るだろう

鳥取県 斉尾くにこ

使われぬようにと作る非常口

弘前市 稲見 則彦

巾いはさておき飲み悪たくみ

神戸市 白川 淑子

両腕が遅くなり娘も母に

紀の川市 辻内 次根

懐メロのノイズは逝つた人の音

八尾市 高杉 千歩

スイッチを入れてなかつた炊飯器

富田林市 山野 寿之

整つた容姿にも吹く秋の風

河内長野市 松岡 篤

いい湯だな初対面でも打ちとけて

鳥取市 永原 昌鼓

低い鼻おしやれ眼鏡が落ちつかぬ

香南市 桑名 孝雄

この指たかれ幽明隔つともいいよ

篠山市 二階 幸子

玄関に自己満足の花植える

岩出市 村中 悦男

追伸こそ温い情けの見せどころ

大阪府 桑田ゆきの

臨終の蟻螂斧を上げたまま

西宮市 片山 忠

男しかできぬ仕事が減つてくる

鳥取県 岩崎 和子

句会行き夫と猫に見送られ

東大阪市 佐々木満作

晩学の免状一つ夢叶う

藤井寺市 若松 雅枝

小さな活字読むと頭痛がして困る

堺市 増田わこう

ステッキといえは杖より少し粋

尼崎市 春城 年代

唐三彩の駱駝が留守を引き受ける

弘前市 吉川ひとし

贅沢税ないから売れる高級車

鳥取市 西川 和子

老体を潤す喋りよく弾む

堺市 澤井 敏治

辛抱の樹よ花咲けと祝う喜寿

高知市 小川てるみ

程ほどに褒めて夫を飼い馴らす

豊橋市 藤田 千休

天下り渡る世間は砂糖漬

三田市 今西 廣子

iPS私の脳も期待する

高槻市 左右田泰雄

何をしに来たのだろうと立ちどまる

箕面市 酒井 紀華

独り者腹七分目むつかしい

鳥取市 竹口 清信

若返る特効薬は好奇心

神戸市 山田婦美子

名月に威厳を保つ鬼瓦

茨木市 藤井 正雄

のり茶漬さらさら音も味の内

芦屋市 黒田 能子

そこそこに育つてくれた子供たち

大阪市 岩崎 公誠

三途の川辿り着くまでまだ戦

和歌山市 松尾 和香

芋の蔓味も思い出道の駅

四條畷市 吉岡 修

筋も骨も金属疲労らしい歳

鳥取市 岸本 孝子

年寄り少し遅れて笑いだす

姫路市 古川 奮水
溜息をすると犬まで横を向く

寝屋川市 森 茜
ラップしておくわたくしの手前みそ

大阪市 井丸 昌紀
詰め込んだブランに疲れ果てた旅

豊中市 松尾美智代
お互いに気遣っている夫婦箸

松江市 三島 淞丘
生きのびて悲しい酒も飲まされる

倉吉市 山中 康子
百歳の姉を遺して逝かれない

橋本市 石田 隆彦
通帳といつまで続くにらめっこ

八尾市 宮崎シマ子
戻りタクシーお安くしとくとは言わぬ

河内長野市 梶原 弘光
道の駅肩の凝らない国訛り

生駒市 飛永ふりこ
昼行灯これを通すもまた修行

米子市 生田 和之
問診に半分ほどの事実言う

奈良県 渡辺 富子
まっ先に冬を感じる膝がしら

唐津市 坂本 蜂朗
懺悔では減りそうにない罪の山

大阪市 神夏磯典子
これ以上老いないように拝んでる

富田林市 中井 アキ
一筆箋息子夫婦とつなぐ糸

西宮市 藤本 直
間違った文字にもどこか意味がある

三田市 野口 晶子
おせち買う写真写りの良い方を

鳥取市 夏目 一粹
考えない方法ないか考える

河内長野市 谷 久美子
母さんと呼べば居るよな三回忌

堺市 大隅 克博
社是社訓忘れひたすら金儲け

寝屋川市 平松かすみ
夫よりアンテナ長く張っている

明石市 桃谷 和郎
まだ言える昔覚えた元素表

鳥取市 吉田 弘子
築六十年段差に慣れて転ばない

三田市 福田 好文
ビール飲むために畑で汗をかく

和歌山市 玉置 当代
金山寺味噌と茶粥の名コンビ

堺市 内藤 憲彦
紅一点やはり美人の方が良い

河内長野市 大島 友子
何時だって背中に貴方感じてた

鳥取県 吉野いさお
尾行する半額シール貼るおばさん

三田市 多田 雅尚
食べこぼしリバーシブルがカバーする

松江市 錦織 禮子
よれよれの裸眼になって夕まぐれ

寝屋川市 岡本 勲
意地はつてみても要ります老眼鏡

熊本市 杉野 羅天
カーレース現役でいる車莫迦

長岡京市 日置みどり
子の日記怪しく心動かされ

八尾市 田邊 浩三
改めて化粧は要らぬ富士の山

鳥取県 山下 節子
第二ボタン宝石箱に入れてある

高槻市 初代 正彦
スイッチの入らない日が続きます

吹田市 木下 敏子
毎日が老いのレッスン歯を磨く

大阪市 佐藤 忠昭
子は山手親は海抜ゼロに住む

羽曳野市 藤原 大子
浮き沈み慣れたが頑固変わらぬ

羽曳野市 吉村久仁雄
正義とはアンパンマンに訊いてみる

和歌山市 土屋起世子
健康に生きて亡母へ恩返し

倉吉市 中村 毅
川柳で脳が程好く活性化

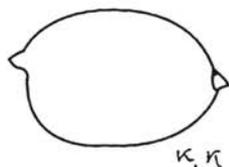
共選欄

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 776句)



「書く」 竹治 ちかし 選

辞表書く社長は偽装知らぬまま
 回りくどく書かれてるけど金無心
 無視するが顔には好きと書いてある
 ふと手紙書く気にさせた古写真
 まだ返事書けずに伸びる無精ひげ
 筋書の左うちわは反故になる
 追伸へ美しい嘘書き添える
 漢字では書けぬ訛りにあるむくみ
 シナリオは妻が書いてる定年後
 自分史に妻の苦勞を書き添える
 タイムリミット書き残すもの何も無し
 おかえりとおやつに添えたメモがある
 目標をまた書き換える老いの旅
 青春はお顔に愛と書いてある
 落書きの傘の彼女ももう八十路

八尾市 内海 幸生
 堺市 村上 玄也
 明石市 糀谷 和郎
 京都市 清水 英旺
 高槻市 原 洋志
 和歌山市 武本 碧
 大阪市 小谷 集一
 大阪市 升成 好
 貝塚市 吉道あかね
 堺市 内藤 憲彦
 松山市 宮尾みのり
 堺市 大隅 克博
 横浜市 菊地 政勝
 三田市 今西 廣子
 香南市 桑名 孝雄

「書く」 大内朝子 選

今日もまた好日だった日記帳
 路郎書く色紙を僕は持つている
 書いたメモ何処へやったと探す日々
 核廃絶せめて署名で声上げる
 無視するが顔には好きと書いてある
 青空に雲を集めて夢と書く
 約束を書いた手帳に羽根生える
 タイムカプセル無限の夢を書いていた
 書き出しが決まりすらすら進むペン
 達筆のとなりは避ける奉加帳
 肝心なこと書き忘れ電話する
 友の名を書いたボトルを空にする
 追伸に書いた一行から波乱
 受けた恩そつと心に書き留める
 書き直し出来ぬメールを送り付け

三田市 北野 哲男
 札幌市 小沢 淳
 交野市 森本 弘風
 大阪市 原田すみ子
 明石市 糀谷 和郎
 八尾市 内海 幸生
 和歌山市 上田 紀子
 鳥取市 吉田 弘子
 京都市 高島 啓子
 豊中市 松尾美智代
 神戸市 山口 美穂
 堺市 矢倉 五月
 神戸市 山口 光久
 和歌山市 武本 碧
 シドニー 坂上のり子

胸の内手紙に書いてまだ出せぬ
 箸紙を書いてゆつたり除夜の鐘
 食卓にゴメンと書いた置手紙
 書くほどに慕いが募る恋の文
 メモ書きで話す我が家の倦怠期
 仮名もじの筆の先から春が立つ
 書くだけは書いて出せないラブレター
 真剣に仕上げた恋文封のまま
 好きな娘の名前を書いて熱くなる
 沈黙の背中へ指で好きと書く
 書き綴る文字に滲んだ涙痕
 書いては消す迷いをペンに啜られる
 ごめんねと書いた手紙がまだ出せぬ
 自分史を書くと亡夫が会いに来る
 遺言も年賀も同じ筆で書く
 すくメモをしないと明日が狂い出す
 キーたたき出来た文字には顔が無い
 善悪を書くから空気騒ぎ出す
 本音などどこにも書いてない葉書
 気兼ねなく無職と書ける歳になる
 書きたいこと書けず並んだ美辞麗句
 恋文も書いた私もセビア色
 書き留めておかねば過去がすぐ消える

可見市 板山まみ子
 堺市 澤井 敏治
 松江市 藤井 寿代
 鳥取市 谷口回春子
 鳥取市 福西 茶子
 大阪市 津村志華子
 鳥取市 竹口 清信
 大阪市 岩崎 公誠
 大阪市 佐藤 忠昭
 岐阜市 平野あずま
 松江市 小川 注湖
 出雲市 伊藤 玲子
 高槻市 島田千鶴子
 芦屋市 竹山千賀子
 大阪市 板東 倫子
 和歌山市 坂部紀久子
 河内長野市 松岡 篤
 富山市 有澤 嘉晃
 佐賀県 真島久美子
 鳥取市 岸本 宏章
 松江市 松本 文字
 宇部市 平田 実男
 松江市 石橋 芳山

沈黙の背中へ指で好きと書く
 入院に何度書くやら遺言書
 封をしてまた書き直す果し状
 自分史には書けぬひとつのシミの跡
 リタイア後無職と書いている無念
 何故言えぬ愛していると書けるのに
 鳩尾に書きたい辞表眠らせる
 直筆で届いた文に安堵する
 寄せ書きの隅に小さな恋の花
 目標をまた書き換える老いの旅
 閃いて咄嗟に書いた箸袋
 書くことの怖さを知った保証人
 三食のメニュー偽装のない日記
 デメリット極小の字で書いてある
 筆談のシフォンケーキのやわらかき
 メモ書きで話す我が家の倦怠期
 一行だけのつもり十枚書き続け
 落書きの傘の彼女ももう八十路
 回りくどく書かれてるけど金無心
 煩惱を捨て切らぬまま写経する
 まだ返事書けずに伸びる無精ひげ
 書くことでいつも自分を消化する
 平熱になって書いてるサヨウナラ

岐阜市 平野あずま
 枚方市 小林 わこ
 豊中市 江見 見清
 大阪市 柴本ばつは
 東大阪市 佐々木満作
 枚方市 寺川 弘一
 紀の川市 宇野 幹子
 大阪市 榎本 舞夢
 西宮市 緒方美津子
 横浜市 菊地 政勝
 弘前市 福士 慕情
 大阪市 坂 裕之
 堺市 加島 由一
 羽曳野市 徳山みつこ
 青森市 守田 啓子
 鳥取市 福西 茶子
 寝屋川市 富山ルイ子
 香南市 桑名 孝雄
 堺市 村上 玄也
 奈良市 岩本 浩二
 高槻市 原 洋志
 岩出市 藤原ほのか
 貝塚市 吉道あかね

愛の詩ペンの先より迸る

藤山市 酒井 真由

自分史には書けぬひとつのシミの跡

大阪市 柴本ばつは

追い掛ける夢書き足して書き足して

島根県 伊藤 寿美

終章の絵を書く準備しておこう

鳥取市 西川 和子

天国へ転居届を書いておく

箕面市 広島 巴子

自分史に書けぬ秘密が一つある

藤井寺市 若松 雅枝

ご機嫌な絵筆と遊び日が暮れる

河内長野市 木見谷孝代

あと書きは幸せでしたと締めくくる

神戸市 山田婦美子

何度でも貴方が好きと書き記す

鳥取市 永原 昌鼓

また文を出したい恋を持ち歩く

富田林市 山野 寿之

封をしてまた書き直す果し状

豊中市 江見 見清

焼き捨てを頼む手紙を書いている

鳥取県 石谷美恵子

満ち足りて今日のペン先よく喋る

和歌山市 堀 富美子

ごめんねと言えず手紙に書いて出る

大阪市 榎本日の出

孝行はできないけれど手紙書く

弘前市 高瀬 霜石

やけどするような手紙を書いてやる

榎原市 居谷真理子

午後十時今日のドラマを書き終える

鳥取県 齊尾くにこ

悔しいこと書いて破いて風にする

京都市 榎本 宏子

ここにいた証にここで書いておく

松江市 相見 柳歩

秀句

ありがとうの五文字を書いて逝くつもり

榎原市 安土 理恵

天国の母へ書きたくなる手紙

吹田市 須磨 活恵

自分の名上手に書けたことがない

羽曳野市 吉村久仁雄

正直に書きすぎました自己嫌悪

藤井寺市 太田扶美代

6Bが僕を裸にしてしまふ

池田市 上山 堅坊

入魂の一筆書きにある気迫

田辺市 岡本 昇

新米をほおばる 口福と書こう

弘前市 高瀬 霜石

塩壺に祖母の字残る台所

茨木市 藤井 正雄

夢を書く広さ無限の原稿紙

枚方市 海老池 洋

忘れ得ぬ人の名そつと水で書く

宝塚市 丸山 孔一

追伸へ美しい嘘書き添える

大阪市 小谷 集一

書き留めておかねば過去がすぐ消える

松江市 石橋 芳山

やけどするような手紙を書いてやる

榎原市 居谷真理子

悔しいこと書いて破いて風にする

京都市 榎本 宏子

変化する病床日誌書く辛さ

米子市 中原 章子

秋霖の午後を書く文長くなる

榎原市 安土 理恵

切っ掛けは身の内ばなし書いてから

青森県 松山 芳生

写経する無の字に悔いを籠めながら

泉佐野市 稲葉 洋

母からの菊の便りが遺書となり

大阪市 大治 重信

幸せと書いた手紙に涙あと

奈良県 渡辺 富子

自分史に妻の苦勞を書き添える

堺市 内藤 憲彦

焼き捨てを頼む手紙を書いている

鳥取県 石谷美恵子

秀句

新しいペンで傘寿の抱負書く

大阪市 神夏磯典子

移植したいのちで書いたありがとう

八尾市 宮西 弥生

健康を下さい空へでかく書く

長野県 丸山 健三

「仕事」

安土理恵選



楽しくて儲かる仕事ないものか
 健康の管理わたしの仕事です
 家事育児立派な仕事だと思っ
 四番がきっちり仕事する快打
 お仕事をきけばニートをして居ます
 老眼で求職欄を読んでいる
 猫よりはマシとパートの声かかる
 シルバー人材雪かたづけの依頼くる
 肩書きが邪魔で戸惑う作業服
 仕事あぶれ路上ライブをしています
 働ける内はと今日もベダルこぐ
 リストラにピアニッシモの労働歌
 履歴書に仕事欲しい顔を貼る
 やつとやつと出番来ましたこのスーツ
 目覚めれば今日が始まる畑仕事
 損得はどうあれ今日も鎌を持つ
 地下足袋を履かねば朝が落ちつけん
 ボランティア現役よりも忙しく
 七人の敵とまみえに待つ電車
 現役の頃は仕事の虫だった

三田市 石原 歳子
 大阪市 津村志華子
 松山市 神野きっこ
 茨木市 藤井 正雄
 唐津市 山口 高明
 富田林市 肥山 一文
 奈良市 大久保真澄
 弘前市 高森 一吞
 堺市 遠山 唯教
 奈良県 渡辺 富子
 犬山市 関本かつ子
 豊橋市 藤田 千休
 高槻市 原 洋志
 大阪市 柴本ばつは
 大阪府 畑中 節子
 松江市 三島 滌丘
 大洲市 中居 善信
 富田林市 山野 寿之
 河内長野市 谷 久美子
 藤井寺市 鈴木いさお

名誉職謝罪会見板につく
 仕事着を脱ぐと腑抜けのようになる
 口よりも先に手が出る道具箱
 仕事した汗で小さな夢を画く
 作業服父の背中はおれぬまま
 大仕事果たして母の顔になる
 無職なりに趣味を仕事にいそがしい
 仕事だと割り切りできたピエロ役
 仕事する機械をじっと見ています
 朝ごはん食べたか仕事楽しいか
 生き方は母に似ている針仕事
 父ははの仕事の真似をして生きる
 佳
 年中無休監視カメラもつらい
 遊んでる言うて呉れるな職が無い
 尾っぽ振るような仕事は出来ず古稀
 葬儀屋の腕が静かに鳴っている
 免罪符に使ったこともある仕事
 人
 いい仕事しているスズメ蜂の家
 地
 ロボットと一緒にロボットを作る
 天
 澆漕としての露店のおばあちゃん
 軸
 天職です生涯添うていくつもり

堺市 澤井 敏治
 神戸市 山口 光久
 弘前市 福士 慕情
 和歌山市 土屋起世子
 大阪市 原田すみ子
 大阪府 米澤 俣子
 四條畷市 吉岡 修
 高槻市 片山かずお
 八尾市 新海 信二
 三田市 北野 哲男
 吹田市 木下 敏子
 鳥取市 土橋 螢
 三田市 堀 正和
 高槻市 富田 美義
 堺市 矢倉 五月
 橿原市 居谷真理子
 河内長野市 山岡富美子
 鳥取市 福西 茶子
 堺市 奥 時雄
 弘前市 高瀬 霜石

「ユニーク」

米澤 俣子 選



- ユニークな呼名会場どつと湧く
ユニークは誉め言葉かな皮肉かな
二つと無い姿に育つ無農薬
納豆や茄子も乗ってる回るすし
ユニークな製品作る町工場
好物はウニとナマコという五歳
ユニークなポーズで盛り上げた土俵
ユニークを主張しているアンティーク
ユニークな貌で沖見るモアイ像
マネキンの魅力は出ない試着室
ユニークな発言議員一期だけ
托卵で子孫を残す鳥もいる
ユニークに素材を活かすなま卵
レディガガのおしゃれユニークの極み
口達者デイサービスで五七五
ユニークな家ですパパが威張ってる
ユニークな娘茶髪の高島田
木魚よりドラムがうまい和尚さん
ユニークな仮装イベント盛り上げる
ユニークな髪型理智なトットちゃん

- 岐阜市 平野あずま
羽曳野市 永田 章司
河内長野市 坂上 淳司
鳥取市 岸本 孝子
豊中市 松尾美智代
奈良市 大久保眞澄
東大阪市 佐々木満作
海南市 堂上 泰女
唐津市 山口 高明
大阪府 初山 隆盛
唐津市 仁部 四郎
西予市 黒田 茂代
尼崎市 長浜 美籠
和歌山県 森下よりこ
八尾市 高杉 千歩
南あわじ市 萩原 狸月
西宮市 緒方美津子
横浜市 菊地 政勝
和歌山市 喜田 准一
大阪市 津村志華子

- 本堂でジャズ演奏の僧仲間
ユニークと紙一重です天邪鬼
ユニークさ競い合ってる子の名前
雨漏りのしそうな店のコーヒー屋
けつたいなことがはやってる平和
ユニークと言えば聞こえのいい奇人
ご意見はユニークですが浮いてます
ユニークな喪中がきは見当たらず
ユニークな男に惚れた大誤算
ユニークと言われてからの宙ぶらりん
若者のファッション夏もニット帽
ユニークな人の普通のお葬式

- 神戸市 伊勢田 毅
三田市 北野 哲男
大阪市 高杉 力
大洲市 中居 善信
羽曳野市 徳山みつこ
藤井寺市 鈴木いさお
四條畷市 吉岡 修
堺市 奥 時雄
奈良県 渡辺 富子
河内長野市 山岡富美子
和歌山市 柏原 夕胡
橿原市 居谷真理子
弘前市 高瀬 霜石
貝塚市 石田ひろ子
東大阪市 北村 賢子
和歌山市 上田 紀子
篠山市 遠山 可住
枚方市 寺川 弘一
弘前市 福士 慕情
松江市 三島 淞丘

- お祭り万歳 ゆるキャラが出迎える
下駄履いて心齋橋を闊歩する
尾木ママとおねえ言葉の人氣者
平凡を嫌って咲いた青いバラ
国宝級という変てこな仏さま

- 人 佳
ユニークと誉められ元に戻れない
地 オレ流を貫き通すカタツムリ
天 七福神みなユニークな方ばかり
軸 ユニークな一生でした青テント

「一流」

横山捷也選



一流が打てば曲がらぬ五寸釘
 手土産のメロン女性はキヤーと言う
 彼一流のジョークにうまくしてやられ
 ロボットに一流の腕奪われる
 一流を気取り背筋が伸びている
 認められ一流らしい顔になる
 一流と思ってるから厄介だ
 お宝も一流も無い小市民
 手も口も超一流で姦しい
 一流と言われる人にある謙虚
 ショーウィンドー眺めるだけの誕生日
 内祝い一流店の包装紙
 機器は一流医術二流という噂
 今日もまた超一流の薄化粧
 御曹司歩き方にも気をつかう
 一流の中に混じって狐狸が居る
 一流が天狗になった偽メニュー
 動物園のうどん屋老舗よりうまい
 屋台一流庶民の舌は騙せない
 おふくろの味は一流ばかりです

紀の川市 宇野 幹子
 弘前市 高瀬 霜石
 八尾市 村上ミツ子
 茨木市 藤井 正雄
 香南市 桑名 孝雄
 尼崎市 長浜 美龍
 堺市 村上 玄也
 大阪市 原田すみ子
 和歌山市 武本 碧
 豊中市 松尾美智代
 鳥取市 福西 茶子
 松江市 小川 注湖
 大阪府 米澤 俊子
 鳥取市 大前 安子
 大阪市 柴本ばつは
 紀の川市 辻内 次根
 西宮市 足立 茂
 奈良市 大久保眞澄
 八尾市 高杉 千歩
 枚方市 寺川 弘一

高いから多分一流なんだろう

一流の技が季節を誘う菓子

一流にもなれずびりにもなり切れず

一流にしては多弁な花である

一流のウソで五輪を引き寄せる

美人ならニッコリだけでいいのです

一流になれず主婦業半世紀

不言実行多く語らぬのも一流

一流になって庶民の目を忘れ

一流の祝辞は長さ心得る

トップまで行った同期の計報欄

エプロンをして一流の主婦になる

佳 一流と言われてからの肩のこり

一流の貧乏神とよく笑う

何気ない所作も絵になる大女優

一流は皆い二流の味は面白い

死んでから一流になる芸術家

人 一流になって帰るとそれつきり

地 一流になると目線が上を向く

天 青テントにも一流の哲学者

軸 一流を真似て野菜の芽が出ない

南あわじ市 萩原 狸月

シドニー 坂上のり子

大阪市 笠嶋 恵美

藤井寺市 太田扶美代

堺市 荻野 像山

三田市 堀 正和

大山市 金子美千代

西宮市 牧淵富喜子

羽曳野市 永田 章司

松山市 神野きつこ

大山市 関本かつ子

鳥取県 山下 節子

奈良市 米田 恭昌

香芝市 大内 朝子

箕面市 出口セツ子

八尾市 宮崎シマ子

海南市 堂上 泰女

大阪市 板東 倫子

三田市 福田 好文

羽曳野市 徳山みつこ

初歩教室

題一 曆

山口光久

このたび初歩教室を担当させて頂くことになりました。前任の太田昭さんが体調を崩されましたので、急遽引き継ぐことになり、とてもプレッシャーを感じています。よろしくお願い致します。

投句者の顔ぶれをみますと、到底初心者とは思えない経験豊富な方もいらっしやるようで緊張致します。

麻生路郎先生が述べられています「句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸である」を常に心に刻んでまいりたいと思います。

このコーナーでは入選する句の作り方ではなく、何をどう観て詠むかを勉強したいと思っています。

川柳眼としてあらゆる現象に対して、表から裏から、また横から斜めから観察する眼を持ちたいと思っています。

〔添削〕

原 好きな絵のカレンダー掛けてミニリッチ (柑) 恵子

中八音字になっています。

添 好きな絵の曆を掛けてご満悦

原 曆見て指折り数えたお正月

中八音字になっています。

添 曆みて指折り数え待つ挙式

原 新しい曆を手にも夢描く

中六音字になっています。

添 新しい曆を手にし夢描く

原 カレンダー見栄で予定入れておく 凱柳

中六音字になっています。

添 カレンダー見栄で予定を入れておく

原 日捲りの今は大事な希小品 松風

〔希小品〕は「希少品」で誤字です。

添 日捲りの最後のページ希少価値

原 還曆を祝うといつてたかられる 一泉

〔還曆〕は「還曆」で誤字です。

添 還曆を祝うといつてたかられる

原 花曆今年は秀節そっちのけ 喬

〔秀節〕は「季節」で誤字です。

添 花曆今年は季節そっちのけ

原 結婚式仏滅選って挙げる孫 ひろ子

〔挙げる〕は「挙げる」で誤字です。

添 結婚式仏滅選って挙げる孫

原 日めくりが薄くなるのが早すぎる (山) 久子

日めくりが正しく「ぐ」と濁りません。

添 日めくりが薄く感じるのも歳か

原 カレンダーまずゴミの日を書き入れる 国和

〔ゴミの日〕は「ゴミ出し日」の事。

添 カレンダー先ずはゴミ出し日を記入

原 告白を決意した日にキスマーク 武人

決意した日より打ち明けた日がいよい。

添 本心を告白した日キスマーク

原 確かめる日付曜日 日めくりで 開子

添 日めくりで日付曜日 日めくりで

原 曆見てジャンボ買って当たらない 信二

添 曆見てジャンボ買って当たらない

原 朝起きて今日の日付を確認す 一文

添 朝起きて今日の曆を確かめる

原 曆見て墓参の日取りあれこれと 洋一

添 墓参りの日取りを決めるカレンダー

原 だんだんと年金薄くなる 紀雄

添 カレンダーへ記入してます年金日

原 師走来る曆通りで嘘はない とも湖

添 異常気象も曆どおりに来る師走

原 古い暮し日めくり曆追いたてる 正二

添 日めくりで急きたてられる老いの坂

原 柱の曆一枚はがれやせていく (見) 温子

添 日めくりはがれるたびに痩せていく

原あと2枚残り暮れゆくカレンダー 美紗子
 添二枚だけ残り今年のカレンダー
 原日捲りの名言生きる心の友 紀美恵
 添日めくりの名言胸に刻んでる
 原暦見てただ無事祈る初詣で 文香
 添新しい暦に無事を祈つてる
 原獣医さん暦のモデルハイボーズ (酉) 冷子
 添来年の暦のモデル獣医さん
 原縁の二人暦が結ぶ福寿草 ミヨノ
 添二人の仲暦の語句が縁結び
 原暦など要らぬと季節気儘する 元三
 添暦にはそっぱを向いている季節
 原初雪の便り暑さを忘れさせ (申) 修
 題の「暦」がイメージできません。
 添初雪の便り暦はそつちのけ
 原カレンダーの上で跳ねてるスケジュール 富香
 添行事予定押すな押すなのカレンダー
 【少しの修正でよくなる句】

添暦一枚めくっただけで春景色
 原記念日を暦に書いて赤い丸
 添記念日を暦にするす赤い丸
 原百を越え生きてやるぞと買う暦
 添百歳を生きてやるぞと買う暦
 原新年の暦を前にする祈り
 添新年の暦を前に計を立て
 原暦まで異常気象でずれてくる
 添暦まで異常気象で狂いだす
 原役終えて暦はメモへ天下り
 添役終えて暦はメモへ早変わり
 【入選句】

やり残し気になり出したカレンダー 治子
 ゆつたりと暦離れて生きる日々 (酉) 宏子
 三回忌暦をめくり母偲ぶ
 新しい暦に先ずは書く旅行
 あと一枚汚れを隠すカレンダー
 暦には載らない豪雨竜巻報
 もう薄くなった暦に迫る馬
 人生の暦が薄くなつてくる
 色分けて夫婦で書いた通院日
 九星の今年の暦よく当たる
 カレンダー花まる付ける誕生日
 今年もか三日坊主に暦泣く
 来年の暦待つてる年女

昭枝 勝治
 晶子 和之
 みどり 亜希子
 弥生 志
 洋子 回春子
 治子 (爛) 節子
 宏子 燭節子
 克三
 のり子
 安子
 志津子
 心咲
 きつこ
 つな子
 満知子
 友子
 登美子
 暦見て年賀かく日も脳トレに
 リタイヤ後妻が暦を支配する
 妻の予定優先されるカレンダー
 カレンダーで妻の予定を把握する
 大安を暦と相談熨斗袋
 師走だな付録に暦付いている
 年の暮れあつたらかんと暦はぐ
 一枚になった暦が風に舞う
 廃屋の暦が語る過去未来
 外出がとつても好きな暦です
 彼岸花暦通りに土手飾る (爛) 節子
 異常気象と言われ夏の暑さに街路樹や公園
 の木が枯れた話を聞く。そんな中で彼岸花は
 暦通り彼岸の頃に綺麗な花を咲かせました。
 カレンダー孫の来る日は花印 (爛) 正子
 親と同居する新婚家庭は殆ど見かけない。
 老夫婦は孫の顔が見たくて孫が来る日を今か
 今かと待っている。その様子がよく分ります。
 予定日が暦の上で弾んでる 英男
 出産の予定日が決まると家族の喜びは倍加
 する。暦には花丸が付けられ途端に弾みだす。
 【私の句】
 わたくしを縛りつけてるカレンダー

川柳塔鑑賞

同人吟 榎原道夫

— 12月号から

ひとりずつ跳んでたのしい水たまり

酒井真由

子供の数は、七、八人くらいか。あくまでも私の直感だが、二、三人では少なすぎるし、十人以上では多すぎる感じがするのだ。水たまりは、必死で助走しなれば跳び越せないような大きな水たまりではなく、勢いをつければ女子でも跳び越せる手頃な大きさである。子供たちが「きゃっきゃ、きゃっきゃ」と声を上げながら、一人ずつ水たまりを跳んで楽しんでいる情景が思い浮かぶ。

この句の「たのしい」は、子供たちの気持ちを表すと同時に、「水たまり」にも係っていると取れる。そうすると、子供たちに跳び越されている水たまりも楽しんでるように感じられる。

彼岸花泣けば泣くほど家遠し

木本朱夏

彼岸花は、彼岸（＝あの世）に咲く花。

あの世にいる亡き人のことを思い、泣けば泣くほど、その喪失感の深さが増してきて、家（日常の生の世界の謂いか）との距離が心理的に遠く感じられるのである。これは、句の言葉を順にたどりながら解釈したものだが、一読して思い浮かんだのは、実は次のような情景であった。

おかつば頭の童女が、橋のたもとで目をこすりながら泣いている。遠い国にいるという母（実は幼いときに亡くなっているのだが、童女はそれを知らされていない）に逢いたくて家を出たのだが、異国への入り口である橋を渡るのが怖くなつて泣いているのだろうか。橋のたもとには、真っ赤な彼岸花が咲き乱れている。時代劇のワンシーンのような、そんな情景が思い浮かんだ。

現代川柳では、泣いている主体を句の中の「私」であるとするのが常識である。しかし、私には、泣いている主体として「童

女」が浮かんだのである。なぜ、句の中の「私」が思い浮かばなかったか、説明できないのだが。

椅子二脚一つに過去を座らせる

居谷真理子

椅子に座らせることができる過去のなだから、曖昧な過去ではなくて、確かな過去のなのだろう。椅子に座らせる過去はもちろん自分の過去であり、もう一つの椅子に座るのは現在の「私」である。

さて、椅子二脚は、向かい合わせに置いているのか、それとも横並びに置いているのか。「座らせる」の「せる」という使役の助動詞の強い調子から、向かい合わせの方がいいように思う。悔やまれる自分の過去に対して感情的に向き合うのではなく、正面に座ってこれから冷静沈着に厳しく問い詰めようとするところである。

赤い服着たのにベシヤンコ

細田裕花

瘦身の「私」。ふっくらとして、できればあでやかな感じに見えるのではないかと期待して赤い服を着てみると、あにはからんや、鬘斗烏賊のようにベシヤンコ

になった「私」。ショックを受けてはいるが、「ベシヤンコ」と言い切ることによって、そんな「私」を笑い飛ばしている強さが感じられる。痩身だが、体は元気いっぱい「私」である。

開けたら閉める出したら仕舞う母の声

石原 淑子

てきばきと用事を片付ける、整理整頓好きな母の姿が思い浮かぶ。しかし、若いころと違って、いちいち声を出しながら片付けをする母の老いをしみじみと思うのである。

どんな声を出しながら片付けをしているのかは、読者が自由に想像すればよい。私などは、「アケトラシメル、ダシトラシマウ」と、この句のままの言葉を唄うように言っている母の姿を想像して楽しんでいる。

スマートになったダルマが起きられず

松村 里江

そう、あの手も足もない、まるまるとした体型だからこそ、ダルマは起き上がったのである。スマートになって、飄箏のような体型になってしまうと、起き上がるようにも起き上がれないと、穿った句。

ダルマさんがころんだ葉飲む

岩本 笑子

「ダルマさんがころんだ」と「葉飲む」の取り合わせをどのように解釈するか。いろいろな解釈ができるだろうが、一例を示す。

達磨大師は、九年間面壁を行い、座禅によって手足が腐ったという。座禅によって悟りを開いた達磨大師を模したダルマさんが転んでしまつて、起き上がってこない。大変なことである。何か悪いことでも起きそうである。何の修行もしていない「私」は、養生のために葉を飲むしかないのである。

「ダルマさんがころんだ」という字足らずの表現に対して、「葉飲む」という措辞を配した、その素っ気なさがおもしろい。

種ありのブドウ食べてる夫婦仲

松尾 柳右子

一読して、仲のよい熟年夫婦が思い浮かんだが、どうしてか。「種なしのブドウ食べてる夫婦仲」という句形と比較すると、その謎が解けそうだ。種なしと種ありのブドウから受ける感じの違いを比べてみよう。

種なしのブドウの場合は、互いに言葉交わすことなく、黙々とブドウを食べ、皮を吐き出している光景が思い浮かぶ。

対して、種ありのブドウの場合は、一粒ずつブドウを食べては種を吐き出す、その合間に「おいしいね」「うん」というような短い言葉だが、会話が交わされているような気がするのである。

つまり、種なしのブドウと違って、種ありのブドウを食べている間は、ゆったりとしたあたたかい時間が流れているような感じがして、仲のよい熟年夫婦が思い浮かんだのである。

その他、チェックした句を挙げておく。
旅の本開くと雲の音がする

伊達 郁夫

ブーメラン愛してくれていたんだね

丹後屋 肇

年甲斐もなく人見知りしています

鴨谷 瑠美子

こつそりとアメが回ってくる会議

古久保 和子

水煙抄鑑賞

—12月号から

西内朋月

感情の起伏だんだん浅くなる

藤成操江

若い頃のように笑ったり泣いたり怒ったりすることが、少なくなつた気がしますね。然し大いに笑い大いに怒り若さを持続したいと思います。

ほおずきは昔むかしの音で鳴る

東横ますみ

熟したほおずきの実を揉みながら妻楊枝で中味をほじくり出していた女の子を思い出します。キュッキュツと鳴らす音懐かしいですね。

頑固者同士で話進まない

川島良子

歳をとるほど頑固になる人っていますよね。夫婦のどちらも頑固なんてのも困つたことになりますよ。墓なんかいらん、いいえお墓はいりますよ、なんて。

張り切ると明日が怖い膝小僧

野川宣子

血圧が高いから主治医から歩きなさいと言われて張り切つた翌日は膝が痛みだし、やっぱりほどほどにしたらいいのと違いますか。

金木犀咲いたと風が言いふらす

田中恵

金木犀の匂い、秋の香り、風が言いふらしたと決めつけているのが川柳らしいと思います。

新品のうちは小まめにする掃除

永見心咲

こてこてになつた換気扇を買い換えて掃除がいつまで続くのかお楽しみ。

急いでもゆつくりしても私の日

前田恵美子

洗濯や掃除をしてもしなくても子供も夫もない日は、大の字になつて昼寝でもしようかな。

もみ消したはずの火種でやけどする

高山清子

すっかり忘れていた人と偶然に出合い「やあ久しぶりですね、お元気でしたか、お茶でも如何ですか」さてそれから?

待合室で見れば事足る週刊誌

高野不二

歯医者や眼医者通いしていると、週刊誌なんかわざわざ買わなくてもたいした事も出てないし、充分ですよ。

きつと困る僕に寿命が無かつたら

太田としお

全く同感です、いつまでも死ねなくて永久に生きていたらえらい事です。困るどころでは済みません。

あれもこれも覚えています曼珠沙華

吉道あかね

お盆や命日に誰やらこれやら色々な人が墓参りに来てくれます。顔や喋つた事みんな知っています彼岸花。

弱音吐く少しゆとりが欲しいから

神野千恵子

強気ばかりじゃ疲れますよ、ストレスも溜るし、たまには弱音を吐くなんて良いじゃないですか。少しでなくたんとゆとりを持って生きていきましよう。

上品そう言われる白髪悪くない

福島弘子

プラチナブロンドと言うそうですよ。下手に染めるよりよっぽど綺麗です。



ひとりを楽しむ

夕映えを全身に受けながら青年が一人、黙々とランニングをしていました。私が散歩コースにしている総合公園のグラウンドでのことです。それを見て少し感動しました。その感動を言葉で表すのは難しいのですが、敢えて言えば、「楽しいぞうだな」「充実した時間なのだろうな」という想いです。

同じようなことが以前にもありました。図書館の隅で一心に本を読んでいる人を見たとときは。そしてまた、通りに面した庭で、脇目もふらず草花の手入れをしている高齢の男性を見たときにも、同じように心を動かされました。

このように、邪念などなく無心に物事に打ち込んでいる姿はそれだけで尊く、人を感動させる力を持っているようです。また、自分の趣味や好きなことに打ち込んでいるときこそ、その人の「充電時間」なのでしょう。もちろん、総てを忘れて何もせずボンヤリ過ごすのも充電ですが、その場合もやはり「一人でいる」ことがより効果的だと思われまます。

- 寝正月ひとり暮らしもいいもんだ
吉本 君枝
- 口開けてテレビを見てもよい独り
藤田 悦子
- ひとり住む気ままな旅の日のごとく
大川 桃花
- おひとりさま外食だって旅だつて
笠嶋 惠美
- 一人で行くことを肯定的に捉え、一人の時間を楽しむことが出来るのは精神的に成熟したオトナだけです。子供や精神的に未熟な人は、疎外感や孤独感に負けて、誰からの干渉も

受けない自由な時間を楽しむことが出来ません。ケータイ依存症などはその典型でしょう。誰かといつも繋がっていないと不安になるのは、母親がいなくて泣く赤ん坊と同じです。精神的に未成熟で幼児性が抜けていないのです。

創作活動のほとんどは一人で行うものです。演劇や映画のような総合芸術も、基本のアイデアは一人一人が生みだします。もちろん、私たちが取り組んでいる川柳も個人の創作です。そして、川柳の基本は、「今の自分の姿、今の自分の想いを表明すること。そのためには、一人になって自分と向き合い、自分の心の声を聞かなければなりません。優れたアイデアは一人のときに生まれるものです。

そのような訓練を長く続けているおかげでしょうか、川柳作家は「一人に強く、一人を楽しめる」人が多いようです。しかしながら、一人に慣れていと言つても、「何日も誰とも会わず話もしない」というような状況はいけません。ある統計によれば、高齢の独居男性の17%は、2週間に1回以下しか他人と話すことがないということです。これが女性になりますと4%ということで、いかに職場人間だった男性が地域社会に解け込みにくいかを物語っています。

ひとりであることが性に合っているとしても、人と接することも重要です。「ひとりを楽しむことができる。しかし、仲間との時間も楽しい」というのがベストでしょう。その点でも川柳は理想的です。一人静かに自分の心を見詰めて作句する。その後は、句会や大会に出て仲間と語らう。句会に出席できない人は、ご近所の人や友人と交わる。この「静と動」のメリハリが活力の元になるのは言うまでもありません。



景色をもちいた軽津の石霜瀬高

奇数月の連載になります。

「大阪慕情」の巻 ⑱

僕の長——い川柳人生で——なんて書くと「何がエラそうにこの若造が」と叱られそうだが——去年ほど忙しい年
はなかった。

6月に開催された「第37回全日本川柳青森大会」の事務局長をおおせつかったことが全ての始まりだった。

実際の事務局の仕事は、県連盟のベテラン柳人がテキパキこなしてくれたので、僕の方はもっぱら親善大使に徹し、
できるだけあつちこつちに顔を出したのだった。

去年、大阪には3回行った。1回目は、4月の「第18回
展望全国大会」へ。2回目は、5月の「川柳文学コロキエ
ウム創立10周年記念川柳大会」へ。とにかく、顔なじみも
初対面も、誰かれかまわず「6月の全国大会IN青森には
非来て頂戴」とお願いして回った。

そして3回目は「第19回の川柳塔まつり」である。なに
せ断るわけにはいかない怖い方からの依頼である。
い——敬愛してやまぬ大先輩からの依頼である。

僕のアホさ加減が、大会の品位を汚すだろいうことは百も
承知での、あの「津軽発おもしろ景色スベシヤル」であった。
この場をお借りして、重ねてお詫びを申しあげる。

話は飛ぶ。読者の中に「ポール・マッカートニー」なる
人物を知らない人がいたら、ゴメン。説明している暇がない
ので、置いて行きます。

関西に住む息子からメールが入った。

「お父さん。大変だ。ポールのチケット2枚取れた」

11月12日(火)。僕は、都合4度目となる大阪にいた。

ポールの公演は——彼もすでに71歳。これが最後の世界
ツアーかと噂されたこともあり——AKB48並みに抽選。

東京ドームのチケット(1万5千円)が、40万円でネット
トで売り買いされているとも聞いていたから、とうの昔に
諦めていたのだが、思いがけない息子からのグッド・ニュー
ス。もう僕は舞い上がってしまったのだった。

僕がビートルズに出会ったのは中学2年生の時。それか
らず——と彼らと一緒に歩いて来た(と僕は思っている)。

4人のうち、ジョン・レノンとジョージ・ハリスンはす
でに亡く、リンゴ・スターとポールの2人が元気。

世界で最もレコード(CD含む)が売れたのは、勿論ビー
トルズ。文句なし。2番は、エルヴィス・プレスリー。こ
れも至極当然。3番が、マイケル・ジャクソン。これも納
得するでしょ。ここまでは順当、簡単だが、では4番、5
番は誰でしょう?これが難しいのだなあ。

ローリング・ストーン? 残念、外れ。キャリアは長い
けど、世界的なビッグ・ヒットがないとベスト5には入れ
ない。4番が、なんとポール・マッカートニーなのだ。ビー
クリでしょ。因みに5番はビージーズ。彼らには「サタデー・
ナイト・フィーバー」があるものさあ。

ポールは、2時間45分、40曲を熱演。僕と息子は、たっ
た1曲知らない曲があったが、ポールのとてつもないパ
ワーに圧倒され、シアワセに首まで浸った。

「目黒のサンマ」じゃないが「ドームは大阪に限る」だ。

能と川柳

藤井則彦

能は「人間を描く芸術」と言われるだけあって、これまで川柳にも随分と詠まれてきました。

日本最古の演劇「能」

能は七百年近い歴史をもつ日本最古の演劇でユネスコの世界無形文化遺産にも登録されています。

室町時代の初めに大和猿楽から歌舞劇に脱皮させて京都に進出した観阿弥・世阿弥親子は三大將軍足利義満に見出されて庇護を受け、能の基盤がつくられました。その後武家社会の中で育てられ、明治維新、第二次世界大戦等幾多の危機を乗り越えて今日の隆盛を誇っています。

通常は能楽堂で行われますが、時には一般のホールや屋外（薪能）でも催され、外国人の姿を見かけることもあります。公演情報は新聞や情報誌、パソコン検索

などから得られます。

「能」の仕組みと魅力

能は約二四〇曲あると言われ、大きく分けて「神」「武将」「優雅な女性」「物狂い」「鬼」の五種類です。一曲一時間〜一時間半ですが、これをシテ（主役）・ツレ（シテの連れ）・ワキ（シテの相手役）・ウキツレ（ワキの連れ）・子方・地謡（パツクコーラス）の役割を担う能楽師が演じます。他に笛・小鼓・大鼓・太鼓の囃子方、狂言師が登場いたします。

能は動作を極度に抑え無駄を省き、最小限の動きで最大限の効果を発揮するように組み立てられていますから、時として単調な違和感を持つ方もおられるかと思えます。それだけに、失われがちな季節感や命の尊さを取り戻し、感性と想像

力を磨き直してくれる魅力が能にはあるのです。

「能」を詠んだ古川柳から

「だ、ツ子のやうに俊寛愚痴を云」

「俊寛」より。鬼界が島に流されて帰れなかつた僧・俊寛の無念さ

「三千の似面ヲを書くも金次第」

「昭君」より。王昭君以外の三千人の宮女は絵師に金を出して美しく描かせ人質を免れたという中国の話

「五条橋足駄を草鞋もてあまし」

「橋弁慶」より。足駄を履いた牛若を草履姿の弁慶が持て余す）などです。

現代の川柳から

「孔雀羽根ひろげくりと能役者」

（橘高薫風）

「まなじりが乾く二月のおんなめん」

（尾藤三柳）

「能面の裏に三つの寒い穴」

（木本朱夏）

一度機会を見られて能楽堂やテレビなどで鑑賞され、ひとときすべてを忘れて時空を超えた幽玄の世界に浸っていただけだと思います。



「井筒」のシテ

同人特集

私の一句

(順不同)

許したのは私の中の水の部分

竹原市

小島

蘭幸

遠い雲ボーボワールもサルトルも

大阪市

西出

楓楽

ピカソには勝てないどんな美人でも

和歌山市

川上

大輪

男にも乳首があつてなさけない

鳥取県

新家

完司

一期一会草には草の仏さま

弘前市

波多野

五楽庵

わたくしの居場所は水の匂いする

米子市

八木

千代

誕生日また来年を礼を言い

唐津市

仁部

四郎

花の道光る師の恩友の恩

西宮市

奥田

みつ子

罪いくつ積んで聖書に辿り着き

大阪市

前野

たもつ

寄らば大樹されど雷には弱い

高石市

浅野

房子

はずんでる手話赤い花青い鳥

橿原市

安土

理恵

戦地にて仲間と決めた娘の名

奈良市

阿部

紀子

六十年めでためたの出雲大社

出雲市

石倉

美佐子

行くと言う返事に心ときめかせ

三田市

石原

歳子

拉致の母祈りは深い誕生日

神戸市

伊勢

真理子

浄土見るツアーにはまだ参加せぬ

可児市

板山

まみ子



頑張った昭和 今ではエイリアン
 鰻井に化けてもナスは茄子の味
 ゴールド免許夫を上手く捌けます
 禁煙は成功しかし五キロ肥え
 ドクターの説明優しドック無事
 笑ってよ今夜もきつといいお風呂
 八十路入り未だ生臭い夢を見る
 眼裏に幼い夜が星一ぱい
 色即是空音の無い夜もまた愉し
 明け暮れの鐘が聞こえる古稀以来
 皆が来る今日は一日笑つとこ
 八月は孫にイクサの事も言い
 残り時間ゆっくり食べている余生
 笑顔見りゃどんな薬もかなわない
 コーヒーで人の話を食べてます
 芯のある女を生きる肩の凝り
 イケズしてされてやっぱり人が好き
 ユーモアを飲んで楽しく老いてゆく
 辛酸を舐めた話が面白い
 月も亡夫も覗いてくれる窓を拭く

吹田市	藤井寺市	吹田市	奈良市	香芝市	大阪市	大阪市	枚方市	豊中市	羽曳野市	和歌山市	八尾市	河内長野市	奈良市	鳥取県	熊本県	大阪市	八幡市	高槻市	亀岡市
太谷	太田	太田	大久保	大内	榎本	榎本	海老池	江見	宇都宮	牛尾	内海	植村	岩本	岩崎	岩切	井丸	今井	指宿	井上
篤子	扶美代		眞澄	朝子	舞夢	日の出		見清	ちづる	緑良	幸生	喜代	浩二	和子	康子	昌紀	万紗子	千枝子	森生



父の声とも母のそれとも風の音
 生きる意味問うて閻魔と対峙する
 ジョーク聞く笑う心に泣くところ
 笑顔っていいな鏡に褒められる
 福もろた気分になせるえべっさん
 もう一度育ててみたい子沢山
 愚痴ばかり人はやっぱり寄って来ぬ
 我を捨てて空気をもとの色にする
 被災者に励まされてるのは私
 変化球覚えときどき投げしてみる
 しゃつくりが止まりようやく紅を引く
 ほろ酔いは知らず夢ごちも知らぬ
 命ある物を切り取り紡ぐ日々
 句読点打って呼吸を楽にする
 お話も少しひかえた味がよい
 成り行きで結んだ紐がほどこけない
 匿名にすると真相みえてくる
 八十路坂登る力を溜めておく
 瑞穂の国やはりに要は米だろう
 五感から心の詩を紡ぐ趣味
 辛い時もつと苦しい人が居る

東 大 阪 市	三 田 市	鳥 取 市	鳥 取 市	広 島 市	出 雲 市	大 阪 市	東 か が わ 市	奈 良 市	藤 井 寺 市	西 宮 市	大 阪 市	犬 山 市	富 田 林 市	横 浜 市	三 田 市	堺 市	高 知 市	松 江 市	鳥 取 市	西 宮 市
北	北	岸	岸	岸	岸	川	川	加	鴨	亀	神	金	片	小	尾	荻	小	小	奥	緒
村	野	本	本	本		端	崎	門	谷	岡	磯	子	岡	野	崎	野	川	川	谷	方
賢	哲	孝	宏		桂	一	ひ	萌	瑠	哲	典	美	智	句	一	像	て	注	彩	美
子	男	子	章	清	子	歩	か	子	美	子	子	千	恵	多	山	る	湖	子	津	子

ふるさとを奪った罪に罰がない
 ゆつくりと嘸んでゆつくり歳をとる
 白寿まで紅は手離さないつもり
 晩年のここらあたりに戻り点
 二度とない今日へ思いつ切りジャンプ
 なるようにしかならぬから自然体
 老いたれど輪ゴム位の武器は持つ
 偽装ない我が家のおせち灯が温い
 猫たちの会議イキテルコトガスベテ
 折れぬようポッケにフアイト忍ばせる
 子を生めるロボットは無い今日は晴
 平凡な日目を重ねて行く非凡
 本心を明かさぬままに雪が舞う
 真っ赤な夕陽に学ぶ人生終い方
 約束をしても胸から出ぬ電車
 浅い色重ねて染めた夫婦色
 良い人でいようと半分は眠る
 みちのくに居て震災は手を合やすのみ
 汚染水オリンピックの呼び水に
 いつの日か私を孫がおんぶする
 姫鏡台 裏も表もお見通し

神戸市	吹田市	三田市	池田市	西予市	芦屋市	京都市	大阪府	堺市	明石市	大阪市	大阪市	平川市	松山市	鳥取県	米子市	枚方市	弘前市	大阪市	堺市	箕面市
木村	木下	久保田	栗田	黒田	黒田	都倉	桑田	乗原	糍谷	古今	古金	小谷	古寺	古手川	小西	後藤	小林	近藤	齋藤	酒井
貴代子	敏子	千代	久代	茂代	能子	求芽	ゆきの	道夫	和郎	蕉子	集一	花峯	雄光	雄々	美恵子	わこ	愁女	さくら	紀華	紀華



消去法くせのあるのが生き残り
 ケイタイで恋も別れも指の先
 地に張った根っ子を君は見ているか
 豊穣もすぐに枯れ葉の舞う季節
 哀しいなレディー 忘れたいつからか
 最後まで花の恥じらい保ちたい
 余生とは軽い会釈でこと足りる
 いつ散るか知れぬ命を磨いとく
 二十年本社出席知らぬ間に
 原発もダムもいずれば負の遺産
 やさしさと厳しさ波のうら表
 古傷もやがては思い出に変わる
 他人にはあなたの背中搔かせない
 穏やかな湾に抱かれて安堵
 散る時はひと片ずつが主役なり
 回り道汗も涙も身につける
 夕やけがこなにきれいな旅日記
 夕顔の香りが癒す今日の憂い
 風評を他所にフクシマ旅の宿
 まあ良いかテレビで見てもパリの街
 絶好調今は何でも嘸みきれ

大阪市	吹田市	日高市	枚方市	枚方市	堺市	西宮市	鳥取市	米子市	尼崎市	熊本市	大洲市	寝屋川市	高槻市	高槻市	生駒市	羽曳野市	堺市	枚方市	大阪市	大阪市
原	野	根	二	二	西	西	西	中	長	永	中	富	富	富	飛	徳	遠	寺	寺	鶴
田	下	岸	宮	宮	村	口	川	原	浜	田	居	山	田	田	永	山	山	川	井	田
すみ子	之男	方子	紫鳳	山久	りつえ	いわゑ	和子	章子	美籠	俊子	善信	ルイ子	保子	美義	ふりこ	みつこ	唯教	弘一	弘子	遠野



幸せは気持ち次第でやってくる
 足し算を学び引き算する家計
 めでたいな友と弥次喜多伊勢詣
 ほんやりとしてると鳩が寄ってきて
 平凡な幸せでよい酒に寿司
 正直に生きて日向に遠くいる
 賢人も普通の人も老いはくる
 身の程を悟る男の守備範囲
 青い瓶開けると若い日のソング
 あさがおの苗にも日本産のふだ
 ここだけに出来ないこだけの話
 前を行く友がいるから頑張れる
 すっぴんで表も裏もないわたし
 退院をしたら飲みましょ但しお茶
 介護との戦が続く登り坂
 親バカの付けた名前に負けている
 ほうずきはもう鳴りもせず里は過疎
 生涯に出会えた友は宝物
 祖父ちゃんの手を流してしまおう
 なにもかも水に流してしまおう
 考える輩でありたいいつだって

鳥取市 春木 圭一郎
 寝屋川市 平松 かすみ

箕面市 広島 巴子

豊中市 藤井 則彦

茨木市 藤井 正雄

大阪市 伏見 雅明

大阪市 平嶋 美智子

大和郡山市 坊農 柳弘

鳥取県 細田 裕花

東京都 まえで とよこ

藤井寺市 俣野 登志子

豊中市 松尾 美智代

和歌山市 松岡 和香

河内長野市 松岡 寿篤

和歌山市 松原 強子

札幌市 三浦 強一

豊中市 水野 黒兔

京都市 三宅 満子

八尾市 宮崎 シマ子

羽曳野市 三好 専平

八尾市 村上 ミツ子



どか雪が町のくらしに蓋をする
 無理なんかしなくていいと高い空
 蝸牛みたいな学び方ですが
 奇天烈な体験できる夢が好き
 西鶴の橋を渡って雨に逢う
 お日様に後押しをされ今日終える
 紳士物売り場へ先に連れて行く
 引き算はしない身軽に今日を生き
 三食を囲むお膳が光ってる
 慰安婦を知っているから黙ってる
 下り坂の景色も捨てたものじゃない
 やがてまた軍事大國目指す気か
 優しさで閉じてる心開かせる
 どや顔のアベノハルカス日本一
 陽光燦燦花も小鳥も野に満ちて
 たまゆらのいのち光らせ生きのびる
 さてひとり自由の中に居て不自由
 哲学者の顔で立読みして帰る
 古稀なのにまだまだ丸くなれませぬ
 退屈しない趣味と妻とを持ってある
 鳥の声でわらう五月の子どもたち

和歌山市	藤井寺市	大阪市	松原市	奈良市	奈良県	藤井寺市	奈良市	岸和田市	寝屋川市	吹田市	泉佐野市	倉吉市	長岡京市	尼崎市	鳥取県	河内長野市	高槻市	堺市	阪南市	大阪府
木	鈴	江島	森	山	渡	若	米	雪	山	山	山	山	山	山	山	山	安	矢	森	粉
本	木	谷	松	本	辺	松	田	本	本	本	本	中	田	田	下	岡	田	倉	村	山
朱	い	勝	ま	柳	富	雅	恭	珠	三	希	蛙	康	葉	耕	節	富	忠	五	美	隆
夏	さ	お	つ	昌	子	枝	昌	子	郎	久	城	子	子	治	子	美	子	月	花	盛



追悼

津川紫晃さんを悼む

三島 淞 丘

長い間病と闘いながら川柳を愛し続けて来られた津川紫晃（本名＝晃）さんが平成二十五年九月十六日享年七十一歳の若さで帰らぬ人となりました。

紫晃さんは、島根県の川柳史にも残る津川紫吻氏の長男として生まれ、氏が亡くなった後、ご意志を継いで川柳を始め、平成十年から川柳塔まつえ吟社の会員、川柳塔社の誌友になられ、その後紫晃の雅号で、当地の川柳界にはなくてはならぬ柳人の一人として活躍をされました。

私と最初の出会いは平成十二年の秋、川柳塔まつえ吟社の例会に初めて出席した時でした。何も分からぬ私に気さくに話しかけて下さって冗談を言い交わした事を思い出します。

五十代の後半に軽い脳梗塞になられたようですが、当時はお元気で朗らかな人柄で冗談が好きで笑わされたものでした。

小春日で首筋あたりからジョーク

ジョーク好きの男の肩へ赤とんぼ

お酒はあまり飲めなくても雰囲気が大好
きて例会の後などで、ビールの事を「泡を
飲もうや」と誘われたものでした。

縄のれん涙のわかる席がある

ジョッキ手にひと時白い雲に乗る

何時もにこやかな笑顔で話しかけ、時にはロマンチックな胸の内を覗かせて、若かりし頃が偲ばれる一面もありました。

夏の恋潮の匂いを忘れな

恋ひとつ未完のままの夏帽子

これらの句は平成十三年に氏が川柳塔社の同人になられた頃の句です。その頃から恒松町紅王幹の許で紫晃、注湖、淞丘の男性三人が諸々を手伝うようになり、平成十五年に柳誌「川柳塔まつえ」が復刊二〇〇号を迎え、紫晃さんの発案で盛大に記念大会を開催することが出来ました。しかし、そ

の後二度目の脳梗塞が襲い病床の身となられました。病と闘いながら投句だけはと続けて来られました。

朝一番ナースの笑顔勇気づけ

真夜中のナース足音冷たそう

暫くして退院をされ、それから愛妻高子さんと二人三脚で闘病生活が始まりました。

妻よ手を離すな坂はまだ続く

ヨイドン妻が手を引く背を押す

一時は奥様の押す車椅子で例会に出席できるまでになっておられました。

その奥様が看病疲れか重篤な病に罹られ、平成二十三年一月紫晃さんを残して不帰の人となりました。

奥様に先立たれた紫晃さんは、その後リハビリ施設と病院での暮らしを余儀なくされました。それでも時折折電話で貴重なアドバイスをくれていましたが、今年ついに帰らぬ人となりました。川柳を通しての無二の友を失ってしまいました。

天空を明日は飛ぶぞと赤とんぼ

ほーほーほたる白い光の鎮魂歌

天の恩地の恩人は生かされて

どうか天国で秀句を詠みそして柳界を見守っていてください。ご冥福をお祈りいたします。

合掌

川柳塔合祀祭法要

於高野山大霊園

平成二十五年十一月九日、川柳塔合祀祭が、高野山奥の院「川柳塔碑」前にて厳かに執り行われました。

平成元年に開眼された「川柳塔碑」も今年は二十五年目となり記念の年となりました。今回の合祀対象者は十一名様。そのうち一大家族様（吉村一風様ご遺族一名）のご参列を頂き、川柳塔社からは理事長ほか八名、また今回は藤井正雄さんの奥様とご息女様も参列戴きました。ご本人はまだまだ御健勝、御健吟の日日を、過ごされていますが、「将来、僕の入るところを見てきて欲しい」とご本人の希望で参加されたとの事、大変微笑ましいご家族とお見受け致しました。

私は昨年に続き二度目のお詣りですが、やはり凜とした雰囲気の中、心静かに合掌すれば、気分も澄み気持ちも落ち着くようです。

理事長のご挨拶があった後、大霊園の

次長様の読経が始まりました。故人の名前一人一人を読み上げられ川柳塔碑に合祀されました。また参列者全員ご焼香



法要参加の方々

をして無事に法要は終了しました。読経後のご法話で「二度とお目にかかれぬ方々ですが、極楽浄土の十一名の方を偲び、今日の日を楽しんでお過ごし下さい」とのお言葉を戴き、ふっと心が解かれました。

美しい紅葉や黄金色の銀杏を眺めながら、場所を変えた食事処で、献杯、昼食、懇談と和やかな時間を共有させていただきました。遠く三田からの参加は朝早くで大変でしたが、お陰様で有意義な秋の一日でした。

(久保田千代記)

池原 天馬	平成24年11月9日没	83歳
長谷川 呂万	24年11月11日没	89歳
中宇地 秀四	25年1月30日没	85歳
井上 勝視	25年3月17日没	91歳
中原 諷人	25年4月27日没	70歳
福岡 末吉	25年4月27日没	80歳
石田 清泉	25年5月7日没	95歳
志田 千代	25年7月2日没	79歳
吉村 一風	25年7月16日没	88歳
阿萬 萬的		
赤川 菊野		

本社十二月句会

十二月五日(木)午後一時
アウイーナ大坂

十二月句会は一〇九名(投句六名)の参加で開催。初参加は明石市の瀬島流れ星氏の、田中亜弥さん、徳田ひろこさんに黙祷を捧げた。今月のお話は、河内天笑名著主幹。題は「ともだち」友達と言うより、大先輩の柳宏子氏の逸話、薫風氏と豆秋氏が文楽へ行つた時のこぼれ話。「大万川柳」にて句会終了後の宴において、栗氏と小松園氏の議論が白熱し過ぎ、つかみ合いになるのではとハラハラ見ていたが、帰りは肩を組み、笑いながら帰っていったのを見て、友達とはこうありたいものだと思動した話等。友達とは、ありがたい時もあり、邪魔な時もあるとの感想。路郎氏の句に

友達をみんなだまして南に居

(まつお記)

平成25年月間賞永久保持者は山本希久子さん(吹田市)

月間賞は、前 たもつさん(大阪市)

(司会)蕉子・善純 (協取)真理子・まつお
(受付)五月・美智代 (清記)勝弘

席題「裾」

黒田 能子選

裾踏まれあとの一步が踏み出せず
襟よりも裾のあたりにある気品
花嫁に負けぬ華麗な裾模様
富士山麓せめて裾野を歩こうか
裾をかすめ新幹線が行く
いざという時は女も裾からけ
留守だなんてカーテンの裾揺れている
裾模様着れば姿見亡母にの裾を攻め
同郷と分るうれしお裾分け
何はともあれお隣さんへお裾分け
裾模様まで笑顔です二十歳の娘
裾ばかり気にする頃が華だった
裾払いされてたまるか知る権利
尻尾切りいつも裾野が泣かされる
振り返る美人の裾が起こす風
家元といわれ卒寿の裾捌き
京の冬寒さ裾から這い上がる
青々と裾刈り上げて新人生
富士山が裾だけ見せてくれました
倍返し期待してますお裾分け
白足袋の舞ってまはゆい裾さばき
裾からげ目の色変えた亡母の暮れ
母さんの裾ひっぱっていったつげな
誠意ある社訓裾まで行き届く
お裾分け笑顔のおまけ付けておく
裾捌き心得てます見せ場です

山裾が映える頂富士の雪
富士山の裾野で大の字に寝たい
裾上げて生地が半分切られてる
よう出来た二代目裾野よう見てる
寒風がいたずらをする裾さばく
人生の裾野で迷い吹っ切れる
置き去りにされない様に裾を踏む
ミニスカート裾のあたりはもう真冬
私の秋を彩る裾模様
底辺の暮し裾から冷気来る

山裾の暮しにも照る陽が温い
お裾分けで足りる一人の晩御飯
裾からの冷え母さんもわたくしも
裾になるほど字がうまくなる年賀状
裾模様女の覚悟見え隠れ

世の中の裾野気楽に生きている
地
まだ母の裾野あたりで惑う今
天
神さまの裾にも触れぬ位置にいる
軸
裾よけがちらりいたずら好きの風

葉子 一歩 朋月 恭昌 蕉子 理恵 俶子 求芽 茂 耕治 たもつ 見清 一歩 敏治 富美子 由一 ばっは 美龍 裕之 天笑 楓楽 わこ 弘光 義子 奏子 好子 修

山裾が映える頂富士の雪 (久)千代
富士山の裾野で大の字に寝たい (久)千代
裾上げて生地が半分切られてる 佐知
よう出来た二代目裾野よう見てる 篤
寒風がいたずらをする裾さばく (久)千代
人生の裾野で迷い吹っ切れる 寿子
置き去りにされない様に裾を踏む アキ
ミニスカート裾のあたりはもう真冬 扶美代
私の秋を彩る裾模様 恵
底辺の暮し裾から冷気来る 希久子

山裾の暮しにも照る陽が温い キヨミ
お裾分けで足りる一人の晩御飯 よしみ
裾からの冷え母さんもわたくしも 千津子
裾になるほど字がうまくなる年賀状 シマ子
裾模様女の覚悟見え隠れ 義

世の中の裾野気楽に生きている 玄也
地
まだ母の裾野あたりで惑う今 敏子
天
神さまの裾にも触れぬ位置にいる 完司
軸
裾よけがちらりいたずら好きの風

人間も柳に風と生きる術 茂選
枝を見て森を見落とす蝸牛 萌子
枝ぶりをほめて用件忘れてる 雅明
房子

思い切り枝をはらった身の軽さ
親戚の枝葉で軽いお付き合い
盆栽展さんだ枝を誉めている
一枝を添えて茶室のおもてなし
小心で枝葉末節しか見えず
来る春へパワーを溜めている梢
どの枝も未来を信じ伸びてゆく
吟味した一枝器ひき立たせ
枝もたわわ誰も手出しをしない洪
枝道の誘惑に負け帰れない
一枝を落として春を待つわたし
枝道に入り未踏の地を拓く
どんとんと枝葉のついてくる噂
枝葉切り幹を生かして時機を待つ
折れそうな枝しなやかに強かに
見せ場です文枝継いでもこけてます
実をつけるために切らねばならぬ枝
金色の銀杏の枝が誇りしげ
ほめられてしぶしぶ切ったバラの枝
枝振りが良すぎ娘に虫が付き
枝道に逸れた議論が盛り上がり
枝豆にチヨイト時間を稼がせる
枝道に僕のオアシス繩のれん
剪定の鋏が決める出来不出来
枝道にノーベル賞が落ちていた
枝ぶりが良過ぎて幹に嫌われる
枝道に外れたお方の人間味
人間のエゴで剪定される松

能子 キヨミ 眞澄 舞夢 裕之 朱夏 完次 寿子 六点 佐知 よしみ 満作 朝子 すみ子 恵 修 保州 完司 耕治 克三 武臣 五月 正和 正和 いさお 正和 則彦 楓彦 武彦

折れぬ枝で首を吊ってはいいけません
枝分かれしても二人は同じ幹
それぞれに咲く夢がある枝の先
枝道に逸れた話が面白い
枯れた枝なりに役目はちゃんとある
リーダーは枝葉のことも気をつかう
佳
手頃な枝そうだブランコ掛けましょう
枝分かれしてから淋しさが続く
枝打ちを入念にした子の謀反
噂とぶ枝葉もついて艶ばなし
枝分かれしてもDNAは生きている
人
枝分かれうふふ小町の子孫かも
地
生きるため切らねばならぬ枝もある
天
枝伸びる無限の空に誘われて
軸
伸びたいのにすぐに切られる松の枝

保州 佐知 理恵 玄也 則彦 章子 ばっは 瑠美子 弘光 喜明 満作 美津子 桃花 弘一

大輪の花には葉が来て燥ぐ
相棒は速達分の切手でず
相棒はもう手放せぬ電子辞書
相棒にされて気やすく使われる
弥次喜多の夫婦ぜんざい共白髪
振り向けば後棒担ぐ人何処へ
もう女捨てたら妻は相棒だ
相棒と言われ便利に使われる
いつまでも人と言う字の俺お前
相棒と呼ばれ命令されている
相棒の愚痴を着に酒二合
おっ！だけ通じる彼がいる安堵
やりにくい相棒理屈捏ねすぎる
居ればうとまし居なきや気になる人と住む
相棒は庭の四季です小鳥です
相棒の昔を覗いたりしない
相棒と程良い距離の冬木立
相棒のいびき越えてきた卒寿
相棒と切磋琢磨の趣味の会
相棒が元気で私つかれます
相棒のベンに火が点く夜の底
ライバルは相棒練磨するコンビ
相棒にはしたくないです紙おむつ
相棒を一度組みたい福の神
片棒を担いでからの腐れ縁
相棒の鐘と撞木による余韻
変人の相棒持つて苦労する
どんな日も心紡いで来たふたり

恵 奏子 美智代 かずお 敏治 裕之 天笑 見清 好 かずお 克三 ばっは 克己 賢子 由一 葉子 はこべ 朱夏 武臣 月子 富美子 恭昌 善純 たもつ 敏治 俣子 朋月 賢子

(矢) 兼題 「相棒」 藤井 正雄選

相棒は無口であつたかい徳利
細道を持ちつ持たれつ妻と旅

六
点

夕暮れてやつと頭が冴えてくる
やつとからよつしゃへ余生まだ元氣
かさぶたが剥がれてやつと春です
古稀の坂やつととまだがせめぎ合う
ごめんねとやつと言えたね冬の朝
被災地の庭にもやつと福寿草
掌に追い風夢が動き出す

紀
乃

日替わりで診察券が改めてくる
やつとももうとも思う定年日
やつとわかつたいてくれることの意味
やつと来た返事にノーと書いてある
お局がやつと寿退社する
追伸でやつと本音に辿りつき

富美子
正雄
眞澄
玄也
六
点

相棒とどんだ底抜けた汗光る
脳力は相棒が上ありがとう
ちっけな意地相棒にして生きる
一升は呑む相棒で氣がもめる

六
点

何冊も医学書読んでから医者へ
やつと墓建てられました長女の死
泥の靴やつと迷路が抜けました
やつと手に入れた一人で呆けられぬ
職退いて絡んだ糸が解けた靴
人並という物差しにぶら下がる
待つ事にやつと慣れたかキリンの首
退院にポインセチアはより紅く
追い付けばライバル更に高い位置
年月がやつとあうんの呼吸くれ
逆風でやつと見分けをつけた友
表札を息子に変えて荷をおろす
過労死の判決が出た七回忌
泡みんな消えてますけどカンパイ
やつと出た貧乏神がすぐ戻る
寂しさを乗り越えました七回忌
東北がやつとと言う日早くこい
冤罪をやつと認めた法治主義
迷路からやつと抜け出た瘦せ蛙
引き返しやつと見つけた元の道
鬱の字をやつと覚えてウツになる

敏子
夏
楓
楽
ひとみ
直樹
よしみ
保州
岳人
郁夫
日の出
流れ星
富美子
篤子
ひとみ
たもつ
はこべ
茂
保子
眞理子
克己
美智代
堅坊
誠一
完次
不動
眞澄

やつと手を握つた青い月だった
一病を手はずけているのがやつと
四十年やつとと空氣になりました
靴下を脱いで男はほっとする
やつと喜寿さあフランス語始めるか
出来る人のやつとわたしのやつと
席空けてくれたお方がやつと下車
やつと来た道が二つに分かれてる
辿り着いた峠に待つていた昔

好
正雄
希久子
章子
ばっは
黒兔
たもつ
美津子
求芽

肥後守と頑固土士の半世紀
阿と呷で言葉は要らぬコップ酒
ロボットを相手に酒を飲むビエロ
すり減つても塗りが剥けても夫婦箸
相棒だつた今も欠かさぬ陰の膳

篤
保州
直樹
五月

やつと来た秋が短くないですか
人間がやつと分かりかかつて喜寿
消費税やつと馴れたらまた増税
やつと書いた賀状を猫が踏みつける

人
地
天

兼題「やつと」
みぎわ
はな選

兼題「氣高い」
板尾
岳人選

盆栽の構図と語る至福時
天
九条を相棒にして平和維持
軸
俺お前いい相棒で腐れ縁

久
千代
朝子
裕之

兼題「やつと」
みぎわ
はな選

兼題「氣高い」
板尾
岳人選

兼題「氣高い」
板尾
岳人選

兼題「氣高い」
板尾
岳人選

兼題「やつと」
みぎわ
はな選

知り合いに気高き人は見つからず
 気高さに縁ない父の武骨な手
 現住所若屋で一目置かれてる
 目鼻無き折り紙雛にある気品
 普段着のような顔して参観日
 ヨレヨレの和服気高く着る案山子
 気高さを脱げず孤高を持って余す
 高嶺の花は手出しもされずそと枯れ
 神木の前だ帽子を取りたまえ
 まわり寿司気高くトロを注文し
 お隣へ気高い女が座りはり
 薪能月の雫を浴びながら
 気高さが人惹き付ける美智子さま
 女神さまみたいたちまち一目惚れ
 亡母さんと呼ぶと卑弥呼がこだまする
 斎場に溢れるように白い菊
 気品ある人と飲むのはお断り
 頑張った顔そのままに友は逝き
 後列にいるが気高さかくせない
 上品な顔していけずする上司
 気高くてバーゲン会場行きません
 整形をしても気高さまでは無理
 上品な顔でマグマを吹き上げる
 マドンナは今も気高く胸の奥
 微笑みのあのモノリザクがボクを見る
 みどり児の笑顔気高さと愛らしさ
 気高そうに見える女の抱く魔性
 天皇を紙とあがめていた昭和

不動 美籠 流れ星 はな 善純 宏子 かずお 茂 眞理子 はこべ 月子 保州 千代 紀乃 富美子 朋月 理恵 眞澄 希久子 満作 忠昭 アキ 蕉子 美智代 喜明 直樹 朝子 朋月

白い花気高い心秘めている
 どの山も気高い今朝の澄んだ空
 住 気高さは真似も全く出来ぬ夫
 気高さはお育ちのよき雪女
 気高さは盲導犬に叶わない
 紫式部その気高さを熱く読む
 気高いものの一つとするか妻の鼻
 人 富士山のような女でくたびれる
 地 ペテン師が気高い所作の爪をとぐ
 天 鮫小紋きりりと骨になる衣装
 軸 反戦を歌う気高き鶴彬
 兼題 「めまい」 小島 蘭幸選
 ハルカスにめまいしている暇はない
 黙祷の一分長くないですか
 朝一錠飲まぬとめまいやつくる
 多事多端めまい起こしたのは昔
 若い日に見てめまいした原節子
 自分史に自己陶酔の立ち眩み
 地球が回るだから目眩が止まらない
 見え透いた世辞に心地の良いめまい
 めまいから覚めて立ち位置見え始め
 八十の齢教えているめまい

篤子 求芽 見清 宏子 堅坊 郁夫 蘭幸 紀乃 正雄 五月 雅明 武彦 勝弘 裕之 見清 柳弘 敏治 敏子 希久子

耳鳴りが済めばめまいが続く朝
 追うものを失くしてめまい続いている
 無理をして動悸息切れ立ち眩み
 常識がこの頃軽いめまいする
 逆光にめまいあなたを見失う
 ティファニーでめまい起こしたのは夫
 肩叩きぐらいでめまい起こさな
 あまやかなめまい万華鏡の中で
 万々に備えめまいのふりもする
 立ちくらみ私を探す旅に出る
 はじめてのお酒あなたが五人いた
 北風と真つ向勝負するめまい
 めまいするほど暑い夏寒い冬
 めまいするくらい美人のニューハーフ
 ダイエットすれば目まいが先にくる
 憲法がめまいを起こしそうになる
 八十歳の恋のかけろう見るめまい
 目がくらむ高さで菜園をつくる
 めまいするほどの嫉妬してみたい
 血圧が飲みすぎなのか立ち眩み
 虹色のめまいをゆつくりと溶かす
 神様に必死にしがみつくめまい
 アペノハルカスで久しぶりめまい
 全力で走るとめまいでは済まん
 病名は恋と解っているめまい
 失敗を振り返るたび軽いめまい
 一瞬のめまい さささんが散りました
 佳

忠昭 篤子 好恵 能子 五月 葉子 眞理子 見清 蕉子 はつは 朝子 宏子 由一 日の出 完次 希久子 唯教 一步 完司 義次 天笑 善純 五月 完司 朱夏 たもつ

休肝日ときどきめまいして暮れる
同窓会あのマドンナが杖で来た
美しいめまいを誘うルノール
雪こんこしろいめまいがまだつづく

人
恋をしたせいです紫のめまい
瑠美子

地
無担保で無利子札束へのめまい
六点

天
8パーセント如きにめまいするものか
たもつ

退職をするためめまいが消えていた
軸

平成25年度本社句会皆出席者

(順不同)

足立 茂・阿部紀子・岩崎公誠・居谷真理子
上山堅坊・榎本舞夢・江見見清・太田扶美代
大内朝子・柿花和夫・加島由一・片山かずお
川端一步・木本朱夏・黒田能子・鴨谷瑠美子
小島蘭幸・佐藤忠昭・澤井敏治・久保田千代
島田誠一・関よしみ・都倉求芽・古今堂蕉子
西内朋月・西出颯楽・前たもつ・鈴木いさお
牧浦完次・升成 好・水野黒兎・松尾美智代
三宅保州・村上玄也・森本弘風・森松まつお
矢倉五月・山口光久・山田耕治・山岡富美子
山野寿之・吉岡 修・米澤淑子・山本希久子

(44名)

句会 燦 燦

11月句会を読む
と 砥 たかこ
あお 青

低音が支え歡喜の歌となる
真理子

底辺で支えている人がいるからこそ、上で輝く人がより輝ける。音楽の世界も同じことなのだ。

両隣呼名が済んで焦り出す
紀雄

楽屋吟だが、これに似たことは人生多々ある。結婚しかり、大掃除の網戸洗いに至っても、回りが早いと気になるものだ。

公平を聞き分けるため両の耳
椒子

そうなのか、そうなのね、と改めて大切なことに気づく。
日展の免許に黒い染みがある
航太郎

ずっと以前から言われてきたことだ。いまさら……と思う人も多い。日展の免許、と皮肉り、染み、と優しく詠まれた。

わたしからずけずけ取ると枯木です
ばっは

と、ご自分で言う方ほど、周りに神経を遣って生きておられる気がする。本当にずけずけ生きている人はそうは思わない。

びっしよりと濡れたカルテと冬になる
希久子

何に濡れてしまったのか、冬行きのカルテ。でも、冬の向こうにはかならず春が来ることを、希望を持って生きたいものだ。

バイキング菓の分を空けておく
宣子

川柳は省略の文芸だ、と言いたげな一句。頷いた人も多いと思う。気の毒なことに、葉でお腹一杯になる人もいるようだ。

小さな傘で男はわざと濡れ
裕之

古川柳にありそうな、無駄の無い句。男はこうでなくっちゃ。残り時間の余地へバンジー植えている
扶美代

時間も土地もあり余るほどは無いけれど、有効に使う心意気が見えて、人生もこうありたいと思えた。



毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようお願いします。
編集部

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

ばあさんの鳴咽聞こえた終戦日
聞かずとも言いたいことは顔に出る
下馬評を打吹山が聞いている
体重を毎日計る実る秋
実りの秋つい食べ過ぎてメタボぎみ
金の生る木実らぬままに枯れ果てた
秋実り黄金の米も最敬礼
赤い実は皆んな小鳥にさしあげた
落ちた穂を実りの糧と拾う人
絶対に実ると信じ鎌をふる
豊年だどんなもんじゃと言う案山子
本物だいやつけばくろだともめる
振り向いた美人に俺と似たほくろ
目の下のほくろで区別双子ちゃん
大陸もほくろも移動するという
手の平のほくろも野望を握りしめ
宇宙から見れば地球はつけばくろ

道子 滋
石花菜 清
悦子
紀美恵
久芽代
節子
耕治
重忠
玲子
玲子
重利
公恵
野蒜
三津子
たけ代

吉か凶か運命線のほくろ位置
月刻むワインの樽にモーツァルト
月見草咲いて想い出語る道
月明りそっと手を出す帰り道
振り向かず満月も見ぬ夫といふ
八百万の神が出雲へ神無月
月満ちて私もママになりました
満月は憂さを飲み込む母の顔
月明かり別れづらくて遠回り
上弦の月に望みをかけてみる
わたくしを埋めるほどよい月あかり

南大阪川柳会

津守 柳伸報

煮ころがし母はベテランだと思
ベテランの作品さすが奥深い
癖を知り機械の機械損なわず
マラソンの余裕ベテラン無の世界
ベテランの大きな傘を信じてる
ベテランの慣れた仕事にある死角
気に入りの服M寸が癢の種
災害に思わぬ命奪われる
満塁にアト一本が打てぬトラ
女難の相言われてチャンスまだ来ない
旅友と次のプランは姦しい
マニフェストプラン倒れの絵空ごと
有給休暇上手に使うプランたて
プラン通りうまく進まぬダイエツト
プランには程遠く居て無一文

志華子
あや子
正春
柳伸
典子
昌紀
なぎさ
更紗
和雄
一步
柳右子
恭昌
シマ子
庸佑
柳弘

長生きのプランはやはり金次第
予定表句会飲み会お医者様
負けるから愛しいのですタイガース
誕生日愛しい君にバラの花
お互いに愛しい仲間若がえる
泣いてすねていたずらばかり恋かしら
恋人といつか乗りたいなつ星
愛しくて厭しく叱ることがある
走ってもゴールが無いよ八十路には
傘寿すぎ命走って過ぎていく
走っても空のあなたは遠すぎて
逢いたくてつい小走りになるヒール
先走り付いて来るのは影ばかり
雑魚駆ける二十日鼠に似た暮らし
走っても歩いても着く向う岸
逃げ足を鍛えて魔女に備えてる

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

トタン屋根雀の踊る音に覚め
眠れぬ夜秒針の音サスペンス
ハーモニカ昔昔はよかったな
ガタガタと音立て老いが寄ってくる
家中が静まりかえる妻の乱
心音に微笑む娘母の顔
音は上げぬまだ九回の裏がある
行き先は同じでしょうか影法師
背を丸めた影が大笑いする
阿吽の呼吸老老介護に見えぬ影

栄恵
汎美
笑子
輝恵
敬子
京子
規代
淑子
慶子

集一
忠昭
勝弘
直子
タカ子
ばつは
弘子
たもつ
弘泰
ルイ子
あさ子
栄子
歌留多
克己
楓楽
修

わたくしの影武者夫だったのよ
 曼珠沙華の影とわたくしの影と
 しつかりとお守り袋もつて出る
 守ります時計の針にあるノルマ
 カマキリが我が家の庭をパトロール
 生家を守る赤い夕陽と木守柿
 身は土に返して父祖の地を守る
 亡きひとを守って今日月が澄む
 稲刈りを見守っている赤とんぼ
 試練の重さ頑張つてなんて言えぬ
 肩の荷がグラクタ捨てているところ
 カプチーノふんわり秋を包みこむ
 円卓を囲むほつこりあたたかい
 勝負師の顔でコートに立っている
 風もまた四季を合わせるカレンダー

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

千代美 蘭幸 房子 比呂子 半徳 寛 静風 幸子 歩美 厚子 あゆみ 栄香 史子 千枝 一路

両方の秘密が入る中の分
 長生きもほどほどですと欲を言う
 墓掃除の背中を流すよう
 わたくしの活路間違ひなくあなた
 知恵絞れきつと活路は側にある
 甘過ぎてマヒするような恋したい
 母の背が活路見出す羅針盤
 日本人訳あり品が大好きだ
 まっすぐに家に帰れぬ訳がある
 訳ありの二人をさとす肚を決め
 訳あってペーパー離婚しています
 台風はそれが妻の低気圧
 避難勧告出すタイミング難しい
 増税も聞き慣れたのかマヒしたわ
 金見ると心が麻痺をして仕舞い
 中の分自由に生きて奔放だ
 お月さま寄り添う影に嫉妬する
 天国へ今日も一日近くなる
 紅葉の色に魅せられ落葉掃く
 物価高年金暮らしマヒをする
 なかなか活路が見えぬ汚染水
 奈落から活路みつけて這い上がる
 神頼み他に活路が見出せず
 訳ありの借金なのか火の車

地佳平 回春子 金祥 美佐枝 房江 隆浩 かつよ 弘康 圭一郎 春名 蟹郎 雅女 由美子 天翔 一京 節子 清帆 昌鼓 おばん雀 茂登子 穀 文香 秋月 一粹

高知川柳社 小川てるみ報
 エアコンが喋り捲つて止まらない
 頭陀袋噂出し入れして困る
 善夫 とも湖 かしび 凱柳 妻子 清信 美ゆき 無限 洋々 一瑤

竹信 照彦 選
 衿首をつかみ昨日を引きもどす
 その態度マジカトボケかどつちなん
 脚本が急に変つたすぶ濡れた
 弱虫で泣き虫ですが本の虫
 悪人と組む善人に見えるよう
 やんわりとじんわりと効く祖母の灸
 傷みゆく地球に予備の星はない
 嫁はんとはぐれ途方にくれた地下
 シーズンが終れば元の過疎の里
 なにくその形エフロン千している

籠島 恵子 選
 とほとほの足跡からも花が咲く
 ブルドッグあれでなかなかテリケート
 工場のサイレンなのに空を見る
 あの頃の籬はどこかへ飛んでつた
 くよくよは止そう夕日が美しい
 弾まねば影も私も置き去りに
 愛想笑い出来てにんげんとりもどす
 生かじりでしたと夏の恋おえる
 もしかして君が四つ葉のクローバー
 子らのために余計な種をまいて置く

啓子 温子 ばっは 勝弘 くにこ 鬼一 一粹 六點 泰子 華

たけ代 としお 三成 すみれ 好 更紗 晴美 克博 嘉子

佳句地十選 (12月号から)

父さんの困った時の咳ばらい
横文字のチラシわたしは日本人
干魃に困り洪水にも困る
子の悩み気づかぬ親が居て困る

川柳塔唐津(佐賀)

仁部 四郎報

木犀の香りに抱かれ雇仕事
気配りのさすが快適五つ星
綾取りにもつれた時の助け合い
父ははの気持が分かる古希迎え

美千代
百合
雅美
かつ子

エプロンを脱げば晴着の若女将
怒らすと首エプロンで締められる
裏木戸にそっと来たのは昨日です
だからの言い訳主語が抜けている
きつと来る友の裏切り許せる日
声落とす内緒話に花が咲き

七朗
晴美
アキ
恵

母のリハビリをフアイトと苦しめる
練習の祭囃子に心わく
下ばかり向いて歩いていませんか
ほのぼのと心温もる版画展
秋に蚊が顔に挨拶逃げられた
うぬぼれがピタミンになることもあり

松露川柳会(鳥取)

山本 正光報

おみなえし秋の足音そつときく
実らない恋が体を吹き荒れる
無花果の青さにも似る片思い
蒙古斑とれて少年無限大
やけ酒が三日も続く海の荒れ
荒れた手の母あたためる小さな手
何度でも直す老後の青写真
自分史を重ね合せた時化の海
箱ぞりががたがた滑る仁王坂
ガタガタと崩れる丸呑みした夕陽
足音で顔が見えますドレミファソ
三回忌亡母の足音まだ聞こえ
足音を背中で聞いている別離
熟爛の銚子は荒れることはない
鎮魂の海がときどき牙を剥く
足音がする化物は怖くない
荒波が止んでひとりの喪が明ける
楚々とした手向けの花の青さかな

小とみ
一湖
洋子
美鈴
吞舟
きよし
柳子
ひとし
則彦
芳生
一吞
井蛙
黙人
花峯
慕情
一花

嵐呼ぶ女二人が住む館
おとなしい犬で散歩は気が抜ける
口先をスルリと抜けて出る噂
繰り返すは止そうよ闇が深くなる
路地裏に見え隠れする影法師
潮時だそつとわたしは輪を抜ける
アルプスの雪とオゾンで艶やかに
瓶ビールにシュボンの音がおもてなし
エプロンに包みお隣りお裾分け
桜散りなくした過去を恋しがる
裏側も磨き抜かれている雅
裏からの糸でわたしを踊らせる
敗戦忌あの日と同じ陽が昇る
闇を抜け明日へ走る月明り
間違いを許してくれた丸い月
炎天下今日の水を飲む
さあ行こう運とわたしが味方です
裏表あつて浮世の人の貌
沙羅双樹今日一日を咲き誇る
迫られて抜け道探す雨の午後
置いて転んだ石に教えられ

柳子
千華
佳子
壽峰
華
静子
登子
よしみ
正治
高鷺
常男
欣之
伸雄
信之
寿之
和子
文重
彦次
奏子
未知
千恵

前もって釘刺しておく村すずめ
流れ星一つ二つと秋の空
星ながめ思いにふけて一人ぼち
星空を見たくて田舎暮しする
黒星が続き横綱らしくない
明けの明星母の化身を合掌す
星影のワルツで締める演歌道
満天の星に明日の希望わく
七つ星華麗な旅に縁遠い
星座から見ればそうぞうしい下界

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

まみ子
廻行

富柳会(大阪)

古田 千華報

澄子
紅紫朗

レトルトでエプロン要らぬ妻の座よ
エプロンの白に家族の愛を秘め

武人

ひらひらと蝶は少女を脱皮する 森子

ほたる川柳同好会(大阪)水野 黒兎報

ゆくゆくは宇宙の塵と悟る顔 勝

宇宙ではコニスキだつて浮いている 正子

宇宙にはあるのでしょうか桃源郷 美智代

受胎告知母の抱いた小宇宙 久子

異常気象記録破りの荒れた年 正代

マー君の記録球界破天荒 輝

寝そびれた朝を破る百舌の声 春代

破るため世界記録の金の壁 信男

鉤裂きもジーンズだからファッションに 郁子

古稀過ぎておかしな妻の更年期 久仁子

おかしな日何をやつてもうまくゆく 順子

おかしなが今日一日が元気なら 桂子

花嫁を母の名呼んで笑い声 長一

ありえへんおかしな夢や妻土下座 幹治

景気よくなったと言うがピンと来ず 柳童

Tシャツの英語おかしな意味だけど 黒兎

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

遠回りの分遊び上手です 紀久子

大ニュース老母が笑顔で歌つてる よしこ

砂浜に昨日のニュース落ちている 小雪

生涯をかけて煮詰めた愛である 夕胡

じつくりと煮詰めた案に落とし穴 英子

増税へじつくり直す青写真 泰女

雑踏の街老人になつてゆく あきこ

じつくりの鏡私に世辞を言う
大好きな人だからこそ近寄れず
故里の甥の結婚花が咲く

遠い人心はいつも側にいる

遠回りせよと勧める万歩計

遠慮会釈モラル忘れぬ子に育て

遠い日の記憶辿れば母の声

遠い日の飢え想い出す芋の蔓

羽根あればいいえなくても翔ぶ勇氣

羽根に色つけたら蝶になりました

羽化をして宇宙遊泳するつもり

広げたら豊めなくなるボクの羽根

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

究極の無駄は戦争だと思ふ

欲望が高いその分無駄がある

天の屋根破れと豆の種を蒔く

屋根裏に僕の基地ありNゲージ

ご主人の酒癖までも見てる屋根

洪水のままでお嫁に行きました

言い過ぎを悔いて見上げる木守柿

干し柿の渋のように消えぬ罪

過疎の里誰もとらない柿たわわ

ヤケ酒にしんどいなあと柿のたね

洪水も催眠術で甘くされ

夕焼けの空とコロボの柿真つ赤

洪水のような役目の人がいる

流れに逆らい少年期の模索

富美子 流れには乗らなくていい救急車
寿子 日本語が流暢青い目に感づ
幸美 秋雨を名曲にするトタン屋根
和香 せせらぎに冬の気配がのつて来る
秀子 聞き流すためにあるのか耳2つ
佐一 水曜日流れ着いたは無人島
ほのか どう見てもボクを味方にする流れ
めぐみ ウォシユレット造つた人に感謝する
克子 本流を外れて弾む無駄話
紀子 美人の湯何度通えど効果ない
徑子 運のない日は後ろから流れ弾
大輪 一万円ごときで川へ突き落とす
柳昌報 フクシマの無人田圃は雲映す
いさお ぴちぴちの若さ浪費した青春
三成 繰り返し送られたラブレター
信二 生き生きとわが人生は無駄だらけ
直子 食材偽装みんなどでやれば怖くない
篤 知る権利ふと気がつけば闇の中
喜八郎 二枚舌原発セイルする総理
穩夫 中国を批判できぬぞ秘密保護
堅坊 偽装など縁ない妻の温いめし

長柳会(大阪) 坂上 淳司報

はいおまけこの愛嬌が客を呼ぶ

惚れはれとだんじり屋根の舞い姿

仙一に惚れる采配日本一

ゆるキヤラに愛嬌託す観光地

大合唱運命響く年の暮れ

大気 克己
朝子 紀乃
花笑 武

信子 忠昭

秀夫 隆昭

のぶ久 奏子

ひろし キキ

和雄 一行

桃花 峯二

美智子 勝弘

敏子

半世紀魅せられていたあのえくは

愛嬌を振りまく女将器量よし

精一杯愛嬌振りまくバスガイド

焼き餅を焼くのはいまだ脈がある

自惚れと分っちゃいるが自画自賛

愛嬌を絞りピエロの一人旅

お不動の忿怒の相に見る愛敬

卒寿過ぎ爺と婆さん惚れ直す

メンタルケア好きだと妻へ日に三度

鍵穴の向こうに妻が正座する

嫁さんに欠ける愛嬌僕に有る

惚れたのは勝手惚れさせたのは罪

ごめんねの言葉は無料何度でも

惚れるのは母に似ている人ばかり

倉吉川柳会(鳥取) 竹信 照彦報

一円にもならぬ愚痴なら止めておく
酒止めるときはいのちが尽きるとき
天皇に手紙書くのは止めたまえ
淋しいが老いてゆくこと止められぬ
過疎のバス駅でなくても止めて乗る
川柳を止めると脳が干涸びる
大山の紅葉車止めて見る
あれこれとお詫び会见まだ続く
ああ言えばこう言う人の妻である
あれこれと詰めた靴が見当らず
盆の上あれこれ並べ迷い箸
あれこれと老いの愚痴聞く立ち話

輝子 靖博 正子 孝代 ともこ 三和子 弘光 武男 直樹 正博 正子 久美子 芳野 隆彦

あれこれと手量りをする蟹の市

ばつさりと頭を落とす鯖のしこ

ばつさりと断髪力士感無量

空屋敷ばつさり切れぬ銀杏の樹

ばつさりと心機一転丸坊主

ばつさりと夫を切りたいでも好きだ

逆らうとこわいぞと言う女の子

逆転があるから野球見続ける

サラリーマン上司逆らい倍返し

逆らうて見たがあえなく都落ち

正論は逆らう気かとはじかれる

産卵に川逆らうて鮭の群れ

むしろ旗あげて自民の勝手阻止

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

達磨の目いつかにつこりさせてやる
インターバル速歩散歩に取り入れる
涼風に猛暑の疲れどつと出る
天国と地獄の曲で日日走る
新米を横目でにらみ古米買う
紅葉時自分の色ではじける木
嫁の地位固めて実家遠くなる
躰いた数が育てる笑みの顔
酔い止めに持たせるクスリ片栗粉
酷暑去り身に何事もなくてよし
毎晩の没句供養に追われてる
八年目ここで挫折は許されぬ

重忠 雄大 智恵子 祐子 英子 紀美恵 鬼一 玲坊 けいこ 貞子 悠子 次男 日出子 照彦

生きてゆくあがきに趣味の二つ三つ

また五輪見るとと葉飲んでる

ななつ星庶民の手には掴めない

消費税アップ家計簿つけなくちゃ

ハイテクにもみじマークが追い付けず

正論を吐いた人から一人消え

旅の宿期待ふくらむおもてなし

アベノミクスに酔っているのは総理だけ

逝くまでとピンピンコロリ追い求め

忘れよう前へ進んで行く為に

へその緒を切ってはるかな旅つづく

五輪招致酔うてばかりじゃいられない

人と人ぶつかる波に酔うている

旅ゆかはウォッシュレットにホッとする

川柳大阪 森松まつお報

せやねでは本当の気持ちどちらなの
惚れたのはせやな彼方で三人目
中国も日本も悪い奴がいる
悪口はせやなせやなで盛り上がる
せやな親の意見と茄子の花
ごちそうさんあまちゃんよりも観てるかも
松茸を膳に酒飲む至福どき
幸せや毎日元氣出掛ける
福寿草咲いて幸せ近くする
子や孫の酌で至福の祝い酒
福福しい顔して底意地が悪い
居酒屋で縮んだ背筋伸ばして

公平 五月 勝弘 かよこ 信醉 珠生 功 美世子 柳昌 鉄心 朝心 比呂志

老い二人命縮むよ消費税

特上のちりめんじゃこは縮んでる

憎んだらあかん寿命が縮むから

大声に縮む気弱なわたしです

共感を覚えてからのボランティア

東北に勇氣与えた日本一

G党も喜んでる星野さん

手と足の一句に言葉見失う

手が痛い握手だきつと本物だ

山彦のように共感してくれる

週上する蛙に謝れ東電よ

汚染水海に流されそのあとは

先人の知恵を生かしたエコライフ

巨星落つ打撃の神様安らかに

温暖化いろんなまさか記録する

川柳塔なら

坊農 柳弘報

謝罪会見居並ぶ言い訳のマイク

はじまりは朝の鏡の笑顔から

見合いて全てを任すイヤリング

八頭身に写る鏡を買いました

糞虫が風に任せている気楽

東電に任せてならぬ汚染水

笑いとばしたらと鏡からエール

正直に律儀でなくてよい鏡

避難放送マイクと共に波に消え

母さんが諸手ひろげて待っていた

カラオケは一曲にする上手いから

(江)勝弘

彦太

笑風

堅坊

美花

柳弘

善純

紀雄

ダン吉

一步

まつお

司

和

隆司

喜楽

川童

国債は子孫に任せ道造る

見解の相違諸手は挙げられぬ

諸手挙げ和音の風に触れて秋

颯雲介護は任す言われても

笑うため鏡はあるとふと気付く

行き先を風に任せて飛び出そう

真実を映せる鏡などはない

小さい秋マイクにいれる虫の声

五十年の灰汁写し出す内視鏡

焦るなど呪文をかけている諸手

こだわりを捨てて貴方に身を任す

万歳のその後は誰も語らない

オフレコを隠しマイクが逃がさない

欲掴む諸手醜くなつてくる

フクシマのマイクが拾う槌の音

風評をマイク尚更かき立てる

水鏡ゆれて悔しさ笑い出す

戦争へ諸手をあげていた悪夢

盗聴器女の部屋は妖しすぎ

雷より怖いアメリカのマイク

水らえた命を任す三分粥

すっぴんを映して今日の幕おろす

何掴みなにを逃がしたこの両手

下戸やけどマイク持ったら酔いまっせ

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳歩報

夕日染め雲は静かに動いてる

ちぎれ雲また許し合い手を握る

弘風

恵美子

寿之

のりこ

おたか

富子

真理子

孝子

國治

洋子

柳弘

柁子

恭昌

完次

良一

成子

保子

將文

理恵

堅坊

辰雄

あかり

隆盛

朝子

すじあかねいわしうろこの秋が好き

雲行きが悪いと逃げる癖がある

黒い雲僕の心をおおっている

雄大な雲の変化に足を止め

夕焼け雲が眩しくて飛んでみた

あかんべを言葉出来ずに吐き捨てて

四捨五入すれば私が捨てられる

捨てたつもりの過去ひよつと顔を出す

捨てられて仏になった丸い石

欲捨てる恋は拾って生きてゆく

反骨の駄馬は切り捨てられるのみ

マンガだよ老いた二人の旅日記

少年の助走路にあるまんが本

涙ポロポロアニメで泣いた事がある

まんが本子供の頃がなつかしい

ドラえもん全巻ずらり天袋

きなくさい話まんがにしてしまう

四コマ日辛子たつぷりぬつてある

半島の秋を鬼太郎電車行

ズームイン耐えてみせます厚化粧

凸レンズ怒った顔も丸くなり

しっかりと見つめ合つてるレンズ越し

レンズを外す本心がよく見える

わたくしのレンズに合わぬ嫁が来た

真相の深みへレンズもぐり込む

望遠レンズで彼女とご隣席

見逃せるレンズは偉大日向ほこ

用もないのにメールしてくるヤボな夫

静枝

弘充

輝山

禮子

幸子

らふ

久絵

涼子

ひふみ

柳歩

芳山

瀬丘

桂子

千里

ちえこ

芳恵

ゆき

美智子

知恵子

昌枝

たけし

幸代

久枝

博子

左余

青帆

とも子

寿代

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

補聴器も偶に聞きたい内緒ごと
思う事いっぱいあるまま今日も暮れ

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

子定みな重なり合っている悲鳴
重ね着を脱ぎつつ辿る八十路坂
ミルフィーユやさしいウンに包まれる

美羽

正美

レシビより産地に悩む料理人
プロレタリアプロはプロでも貧乏人
晩学の実りを老いの生甲斐に
泣き声で我が子みつけるママはプロ
プロとプロちとした角度くい違い
一分の誤差なく電車駅に着く
自家菜園夫の趣味に日々感謝
実を結ぶこの時期無情の雨嵐
親父見りゃプロへの道はダメと知る
台風に実りの秋が消えて行く
実りの秋脂肪すっぱり私抱く

公子
勇太朗
克衛
やすの
あや乃
みちる
敬子
一幸
昭好
泰子

お経よそに尼の年齢気にかかり
年下の彼氏も前期高齢者
善根を積んで仏に近くなる
生年月日書くたび過去が悔やまれる
本当の歳が判ったお葬式
それなりに元気でいます枯薄
立ち止まり年考える秋の空
仙人になると歳など数えない
年齢にうっかり触れてショートする
年齢よりも若く見られた日の夕餉
年齢が言わせるセリフどっこいしょ
織田作の二十五下と言っておく
年相応伸びては縮む思考力
るるいと馬鹿重ねる輩である
手の届く範囲に仕事積み上げる
汗積んで積んで原石光らせる
経験を積んだ花から実をつける
経験を積んだ言葉にある丸み
我利我欲積みめば心の荷が重い
幸せを積んで心が花になる
光陰に積み重ねたが悔いばかり
積んでおく重みを笑う電子辞書
日本の文化重ねたおもてなし

勇
美智子

昇
夢子
俣子
イセ
章子
富香
きく
次根
八重子
みね
義雄
義泰
起世子
元三
碧

重箱の隅を突いた話振り
秋晴れた出費重ねるのし袋
歳重ねまだまだ五年先を見る
ドナーカードせめて繋げるいのちなら
ほどほどに尽くしても咲く小さな花
大屋根を守り尽くした丸い背
夫婦とや尽くし尽くされ智恵子抄

准一
昭枝
弘子
純子
美枝子
和子
保州

川柳ささやま(兵庫)

北澤

稠民報

ラストダンス踊った人と共白髪
転げ擦り剥く手の甲破れ外科医ゆくとしゆえと自分に甘くなりたがる
究極の栄養源と言う笑顔
やれやれと言え暮しを折つてる
セロリ切る愛の迷路がまだ続く
帰省子に栗と枝豆味まつり
レシビ帳沢山持つてマンネリ化
日本に米が余つてから狂い
枝豆もすんで静かな本通り
眠れないあれこれ回想行事前
今日の日も弥陀に守られありがたそう
すき焼きを一人で食べる味気なさ

久子
美緒子
純子
哲男
稠民
真由
多美子
開子
可住
かほる
幸子
ちかゑ
照代

川柳塔さやらぼく(鳥取)大塚

惠子報

猛暑過ぎ秋を忘れたこの寒さ
薔薇の棘枯れても人の指を刺す
コーヒーの苦さ青春呼び戻す
義父の作賞総ナメの菊花展
千切れ雲固まりなさい早急に
一善をしつつ一悪考える
パースデーのローソク命がけで吹く
冬に向かう心構えを一ツずつ
振り返る路地裏通り枯葉散る
骨のある笑いが胸に突き刺さる
背伸びせず生きて来ました八十路まで

晴子
鶴子
喜周
寿々子
満
千代
ゆき

いすも川柳会(鳥根) 竹治ちかし報

久枝

神様は巢穴に籠り出てこない
空の果を守るオロチが来ぬように

章峰
久枝

飲み潰れふらふらしても巢に帰る
 面の皮だんだん厚く古稀祝う
 皮算用神に両手を合わせつつ
 脱皮してサブリメントを飲んで飛ぶ
 三味線の音に逃げ出す猫もいる
 つらの皮厚くして一〇〇まで生きる
 ひと皮を脱ぐとぞろりと出る本音
 皮むけてズキズキ心まで痛む
 一皮をむいても同じ顔だった
 面の皮鈍感なのか厚いのか
 捨てられる皮にひそんだ自尊心
 脱皮したばかりこそこそなどしない
 こそこそと内緒ばなしが歩き出す
 こそこそその話に耳が立つてくる
 汚染潰れ皆の心もゆがみ出す
 潰れ聞いた話は胸をおどらせる
 潰れている水と油のにらみ合い
 耳打ちで潰れる話をきかされる
 潰れている子供社会にある格差
 潰れてきた噂が風に遊ばれる
 悲しみも涙潰らせれば甘くなる
 喜びが潰れそうカバン補修する
 木潰れ日のような笑顔で老母がきた
 お馴染みの店でゆったり息を抜く
 おろしたて馴染ぬ靴に足が泣く
 老いてきても馴染んだ水は暖かい
 亡母の形見やっとな馴染んできた袖
 赤蜻蛉馴染の垣根朽ちている

眞弓 英男 左余 敬子 夢生 シゲ子 歌子 文子 多喜 ちえ 妙 弘子 治代 玲子 英子 桂子 蘭水 きみえ 美江子 博子 耕治 テル子 たえこ 美千代 孝亮 俊直 寿美 志げる

秋の絵と調和するまで語り合う
 骨董のくもの巢にまた引つかかる
 巢作りの朱鷺に大きな期待かけ
 愛の巢に夢を見ていて良いですか
 愛の巢も二人も枯れて黄昏れる

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

雲悠々少し当りのいい人と
 公約違反二倍返しは当り前
 要注意当り障りのない男
 当り散らす嫁をなだめる諭吉さん
 好きな事手当り次第やってみる
 釣針が魚群にまぐれ大当り
 台風の直撃島が大被害
 小吉がすっぽり僕に当てはまる
 拘りを捨てれば当る阿弥陀くじ
 人生の当りは夫かも知れぬ
 災害が家を呑みこむ当り年
 当りだと思おう生を受けたこと
 ほどほどってどれ位かと孫が聞く
 ほどほどに切り上げ時を知交渉
 ほどほどの酒色っぽくなるあたし
 飲む量は三杯までと決めている
 ほどほどにせよと言う医者肥満体
 体罰にならぬ程度に鍛えぬく
 惚れそうでほどほど距離を開ける仲
 ほどほどの安全なんてありません
 ほどほどにしてよ台風また台風

熊四郎 健柳 煩惱児 敬 ちかし 篤子 一步 昌紀 シマ子 美世子 公平 舞夢 温子 柳弘 妙子 日の出 楓楽 桃花 典子 芳香 勝弘 五月 隆昭 安代 志津子 ゆみ子

月影にほどほどの距離二人づれ
 人肌の爛ほどほどのまるやかさ
 ほどのいい遠慮ににじむお人柄
 ほどほどにしときと妻の目が笑う
 コラム読み目からうろこや涙まで
 朝食後二紙のコラムをデザートに
 今朝もまた天声人語から動く
 ドーナツの真ん中へんにあるコラム
 朝刊の名物コラム読み比べ
 視聴の心が打つコラム
 見開きのコラムスパイス効いている
 飄々と天野祐吉世相斬る
 菊日和コラムのちよつと良い話

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

わたくしも猫と一緒に家出する
 台風で家出のような旅となり
 チンしてと書き置きをしてブチ家出
 墓地買って生きている元気が満ちて来る
 振り出しへ戻りましょうと置き手紙
 魂を映す鏡を研いでる
 寂聴の出家のあとが魅惑的
 ブチ家出ローカル線に乗って見る
 くだくなる言葉わたしが老いてゆく
 初冠雪家出する気も萎えてくる
 一病持ち励みと謙虚織りませる
 転ぶたび情けを貰い立ちあがる

みち子 賢子 朝子 朱夏 満知子 (矢)五月 いさお 和代 公誠 美籠 ばつは 由一 富美子 房子 哲夫 昌紀 久仁雄 光久 たもつ 加お里 美智代 扶美代 千代 美籠 義子 智恵子

美しい夕陽に濡れて佇ちつくす
家出した妻よ帰って来んでいい
楓 楽

岬川柳会(大阪) 八十田洞庵報

パパそっくり似てはほしくない呑気者
年子
せち辛い世の中だこそそのんびりと
圭子
いやな事にせずめげず考えず
洋子
ハシモト君おまんの詭弁聴いちよれん
覚庵
海眺め雲の流れに我わすれ
桜 琴
天然でのん気なああの娘にくめない
清一
子育てを呑気に楽しむ余裕もて
晴美
火の車われ関せずとのん気もの
澄恵
年金で呑気にくらす時代は過ぎ
茂平
赤字でも役所仕事はのん気節
貞夫
お人よし呑気者だと人の言う
雪子
呑気です老後どうなるもう老後
富美子
小太りでポカンと呑気わが女房
和美
呑み込んで良かった昨日の愚痴ひとつ
令子
元氣な子ここに居るとと鯉のぼり
智子
笑わせる人が客より笑つてる
治
胃カメラも腹の黒さは写らない
寛
まっ白な紙にまさかが伏せてある
洞庵

岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

良心の鍵がゆるんで偽装食
蛙 城
会うたびにイメージかわるおつきあい
照
アイドルのイメージのまま五十過ぎ
いさお
湯上りの浴衣うなじが色つばい
益 祥

またかいな靴履いてからさがす鍵
和 美
会うまではイメージ怖い人だった
香 代
声だけできつと美人だと思う
玄 也
三つ編みをアップに変えた色つばさ
清
妻でさえ笑つてくれぬおやじギヤグ
和 夫
金釘流逢えばとんでもない美人
信 二
グルメ旅色気はそつと置いて行く
幸 子
原子の火油断だったですみません
ダン 吉
モノリザの瞳が僕を放さない
隆 昭
気抜けした心に風が入り込む
珠 子
入浴剤今日は白浜明日有馬
忠 太
虚と実を心の鍵で閉じ込める
大 輔
掛けている心の鍵も恋に負け
檜 代
イメージがふくらんでゆく手話と手話
保 州
柿がうまい油断するなど血糖値
弘 子
イメージを広げてくれた失明が
英 夫
春団治羽織脱ぐのも艶がある
ひろ子
尖閣でゆめゆめ油断召されるな
文 時
やるせなさ穿つ夢二のしなる筆
宏 之
苦勞人例え話でアドバイス
洋
七ツ星イメージだけは乗っている
正 幸
イメージは確と抱いている金メダル
正 春
鍵穴の向こう人生色々
みつ江
包容力付いてホントの大人です
康 信
タテヨコの鍵でなんとか解くパズル
義 泰

京都塔の会

樹本 宏子報

会議室ひそひそならば出る本音
文 代

認識よりお客を甘くみた擬装
公 子
偉い方らしいな難しくしゃべる
かずお
あと少し無難な道を行く夫婦
満 子
疑えば足音さえも怖くなり
義 昭
難を言えば優しくすぎるよ息子達
宏 子
少々の難ある同士が五十年
英 旺
ひそひそとそしてクスクス枯葉舞う
弘 之
無理難題ひとまず妻に預けよう
万紗子
ほめ言葉もつとはつきりおっしやつて
みどり
名門を汚す疑惑のメニュー表
泰 夫
近頃は体調から難が増え
輝 美
難逃れあとは流れに乗ってゆく
葉 子
老いてなお女難の相に脅えてる
則 彦
難儀です卵子も老化すると言う
啓 子
地声だからひそひそ話出来ないの
益 子
ブランドが偽物使い信なくす
さゆり
時々怪しい声で呼ぶ鏡
求 芽
ひそひそと金はあるかと友は聞く
五月
病人はひそひそ話大嫌い
美津子
ひそひその話はすぐに羽根の生え
朝 子
盗聴器聞き入るひそひその話
朝 子
書道する個性の出せない難しさ
彌 生
難題を抱えて寿命延ばしてる
欣 之
古希喜寿を何の支障もなく通過
惠子報

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 惠子報

水路へとうまい話の流れ込む
寿 子
敵味方ませこめにする阿弥陀くじ
秀 雄

謝ると決めて明日を軽くする
 宮中でマナーを守る叙勲の日
 値切つても値札は下駄を穿いている
 信じ切る敵に回したくない味方
 おばちゃん楽しみやからほつといて
 道楽が過ぎてブライド風化する
 道楽に夢中になれる金は無い
 チャンネルの入眠剤は勝れもの
 わたくしのチャンネル本音さらけ出す
 自分でも自分の味方でない自分
 投げないで日本中にお年寄り
 新聞を値切るとビール付いてくる
 趣味道楽とやかく言うな生きる道
 道楽の絵筆に命閉じ込める
 投げ出したままでページを閉じますか
 人間のマナーを嘲うハトスズメ
 本物の味方になって来た阿吽
 金貯めるのが道楽で二億円
 浮動票味方につけた選挙戦
 使わない機能は値切つていいですか
 いい笑顔マナーの良さを引き立てる
 チャンネルを回すこの世万華鏡
 届いても届かなくても始球式
 戦争はさせぬ味方を増やさねば
 今になり値切つたと言うこの指輪
 道楽も分けて読んだら優雅なり
 値切るだけねぎつてごめんまた今度
 奥様はシャネラー僕はユニクロや

西 智彦 高志 亜成 弘風 柳弘 さち子 后子 美羽 銀杏 かつみ 仁清 堅坊 ルイ子 仁 清 欣之 高鷲 壽峰 泰子 忠央 弘一 博泉 鈍甲 麗 一歩 朝子 賢子

正義が味方動じること何もない
 ワンコイン投げて運勢捻じ曲げる
 オバちゃんにブライドまでも値切られる
 手を上げて歩道を渡る三才児
 一本のメールですますありがとう
 西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造 報
 髪をアップ出て来た母をみちがえる
 二人ならアップダウンの道たのしい
 いいお湯だ命がのびる音がする
 六甲に冬が来たよと火入れ式
 新米の湯気と香りと日本晴れ
 田舎から届いた包み母の味
 気付かねば夫の愛の大きさを
 出かかった刺を包んで言葉変え
 アップアップの家計操る妻の技
 いい本を読んだ満足感と寝る
 束縛がイヤで時計はしない主義
 作句力アップで臨む趣味の会
 「産んでよかった」母が至福の七五三
 努力せず成績アップ祈る孫
 収穫を終えてハイネの詩を拾う
 美人の湯妻はなかなか出てこない
 へそくりが形になった七五三
 美肌の湯老いに効くとは書いてない
 腕白が神妙顔で祝詞聞く
 霜月の空気も冴える七五三
 ラッピングはずせば無垢なこの私

洋 祥昭 修 三郎 恵子 静子 玲子 光久 渡子 一徳 文香 浩司 毅 折杭 宏造 武臣 茂 利子 無限 武彦 美津子 千賀子 弘子 比ろ志 ひとみ

秋惜しむ京散策の古い二人
 包むだけ包んで頼む親不孝
 ゆつくりと包みはげしくはがれたい
 七五三絵馬にでつつかく宙の旅
 30パーベースアップが懐かしい
 寒かろういとしく包むモミジの手
 温泉にカニさえつけば五ツ星
 おくるみに包まれ愛し呱呱の声
 偽物を包むと赤い舌が出る
 福よかな笑みで包んで解く法話
 こだわりのメニュー透かせば偽ばかり
 早く終らせよううんうん聞いている
 妻の待つ外湯のベンチ紅葉降る
 豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦 報
 指撓う勝負どころの一気寄せ
 五蘊皆死んでしまえば千の風
 深入りはしない気楽な姑の趣味
 ある方へ引き寄せられていくお金
 あんたのそのめらくらりに腹が立つ
 祭には寄せてもらえぬ新興地
 道祖神子らを守って生きている
 肩寄せた妻とは今は額寄せ
 そして今日逢わぬと決めた醉芙蓉
 秋灯をゆさぶつてくるカレントアー
 押し寄せる老いに負けじと派手な服
 山は暮れ老婆の民話佳境なり
 球根に来年の夢込めたコテ

秋果 忠 直 敏夫 勝弘 美籠 正和 千代 朋月 野鶴 盛夫 求芽 哲男 正彦 肇 庸佑 千恵子 幹治 美佐子 武彦 くらり 佳恵 堅坊 紀華 玲子

念ずれば花開く事知りました
物忘れみ仏の掌にすがる母

大山滝句座(鳥取)

新家 完司報

朗らかに育つ大根みな太い
カメムシの臭いのような偏屈さ
恋人がほしいでしょうねお月さま
偏屈な国が小島を狙つてる
信楽のタヌキに俺は似てきたよ
旦那さんが腹を叩いて唄つてる
信念を金という字がねじ曲げる
偏屈な答弁議事が進まない
得点は低いがいづも飲み歌う
底抜けの明るさ底がはかれない
この世の花涙もにじむひとり部屋
弟よ朗らかなので助かるよ
今日も行く歌をうたつて散歩道
偏屈と頑固な奴にハツケヨイ
全部可決数の力はおそろしい
柿や柚子孫のために植えている
同じこと訊いてる私ハツとする
朗らかなふりして暮らすケアホーム
ゆつくりとボケているので分らない

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

貝殻ひとつ残して孫の夏が過ぎ
まだ生きているぞと浅蜷砂を吐き
おはようと笑顔で妻としじみ汁
飲み過ぎた朝は蜆がいいらしい

文香 毅

恭昌 昭
満作 桃花

内臓の悲鳴を聞いているカルテ
清潔と不潔に馴れて強くなる
カルテ見て主治医いつもの話だけ
私のカルテ晴れたり曇つたり
胸奥の温度は書いてないカルテ
地球にも立派なカルテ欲しいです
ホッチキスで止めてある私のカルテ
聞く耳と見る目を病んでる政治
不潔なぞ微塵も見せぬ青い空
世界遺産富士に不潔は似合わない
店構え汚いけれど味で売る
シャツパンツ着て摘まむの止めてくれ
無菌でも不潔過ぎても生きられず
告白をしてから恋は下り坂
一日が勝負日暮れの早いこと
英語力ずば抜け国語の話せぬ子
早とちり後で気がつき損ばかり
憧れた山で還つてこない人
熱っぽい話題に飢えている師走
サクラよりゆつくり見れる秋桜
ありがとうゴメンナサイの持つ威力
朗報は日本思いの新大使

川柳さんだ(兵庫)

田中 童子報

大の字に寝るほっかりと秋の天
写りよし遺影の積もりが婚活用
嘸み合わぬままの夫婦が共白髪
柩にはよく焼けるよに酒も入れ
占領軍くれた自由が奪われる

淑子 和雄
恭子 野薫
健二

富子 紀子 公平 希久子 理恵 舞夢 眞澄 義 志華子 蕉子 善之 浩二 すみ子 捷也 千歩 照子 知之 正雄 日の出 げんえい みつ子 弘子

どのくらいで酔うか試した事がない
でんとした君にペコペコ似合わない
かす汁を食べてテンション上がる子等
人生いろいろ島倉千代子イッチツチ
ゆつたりの二人旅には邪魔な孫
転ぶなよ家族がくれた散歩靴
一言の誤解うまらぬままに雪
それぞれに後書きがある人模様
朝風呂に沈みシナリオ練つている
川柳祭阿々大笑の笑い止め
品性を酒があばいていく夜更け
淋しいと派手なピンクが着たくなる
寒くなりましたので冬眠します
どうせなら本音はお酒ない時に
世の中が進み昭和が懐かしい
通帳の金額汗の匂いする
i PSややこしくなる進化論
お酒つて人を幸にも不幸にも
進むべき道も分からず人任せ
まるまると転ぶような笑い声
北海道熊より怖いJ R
酒なしで会話が弾む女の輪
桃色の声に財布がハイと言う
ふくよかな僕で良ければ差し上げる
当分は本物食わずレストラン
なんたっておいしい母の塩むすび
恐縮の盆受けるのは両手
たつぷりと呑んですぐ寝る嬉しい日

章子 順子 宣子 雅司 一泉 美籠 一子 茂山 ヨシエ 哲夫 光久 ひとみ ちあき 歳子 見 廣子 喜久子 雅尚 キヨミ 聖也 つな子 俊昭 武彦 好文 千津子 哲男 正和

秋日和ちよつと燥いのみたくなる
 きつちりと年金だけはすぐ減らし
 目障りな向かいの家のでかい門
 偽装食客に胡坐をかいている
 社の愚痴は置いてきました縄のれん
 夢ばかり追うなと諭す影法師
 夢たべて育つたらしいおおらかだ
 きつちりは出世しにくいお人柄
 お静かに小さな夢が目を醒ます
 お互いに添え木になろういう契り
 しなやかに揺れつつ強い花の芯
 好きなくせに目ざわりと言う愛し方
 なるほどとしばし楽しむ魚の字
 きつちりと拘り捨てて元の鞘
 母の夢みたのか枕濡れている
 四季それぞれテンポ速めている地球
 目障りなライバルがいて今がある
 投げ出さず添い遂げてみて味醸す
 目障りにならないように地味に生き
 くすくれば大仏だつて笑うだろう
 目障りにならない位置で善を積む
 夢一つ消えてあらたな夢を追う
 恋終り目障り捨てるシユレッダー
 言い添えた嫁の言葉が温かい
 酔うてもきつちり貰う領収書
 今の夢元気でいたい五輪まで
 目障りな奴だと敵も思つてる

いさお 求芽 かずお 満作 五月 実修 勝弘 郁夫 一步 賢子 あさ子 堅坊 柳弘 志華子 ルイ子 義昭 杵香 野笹 集一 美智子 麗 典子 倫子 榮子 克己

菓子皿に一つ残っているケーキ
目障りが居ないと妙に淋しいの
今日の目をきつちり生きていい笑顔
たもつ

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

かけ替えた橋ふる里を遠くする
 恋風に一時停車の鐘が鳴る
 告知の身心満たされ師走待つ
 同病で話がはずむ待合室
 ひるさがり一汗かいて膝まくら
 むかむかを押さえて笑顔あしんど
 医者信じ一つの命預けます
 毎年の年越しそばに願ひ込め
 ゴミ出しに無気味極まるカラスたち
 気がつけば亡母の背中を追っている
 むかむかをぶつけた後は苦い水
 合鍵を渡される程信じ合い
 風の神年の終わりと戸をたたく
 平和の味確と味わう年の暮れ
 秒針の音に追われる余命表
 年末の風に諭吉が飛んでゆく
 母の背が信じる振りをしてくれた
 一時の心を癒やす紅葉狩り
 ごちやごちやとうるさい虫をやっつける
 そつとしてやれと大人の対処ぶり
 信じればみんな許せる癒やされる
 ATM信じてお札数えない
 むかむかとしても妻にはホイさよか
 天翔る駿馬のおもい賀状刷る

弘風 朝子 美也子 蔦子 咲貴 泰子 寛十郎 洋子 千代子 寿美子 柳明 初音 雪菜 里江 健二 純 紀乃 よしひさ 和子 野薫 ひとみ 靖鬼 ヨシエ 耕治 五月 哲夫

ああ言えばこう言う親に似た我が子
 愚痴も聞く主治医信じて通つてる
 年末近しひたすら走る四季の雲
 ビリケンさん信じてお手を探ります
 殺気かなまぶたのうちに砂嵐
 いろいろとありましたよねお千代さん
 今日も陽がまた沈みます元気で
 尾頭もサンマがよろし誕生日
 秋日和耳の掃除をしてもらう
 陽だまりの一時へ母を座らせる
 人生の転機だろうか一時雨

かずお 勝巳 比ろ志 奮水 菜々子 正和 見清 哲男 朋月 晴美 美籠

事務所便り

同人誌友の皆様の方に、「川柳塔」誌の
 購読をお勧めして頂けませんでしょうか。
 川柳を作る楽しみ、投句する楽しみ、読
 む楽しみを出来るだけ多くの方々を知つ
 て頂きたいのです。
 取り敢えず、ちよつと覗いてみたい方々
 のために、バックナンバーを用意してお
 ります。送料の90円切手を送って下さい
 ば本は無料で一冊お送り致します。又、
 講習用、展示会用等にはご希望の冊数を
 送料実費でご提供致します。是非ご利用
 下さい。尚、当月号は一冊800円と送
 料90円です。ご利用をお待ち致します。
 (山岡富美子)

句会名	日時と題	会場と投句先
岸和田 川柳会	18日(土) 14時締切 世界・もてなす・華やか スイーツ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	18日(土) 17時締切 輝く・きびきび・カレンダー	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳 ねやがわ	19日(日) 14時締切 新しい・未来・リストラ 自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	19日(日) 14時締切 式(共選)	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	19日(日) 13時30分開場 研ぐ・やんわり・裏ぎる	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	20日(月) 13時40分締切 予定・まちがう・したたか 自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	21日(火) 13時30分締切 馬・スタート・続ける わくわく・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	24日(金) 10時開場 学ぶ・見事・頼る・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳塔 すみよし	25日(土) 14時15分締切 合図・ジワジワ・新しい	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
はびきの 市川柳 会	26日(日) 14時締切 朝・膨らむ・そわそわ・グルメ	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうも ん社	26日(日) 13時30分開場 ルール・倍返し・しびれる	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南大阪 川柳会	27日(月) 18時開場 袋・ほめる・正しい・ジュニア	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	27日(月) 14時締切 サポート・頭・確か	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
和歌山 三幸 川柳会	句会400回・「七面」600号記念句会 31日(金) 11時開場 記念・和・歌・山・三・幸	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20番地 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

1月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北会 川柳会	新年会 4日(土)10時30分開場 意欲・越える・こつこつ・自由吟	錦城閣(大阪キャッスルホテル3F) 京阪・地下鉄天満橋駅下車 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉会 川柳会	4日(土)14時締切 巻く・香水・託す	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 な	8日(水)14時締切 歩く・夢・写真	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
川柳塔 さかい	10日(金)13時開場 始め・じっくり 折り句=いろは	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川柳会	10日(金)14時締切 光り・金・生命	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	11日(土)14時締切 リズム・学・時代	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
富柳会	新春句会 11日(土)12時締切 感謝・保・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL.0721-25-0603 池 森子
川柳塔 打吹	11日(土)14時締切 明日・仰ぐ・ばらばら	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 まつえ	11日(土)13時45分締切 新・太陽・走る・歌	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
八尾市民 川柳会	12日(日)14時締切 未来・夢・開く・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	12日(日)14時10分締切 兼題=新品・リサイクル・突然 課題吟=ガラス	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫
西宮北口 川柳会	13日(月)14時締切 決断・祈る・まごまご・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにのみや 〒662-0084 西宮市樋之池10-18-104 福島弘子
松露川 柳会	13日(月)10時30分締切 午・希望・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194-2 山本正光
川柳 あまがさき	14日(火)14時締切 拾う・恋・ちゃっかり・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	14日(火)13時30分締切 希望・明るい・やはり	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

ティータム、言葉遊び その3
アナグラムのすすめ

水野 黒 兔

アナグラムとはある文章なり言葉の音（おん）を自由に並べ替えて別の文章なり言葉を創作する遊びです。例えば蜜柑（みかん）は民家とか仮眠とか甘味にすることができます。単なる単語の並び替えでは面白みがありませんので失礼かもしれませんが、有名人のお名前でアナグラムさせて頂きますと

- 松田聖子 ↓ せこい妻だ
- 郷ひろみ ↓ ごみ拾う
- 平清盛 ↓ たらの木良い森
- 西郷隆盛 ↓ 誤解去りもうた
- 菊地寛 ↓ 鎮火聞く
- 菅直人 ↓ なんか音、おとんかな、

おかんとな、なんと顔、
女とか

田中角栄（たなかかくえい）もいろいろなアナグラムができます。高く買えない、高い絵描くな、泣く絵描いたか、などのほか、「鯛抱え泣く」は大相撲で初優勝力士の写真を見るようです。

先日、阪急電車で高槻市を通過する時「たかつきし」は橋高氏になることを発見しました。

次いで有名な俳句で試みます。
古池や蛙飛びこむ水の音

殿いずこ解ける帯踏む廁水
ふと見るといけずの親子詫びず囁む
いやはや、意味不明なアナグラムで申し訳ありません。懲りずに芭蕉や蕪村他の俳句のアナグラムに挑戦してみます。

逝く春や鳥啼き魚の目は泪（芭蕉）
花売りや君の抱く夢華と織る

唐崎の松は花よりおぼろにて（芭蕉）
母ら簿記世の中摩擦テロに檻

五月雨や大河を前に家二軒（蕪村）
前髪や縁台に酒鯛を煮れ

雨蛙おのれもベンキ塗りたてか（龍之介）
お手軽か雨漏り濡れたベキンの絵

九年母や我孫子も雪となりにけり（波郷）
ほく今夜姉と指切り喪に泣けり
この街のたそがれながき薄曇かな
（万太郎）

流れ来た祖国長野は初夏の街
むさしのの空真青なる落葉かな（秋桜子）
更科のそば大阪の街ナムル

次にいろはがるたのアナグラムを試みてみます。
一寸先は闇 ↓ 一気破産 休み
花より団子 ↓ 余は五段なり

総領の甚六 ↓ 苦慮運送の路地
身から出た錆 ↓ 坂で見たピラ

おしまいに斉藤茂吉と俵万智の短歌に挑戦です。
みちのくの母の命を一目みん一目みんとぞただにいそげる

減反の望みは美濃と飛驒の国意味問い
姫は地を血と染める

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

画家は恋願い胸から蜜の味苛立ち短気
と月が淋しい

柳界展望

ろ水の音

木本 朱夏

秋の天軽音楽が降って

くる 木本 朱夏

齢重ねてひらかなにな

る言葉 小島 蘭幸

★第67回青森県川柳大会

は11月10日開催。同人成績。

第3位 斉藤 焔

目覚めたらもう太陽へ

駆けている 石田 隆彦

第9位 高瀬 霜石

溜め息をつこう句読点

を打とう

★第7回岡山県川柳大会

は11月17日、津山市総合

福祉会館で開催。出席者

189名。同人成績。

津山市長賞 小島 蘭幸

おふくろの欲をよろこ

ぶことにする

★相生市もみじまつり川

柳誌上大会。同人の成績

次の通り。

大会賞 小林 わこ

母さんの風はときどき

頬を打つ

★兵庫県川柳祭 in 篠山は

12月1日開催。参加者237

名。事前投句者533名。同人成績は次の通り。

文部科学大臣賞

酒井 真由

黒豆のひと粒ずつに日

の恵み

兵庫県川柳祭篠山市実行

委員会賞

黒豆のふつくら煮える

日の平和 黒田 能子

★吹田市市民川柳大会。

同人秀句 山野 寿之

お見舞いに優しい嘘を

持つて行く

☆新家完司副主幹は11月

10日、東奥日報主催第67

回青森川柳大会に於て

「川柳に表われた食文化」

と題して講演。

☆柴原道夫氏（理事・堺

市）は、触光35号に書評

「富二」という壁―野沢省

悟現代川柳評論集」を発

表。

☆藤井正雄氏（同人・茨

木市）は朝日新聞大阪版

「なにわ柳壇」に400句入

選を記念して、句集「私

の百句パートIV」を発刊。朝日新聞紙上で紹介された。

▼計 報▲

■田中亜弥さん（同人・

米子市）は11月21日に逝

去。行年89。

■徳田ひろこさん（同人・

鳥取市）は11月21日に逝

去。行年78。

▽出 版△

◇はびきの市民川柳会

（会長・塩満敏氏）は合

同句集「白鳥」第6集を

上梓。B 6判88頁。

◇藤井正雄氏（同人・茨

木市）は、朝日なにわ柳

壇入選句「私の百句パー

トIV」上梓。B 6判80頁。

◇京都塔の会は会報500号

記念合同句集「千社札

其の八」を上梓。B 6判

120頁。

▽新誌友紹介△

三田市 今西 廣子

紹介者 北野 哲男

奈良市 高橋 仁志

紹介者 米田 恭昌

松山市 栗田 忠士

紹介者 黒田 茂代

松江市 古浦 青帆

紹介者 石橋 芳山

松江市 中筋 弘充

紹介者 石橋 芳山

奈良県 安福 和夫

紹介者 大内 朝子

香芝市 山下 純子

紹介者 西出 楓楽

神戸市 富永 恭子

紹介者 北野 哲男

▽お詫びして訂正△

▼12月号P11上段7行

目、津軽おもしろ景色↓

津軽発。P11上段13行目、

作句が多く↓佳句。P94

下段1行目、富林市。田

↓富林市。P103上段6

行目、開花子報花に花の

都合ある。↓花には。P

110、2段4行目、厄介を

飾っており↓飼っており。

常任理事会 12月5日(木)

①20回川柳塔まつり、90

周年記念川柳大会②高野

山合祀報告③拡大会議議

事進行案④定例確認事項

⑤各部報告事項

次回 1月7日(火) AM 10時

第63回 西大寺会陽川柳大会

と き 2月11日(火) 10時開場
ところ 西大寺ふれあいセンター
(JR赤穂線西大寺駅より徒歩7分、
両備バス西大寺バスセンターより徒歩5分)

会 費 1,500円(発表誌・記念品呈)
兼 題 (各題2句、11時30分投句締切)
「父」 小島 蘭幸 選
「波紋」 田辺 進水 選
「前」 芳賀 博子 選
「国」 三村 舞 選
「もしも」 草地 豊子 選
「迷う」 池上 英之 選
「浮」 紫 しめの 選

席 題(当日発表) 野島 全 選
問い合わせ 西大寺川柳社 野島 全
TEL(FAX) 086-943-4627

主 催 西大寺川柳社

「はなわらび」

第9回 誌上投句のご案内

兼題と選者

「安」 大野 風柳・長島 敏子 選
「居」 貞岡信太郎・井上せい子 選
「楽」 野島 全・大森 昭恵 選
「業」 新家 完司・本多 洋子 選

投句様式 添付の用紙または便箋を使用
(4題8句)。郵便番号・住所・氏名・
電話番号・必ず記入(何か一言・つ
ぶやき等お寄せください)

投句料 1000円

締 切 2月25日(火)

投句先 〒703-8267 岡山市中区山崎135-8
山本 美枝 宛

TEL/FAX 086-277-8354

主 催 「はなわらび」

美作国建国1300年 美作全国線流大会

開催日時 3月16日(日) 11時開場
事前投句 1月15日(水) 締切 消印有効
投句料①雑詠2句と課題「米」「備える」
各2句 2,000円
②雑詠2句 1,000円

題と選者

「雑詠」土居 哲秋・森中恵美子 共選
「米」久本にい地・大家 風太 共選
「備える」小林 妻子・西出 楓栞 共選
当日投句(12時50分、締切)
「鏡」西村みなみ 選
「新しい」大木 俊秀 選

送金方法

郵便為替・郵便小為替・現金書留のいづ
れかをご利用下さい。(切手の代用は不可)

郵便振替をご利用の場合

口座番号 00140-3-687741

加入者名 NHK学園

主 催 NHK学園

第54回 伍健まつり川柳大会

日 時 2月8日(土) 午前10時

場 所 松山市総合コミュニティセンター
企画展示ホール

(松山市湊町7丁目5番地)

TEL 0889-943-0393

宿 題 第一部・事前投句

(各題2句・未発表作に限る)

パニック(共選) 〔山本 毅 選
合田 繭子 選
養 殖 宇都宮 孝 選
金 魚 新家 完司 選

事前投句締切 1月10日(金)(当日消印有効)

参加費 2000円

送付先 〒791-8084 松山市石風呂町54
田辺 進水 宛

TEL 086-953-3314

主 催 愛媛県川柳文化連盟

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日 午後1時 西宮市立中央公民館

(阪急電鉄神戸線西宮北口下車 南出口徒歩3分)

プレラにしのみや4F

投句先 〒662-0084 西宮市樋之池町10-18-104 福島弘子

亀株片長小緒江梅上井市伊石足浅秋奥西
岡元山川倉方谷澤垣上坪田原立野元田口
哲玲 哲 美勝盛キじ武 歳 房てみい
子子忠夫藍子弘夫ミう臣毅子茂子る子
能西難七長富都田竹白酒小黒蔵久木北河
勢内波田浜山倉中山川田林田田田村野井
利朋伯順美ルイ求章千淑浩わ能光千貴哲庸
子月備子籠子芽子子子司こ子子代子男佑
両山山山山山山丸松松牧堀古藤藤藤福春
川本田田崎崎口山下井渕 川本岡井島城
無義婦耕武君光一 比文富正奮 り宏弘年
限子子治彦子久之志香子和水直こ造子代

初心者にもベテランにも役立つ！

川柳の理論と実践

B 6 判・326頁 税込 1680円 (送料込 2000円)

新家完司川柳集 (六)

平成二十五年

税込 1050円 (送料込 1000円 + 80円切手 3 枚)

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司
TEL0858-52-2414 FAX0858-52-2449

あけましておめでとうございます 平成26年 元 旦

川柳塔さかい

会 長 河 内 天 笑

山本半銭	村上玄也	宮本かりん	伏見雅明	樋口冬虹	西村りつえ	中野健吾	遠山唯教	高木世紀子	島田誠一	齋藤さくら	古手川光	河内月子	奥時雄	大谷篤子	太田としお	榎本舞夢	梅木澄空
米澤俣子	矢倉五月	向井清	升成好	日野愿	原清晋	西内朋月	徳山みつこ	田部和幸	柴本ばっは	澤井敏治	小山永久	源田八千代	柿花和夫	荻野象山	太田扶美代	大久保のん子	榎本日の出

あけましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

会 員 一 同

〒689-0423 鳥取市鹿野町中園180
森山盛桜

あけましておめでとうございます

竹原川柳会

会 長 小島蘭幸

監 査 時広一路

会 計 岩本笑子

古田太虚

石原淑子

山内房子

ほか会員一同

明けましておめでとうございます

川柳あまがさき

高都小矢山井堀加軸西藤古酢村松木奥松山西長
野倉熊野本上 川丸部田川谷山村村村下田内浜
政求江野幸 正靖勝イ雪奮亀あ里美代五比ろ耕朋美
江芽美薫香龍和鬼巳ミ菜水子り江子月志治月籠

内北山長酒江阿田九大上大中渡大上谷北扇片吉
田川口川井見野原鬼浦田久井辺岸垣野野山井
美也 ヨシ哲健見寿寛十洋初ひと泰茂柳和キヨミ祐哲よしひさかず
子純エ夫二清子郎子音み子幸明子ミ康男さお

明けましておめでとうございます

川柳ふうもん吟社

会長 両川洋々
会員一同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3
中村金祥
TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日 13:00～
会場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

明けましておめでとうございます

河内長野市川柳協会

松	谷	梶	石	木	山	黒	坂	村	山	水	会	顧
岡		原	田	見	室	岩	上	上	岡	谷	員	板
	久	弘	隆	孝	光	靖	淳	直	富	正	志	尾
篤	美	光	彦	代	弘	博	司	樹	美	子	岳	問
	子								子	子		人

明けましておめでとうございます

いずも川柳会

会長 竹 治 ちかし

会 員 一 同

事務局 〒693-0006

出雲市白枝町423 伊藤玲子方
TEL0853-23-3200 FAX0853-23-3201

明けましておめでとうございます

富 柳 会

藤 廣 井 久 石 柝 中 中 河 前 林 小 関 山 古 中 中 池
他 田 谷 澤 世 橋 尾 島 村 野 田 野 野 田 崎 井
一 武 千 寿 高 未 奏 彦 登 澄 紅 よ 寿 千 深 ア 森
同 人 恵 峰 鷺 知 子 華 恵 次 子 子 朗 紫 し み 之 華 雪 キ 子

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

あけましておめでとうございます

翠 洋 会

浅井 公平	安土 理恵	阿部 紀子	井上 照子	岩本 浩二	榎本 舞夢	大川 桃花	大久保 眞澄	太田 昭	奥田 みつ子	古今堂 蕉子	小谷 集一	佐々木 満作	
高杉 千歩	谷口 義	辻内 げんえい	津村 志華子	寺井 弘子	西出 楓楽	原田 すみ子	藤井 正雄	前川 善之	山本 希久子	横山 捷也	吉田 知之	米田 恭昌	渡辺 富子

江戸時代の、人と酒のこまごまとしたかわりを
知ろうとするとき、その資料として川柳に勝るものはない。

◆ 川柳で覗く江戸の酒事情 ◆

『江戸 酒の文化』 清博美著



B6判

232頁

定価 一三〇〇円十税

目次

- 第一章 江戸で飲んだ酒
- 第二章 酒と職業
- 第三章 酒と容器
- 第四章 四季折々の酒
- 第五章 年がら年中酒
- 第六章 酒の肴に(酒と故事)

発行所 川柳雑俳研究会

〒419-0313 静岡県富士宮市西山1417-2
TEL/FAX 0544-6510264
振替 002301217459
URL <http://www.edosenru.com/>

川柳羣

■主な作品

同人作品「羣群抄」
 近詠作品「羣の原」
 作品鑑賞 新家完司 大西泰世
 柳論 エッセイ 句会報ほか

■A5版 37頁 季刊(年4回)

年間 4000円(千込)
 発行人・編集人 梅崎流青

〒832-0087 福岡県柳川市七ツ家426 TEL.0944-72-6046
 振替口座 01760-2-120254
 E-mail house7@cello.ocn.ne.jp

あけまして

おめでとうございます

大阪川柳人クラブ

会員一同

会 計	幹 事 局	幹 事 長	副 会 長	会 長
中 川 隆 充	伊 達 郁 夫	竹 森 雀 舎	板 野 美 子	板 尾 岳 人
				磯 野 い さ む

あかつき川柳会

(鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会風刺の精神を現代に生かす(会則))

◆「あかつき」月刊300円

〈会報〉

◆(財)大阪保育運動センター

◆毎月②(金) 13時開場

〈句会〉

宮崎シマ子	塩満敏	山本柳昌	松本千鶴子	前田紀雄	西川ひろし	鈴木いさお	杉谷和美子	阪井勝久	加山勝弘	江島勝甲	荒川鈍吉	岩佐丹正	近藤美花	森村美一	川端歩
-------	-----	------	-------	------	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	-----

新年あけましておめでとうございます

川柳塔社のさらなる発展に微力を捧げます

2014年 正 月

川柳同友会みらい・くろぼこ川柳会

くろぼこ川柳会

会長・稲村遊子ほか会員一同

連絡事務所 〒689-0342
鳥取県鳥取市気高町殿410-2 稲村方
TEL. 0857-84-3149

川柳同友会みらい

会長・鈴木公弘ほか会員一同

全日本川柳鳥取大会記念 第14回春はくろぼこ川柳大会は
4月12日前夜交流会、4月13日句会の日程により行います
皆様のご参加をお待ちいたしております

〒689-0343
大会事務局 鳥取県鳥取市気高町飯里84-4 鈴木方
TEL. 0857-84-2882

あけましておめでとうございます

鳥取県川柳作家連盟

会長 春木圭一郎

会員 一同

連絡先 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方 春木圭一郎
TEL 0857-24-2834

賀 正

川柳ねやがわ

会員 一同

会長 山本三郎

事務局 高田博泉

あけましておめでとうございます

城北川柳会

会長 伊達郁夫

会員 一同

あけましておめでとうございます

川 柳 さ ん だ

会 員 一 同

例会：毎月第3火曜日 13時・三田市中央公民館

あけまして

おめでとうございます

六甲川柳会

メダカの学校

世話人

伊勢田 毅

黒田 能子

山口 光久

山口 美穂

両川 無限

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

水野 黒兔 藤澤 長一

小牧 信男 高嶋 勝

宮田 輝 田中 螢柳

藤原 桂子 米原 雪子

栗田 久子 寺井 柳童

多田 契子 中山 春代

神野 字乃子 松尾 美智代

笠田 幹治 池田 純子

貝塚 正子 荒木 郁子

樋口 順子 西村 康子

上田 陽子 飯牟禮 久仁子

太田 扶美代

句会 第二火曜日 午後一時より

勉強会 第四火曜日 午後一時より

場所 豊中市蛍池公民館

川柳茶ばしら

早川 遯行

板山 まみ子

金子 美千代

脇田 雅美

関本 かつ子

賀 正

はびきの市民川柳会

会長 塩満 敏 会員一同

目 次

- 第一章 女形のはじまりは日本武尊!?
- 第二章 江戸っ子は人真呂で目を覚ます!?
- 第三章 清少納言は煙った女だった!?
- 第四章 弁慶はお出かけ前に大忙し
- 第五章 元旦に、とても迷惑な一休さん
- 第六章 生煮えの五右衛門、一首ひねる
- 第七章 家康はトラの化身だった...?!

平凡社新書

定価：本体八〇〇円（税別）



江戸のヒーロー、
98人と1組と1匹を可笑しがる！
『江戸川柳おもしろ偉人伝一〇〇』
小栗清吾著

明けましておめでとうございます

豊中もくせい川柳会

会員一同

明けましておめでとうございます

京都塔の会

会員一同

明けましておめでとうございます

サークル 檸檬

吉村	山本	山本	山本	山口	松尾	前村	西村	西出口	西出口	長浜	古今堂	久保田	片岡	奥田	太田	井丸	浅野
久仁雄	義子	希久子	加お里	光久	美智代	たもつ	哲夫	楓楽	いわゑ	美籠	蕉子	千代	智恵子	みつ子	扶美代	昌紀	房子

あけましておめでとうございます

米子住吉川柳会

会 員 一 同

〒683-0804 米子市米原5-1-3-304
竹村紀の治

あけましておめでとうございます

南大阪川柳会

会 員 一 同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋6丁目駅③出口）
原則として第4月曜日・6時から

謹 賀 新 年 川柳塔まつえ吟社

主 幹 石 橋 芳 山

同 人 一 同

事務局 〒690-0001 松江市東朝日町206-7 石橋芳山方
TEL.090-2003-5846

あけましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹	齊藤 焔
副主幹	小寺 花峯
相談役	福士 慕情
顧問	森中恵美子
理事	波多野五楽庵
理事	岩渕 黙人
理事	福村 美鈴
理事	高橋 洋子
理事	肥後和香子
監事	高森 一吞
監事	小枝ふさゑ
会計	福士 慕情
ほか同人一同	

大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL 06 (6303) 7297

代表	磯野いさむ
世話人	足立 淑子
碓氷 祥昭	大堀 正明
竹森 雀舎	伊達 郁夫
内藤 光枝	藤井満洲夫
本田 智彦	森口 美羽
安井 英華	

※会場 駅前第二ビル5階(大阪市北区梅田1-2-2-500) ※開場 午後1時

年 賀

川柳藤井寺

川柳みささぎ

代表 高田美代子 会 員 一 岡

謹賀新年

和歌山県川柳協会

会長 三宅 保州

副会長 川上 大輪

【お問い合わせ先】 事務局長 古久保 和子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17

TEL 073-423-8930

明けましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会長 土田 欣之 会員一同

謹賀新年

和歌山三幸川柳会

主幹 三宅 保州

副主幹 古久保 和子

副理事長 喜田 准一

理事 田中 みね

玉置 当 代

川上 智 三

楠見 章 子

武本 碧

磯部 義 雄

事務局 〒640-8111

和歌山市新通七-一七

古久保 和子 方

TEL 073-423-8930

例会 毎月第四土曜日 12時30分

和歌山商工会議所

「バス停 和歌山市役所前」

あけましておめでとうございます

川 柳 塔 な ら

大内朝子 米田恭昌 中原比呂志 坊農柳弘 江島谷勝弘 森中博一 高畑おたか 中西賛郎 居谷真理子 渡辺富子 安土理恵 飛永ふりこ 加門萌子

会員一同

謹賀新年

川 柳 塔 唐 津

岩崎實 北村松風 吉富節子 坂本蜂朗 仁部四郎 山口高明

迎 春

川 柳 さ さ や ま 一 同

代表 遠 山 可 住

あけましておめでとうございます

川柳塔打吹

会員一同

〒682-0034 倉吉市大原637-3
牧野芳光

あけましておめでとうございます

本年もよろしくお願ひ申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪方
電話・FAX 073-462-7229

岸和田川柳会

明けましておめでとうございます

◆「さしせん」(月刊紙)

◆〈会報〉

◆毎月③(土) 13時開場
◆市立福祉総合センター

◆〈旬会〉

久瓦柿稲飯山小仲助佐宮藤次石中藤増雪岩
保田谷花葉田本島谷川藤野井井田岡原田本佐
益正和 忠蛙笑弘和幸みつ康義ひろ香 隆珠ダン
祥幸夫洋太城司子美子江信泰子代昭昭子吉

— 飛躍の年に！ —

本年も **川柳大阪** を

よろしくお願い申し上げます

部長 長井 善純

会 員 一 同

あけましておめでとうございます

岩美川柳会

会 員 一 同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115

TEL 0857-72-0762

山 下 蟹 郎

明
け
ま
し
て
お
め
で
と
う
ご
ざ
い
ま
す

**熊
本
川
柳
会**

高
野
宵
草

永
田
俊
子

岩
切
康
子

賀 正

川 柳 塔 社

常任理事 “ “ 副理事長 “ 副主幹 理事長 主幹 名誉主幹

森 水 坊 佐 古 片 江 足 鶴 木 河 新 川 西 小 河
 村 野 農 々 今 山 島 立 田 本 内 家 上 出 島 内
 美 黒 柳 満 蕉 か 勝 遠 朱 月 完 大 楓 蘭 天
 花 兎 弘 作 子 ず お 弘 茂 野 夏 子 司 輪 楽 幸 笑

山 森 松 鈴 坂 久 柿 居
 崎 松 原 木 保 田 花 谷
 武 ま 寿 い 祐 千 和 真
 彦 っ 子 さ 之 代 夫 理
 お 子 お 之 代 夫 子

川柳塔社常任理事会

第38回 全日本川柳2014年富山大会

日時 平成26年6月29日(日) 午前9時開場
富山国際会議場 メインホール

〒930-0084 富山市大手町1-2

TEL 076(424) 5931

交通機関

JR富山駅から、徒歩：城址大通りを南へ約15分
市内電車(セントラム)：約7分「国際会議場前」下車

後援(予定) 文化庁・富山県・富山市・富山県教育委員会ほか
宿題 第一部 4月15日締切(当日消印有効)

事前投句 一級(高校生も含む)部門

「コヒー」あきたけん選 「くすり」弘兼 秀子選

「どきどき」田中寿々夢選 「巡る」梅崎 流青選

事前投句 ジュニア(小・中学生)部門 船 牧野 芳光選

「自由を作る」川合 笑迷選 「風」 船 牧野 芳光選

専用用紙のない方は2×16cmの句箋紙一枚に一句を記入、各題
二句無記名、封筒の裏面に住所、氏名明記。

投句料 1,000円(定額小為替・現金書留を同封して左記宛に
郵送または郵便振替口座へ送金のこと(当日消印有効)。

小中高生は投句料無料。

投句先 〒530-0041 大阪府北区天神橋2丁目北1-11-905
一般社団法人 全日本川柳協会 宛

TEL 06(6352)2210 FAX 06(6352)2433

〒00970-913575 郵便振替口座

宿題 第二部(当日投句・11時締切)

「黒」高瀬 霜石選 「軽 い」恒弘 衛山選

「風 船」米島 暁子選

各題二句、当日配布の句箋に記入。

第二次選者 竹本瓢太郎 久保田半蔵門 大木 俊秀

田中八洲志 矢沢 和女

参加費他 四、〇〇〇円(参加費二、〇〇〇円・昼食他二、〇〇〇円)

表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞

(4)大会賞

ジュニア部門は賞状とメダル

全日本川柳富山大会実行委員長 砂 田 勝 行

〈表彰式典・前夜祭のご案内〉

◎表彰式典Ⅱ平成26年6月28日(土)午後5時半
(川柳文学賞・功労者・大会10回連続出席者)

◎前夜祭Ⅱ表彰式典後、同一会場
会場 富山第一ホテル(JR富山駅南口から徒歩10分)

〒930-0082 富山市桜木町10-10

TEL 076(442) 4411

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)

大会・前夜祭の問い合わせ先

〒930-0916 富山市向新庄1276-15

全日本川柳2014年富山大会実行委員会事務局 宛

TEL FAX 076(425) 1477

大会・前夜祭参加費の送金先 4月15日(必着)

郵便振替口座番号 00760101108610

全日本川柳富山大会実行委員会 宛

〈宿泊・観光ご案内〉

宿泊(一泊朝食付き・お一人様・税込み)

富山地鉄ホテル・アパヴィラホテル富山駅前

ホテルルートイン富山駅前・ホテルプライム富山

アパホテル富山駅前・富山第一ホテル

観光 税金込み 6,000円〜11,600円

観光 A 世界遺産「五箇山合掌集落」コース

6月28日(土) 午後1時〜午後4時40分 4,500円

集合場所 富山駅北口 午後1時

募集人員 最少催行人員 20名様

B 立山アルペンルート「室堂」と「鱒のすし」コース

6月30日(月) 午前9時〜午後4時30分 9,000円

集合場所 富山駅北口 午前9時

募集人員 最少催行人員 20名様

宿泊・観光の申し込み、問い合わせ先 (株)エヌトラベル

担当Ⅱ中井 清志 TEL 076(433)0048

編集後記

★松竹梅松は母屋という形 蔑乃

★平成の世も二六年目を迎えた。江戸の正月風景で今なお残っているものは、門松、七草粥、それ

に形は変わったが風揚げだろうか。冬晴れの河川敷で親子が風揚げを楽しんでいる。子どもよりも父親の方が夢中になっていたりして、微笑ましい光景だ。子どもたちにとって平穏で幸せな一年であってほしい。

★「誹風柳多留一二篇研究」を連載中の清博美先生は昭和48年暮れに「川柳雑俳研究会」を創立。このたびめでたく40周年を迎えられた。この間、機関誌「季刊古川柳」を一号の欠号も遅延もなく刊行。10年前には大病を患われたが、現在は一粒の葉も嚙まず、週に一度は

ゴルフを楽しまれておられる由。生涯、現役で研究を続けたいこと、出版に関する環境の悪さを危惧されていらつしやるが、益々のご活躍をお祈りしたい。

★日頃からお世話になっている辞書を書棚からひらいてみた。名歌名句鑑賞辞典、比喩表現辞典、逆引き頭引き日本語辞典、植物ことわざ辞典、文章表現辞典、カタカナ語欧文略語辞典、アメリカ俗語辞典、ことわざと故事名言分類辞典、聖書辞典、詩の辞典、配色辞典、江戸川柳辞典、古川柳風俗辞典、笑死辞典、川柳総合大事典1・2、日本語形容詞辞典・・・50冊近くはあろうか。

★今は亡き作家・開高健の愛読書は明治時代に発行された「大言海」ときく。辞書は時代を反映し、広大無辺の世界を内包し

ひとこと

私の雅号

同人・高野宵草さんの歯の治療がきっかけで川柳に入門。元来庶民派を自認する私は川柳に好意を持っていた。宵草さんには川柳のあれこれを根掘り葉掘り訊ねた。それは安っぽい川柳をやりたくないからである。

初投句の折、雅号を付けてくだいと言われた。一晩考えても何も浮かばない。全くのズブの素人である。けれども自分で考えたかった。その時、田中正坊さんの「こ

こは大阪やから正ぼんでええやん」と言うくだりが頭をよぎった。そうだ「ラテン」でゆこう。そして羅漢の「羅」と梵天の「天」をあてた。全くの自分自身の造語であり多方面に迷惑を掛けないか、ずいぶん心配したものである。しかし今は十三歳から一日も欠かさず、五十四年間親しんできた「ラテン音楽」の神様が授けて下さったものと、勝手に思っている。これ以上の感激はない。

(杉野 羅天)

ている。手垢にまみれた。使いた古された言葉ではない。若葉のように新鮮な感性で「いのちある一句」を指ししたい。

★厳しい冬はこれからが本番。お大事にお過ごしください。

(朱)

□「川柳雑誌」第二号から「...創刊号の発行部数とその売れゆきは、専門雑誌のレコードを突破したので同人一同歓声をあげて、更に活躍を期して...」

□浅田次郎千七百枚の力作「終わらざる夏」を読む。終戦三日後の八月十日、千島列島北端の占守島に残る関東軍二万五千に、ソ連軍が攻め、主人公三人の内二人が戦死、生き残った者たちは極寒のシベリヤに抑留されるという物語である。

□「川柳雑誌」第二号から「...創刊号の発行部数とその売れゆきは、専門雑誌のレコードを突破したので同人一同歓声をあげたので同人一同歓声をあげた。」

作者は、戦争は悲惨であり、悲劇を生むものだとよびかけていたように感じた。

(勝)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(3月号)

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「それから」(1月15日締切)

3月号発表

大内 朝子 選 — 共選 — 竹治ちかし 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

3月号発表 (1月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島蘭幸選
水煙抄 (8句)	川上大輪選
愛染帖 (3句)	新家完司選
檸檬抄「それから」 (2句)	竹治ちかし共選
大内朝子	
探る	
「ポリシー」	山田耕治選
「じわじわ」	福西茶子選
「マイシヤル」 (3句)	川崎ひかり選
山口光久担当	

4月号

檸檬抄「張り切る」
一路集「屋根」「カンパ」「はつらつ」
初歩教室「苦勞」

第32年度 夜市川柳募集

第8回「遊ぶ」鈴木公弘選
ハガキに3句 1月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料92円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一四年(平成二十六年)一月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道二一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
電話 (〇六)六七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

本社1月句会

と き 1月7日(火) 13時開場・13時40分締切
—開場時間、締切時間を変更してあります。ご注意ください。
ところ アウイーナ大阪 3階 葛城
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441

おはなし「第一回路郎賞から」
兼題「腕」
「さかずき」
「やんわり」
「新しい」
「願い」

小島蘭幸選
三宅保州選
安土理恵選
川端一步選
大内朝子選
村上直樹選
西出楓楽選

会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社2月句会

7日(金) 午後1時から
兼題「咳」「開く」「チャンス」
「鋭い」「直接」

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの

一句を募集します。

兼題

「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸 選
応募要領 郵便八ガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。

発表

本誌4月号にて発表いたします。

締切り

2014年1月31日(当日消印有効)

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区
大道1丁目14番17号 花野ビル201号室
川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

オニガキの

手作りの味わいに
こだわり続けて
五十七年

つぎごま



株式会社 オニガキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア (ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>